第15号井戸跡(第61・62図)

き－8－7グリッドに位置する。平面は不整円形で、径はおよそ2.1mを測る。壁はわずかにオーバー・ハングするものの、ほぼ垂直に掘り込まれた様子が窺える。覆土は崩落土と埋め戻し土からなる。

第76図11は中国産白磁碗の破片で、高台部径5.2cm、現存高1.9cmである。

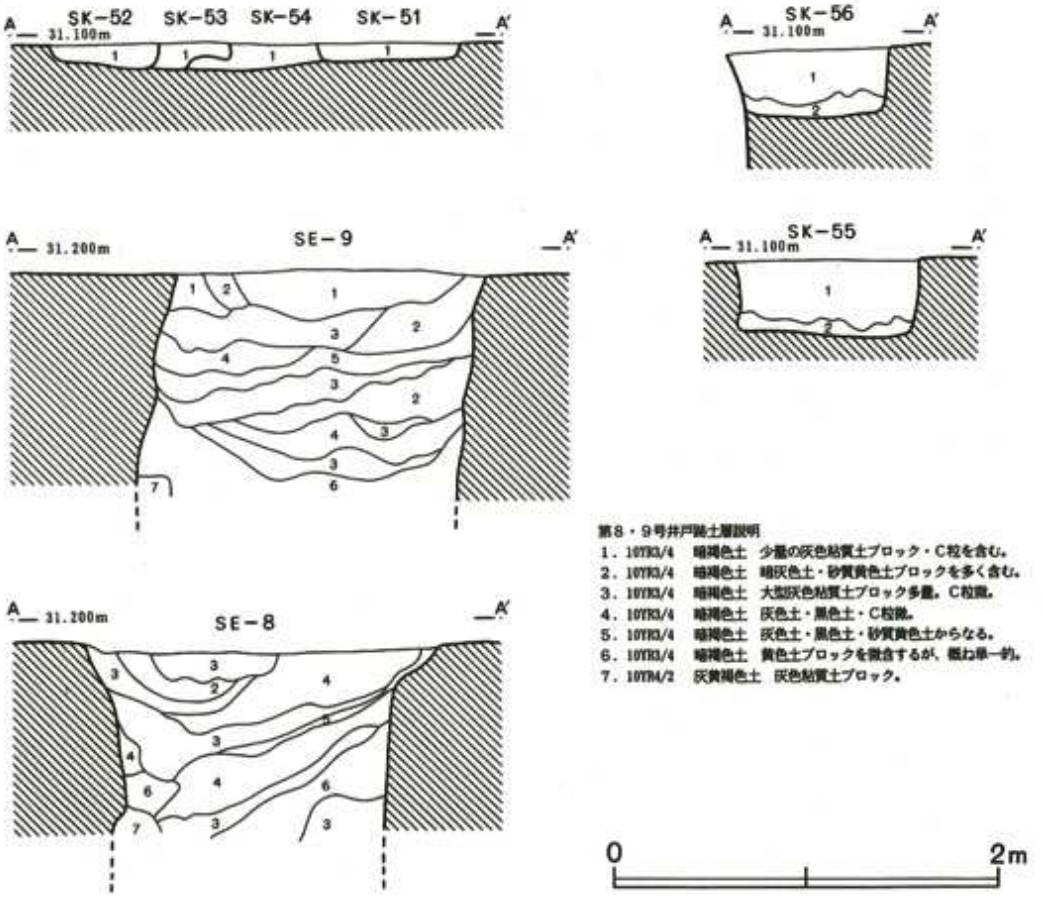
第16号井戸跡(第63図)

き－8－7グリッドに位置する。素掘りの井戸であるために壁の崩落が著しく、旧状は大きく損なわれている。現状は2.05m×1.8mの不整な鶏卵形で、断面形はかなり乱れる。覆土は崩落土と埋め戻し土からなり、後者は東側から投げ込まれた様子が看取される。

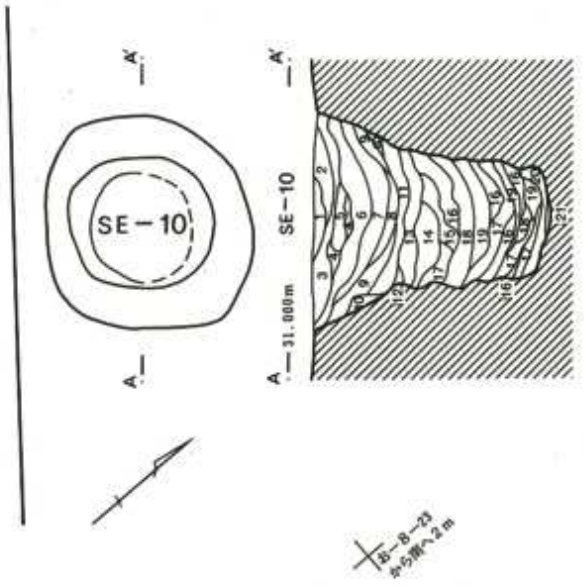
第77図9は板石塔婆の頭部片である。残存高21.6cm、幅19.2cmを測る。

第17号井戸跡(第62図)

き－8－1グリッドに位置する。平面は1.2m×1.4mの楕円形を呈し、断面形は漏斗状になるものと思われる。検出部位での覆土は2層に埋め戻しの可能性がある以外、概ね自然堆積を示している。なお、1層は本跡を切るピット状遺構の覆土と思われる。

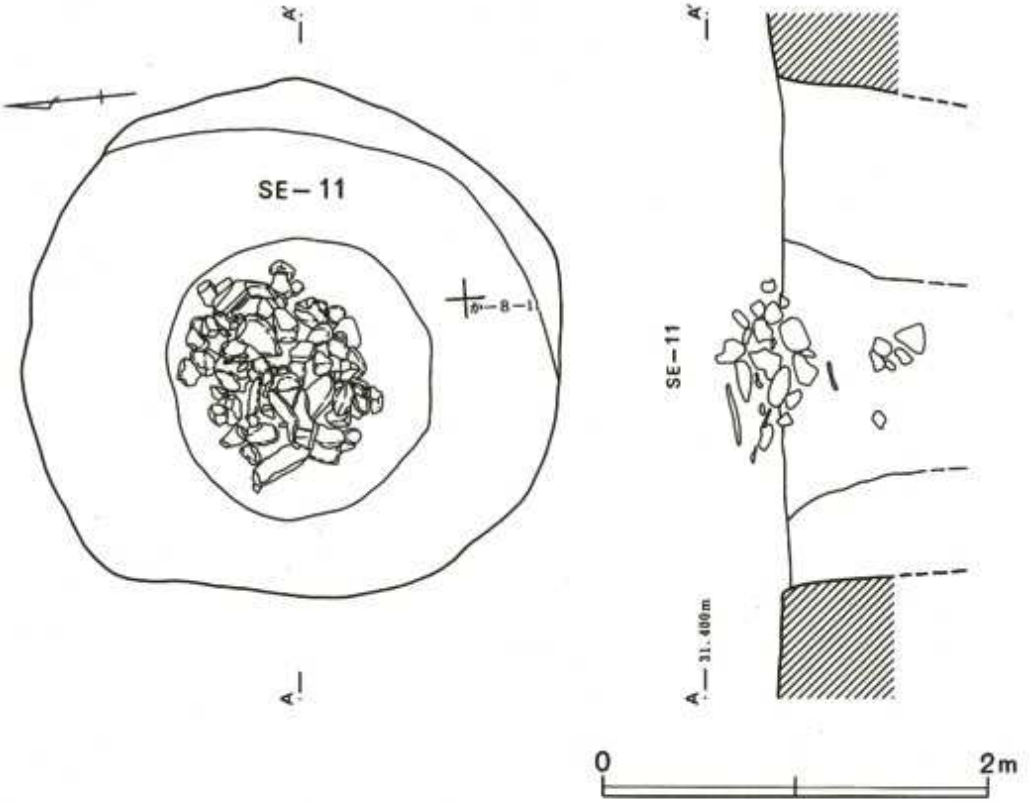


第58図　第8・9号井戸跡　第51～56号土坑(2)

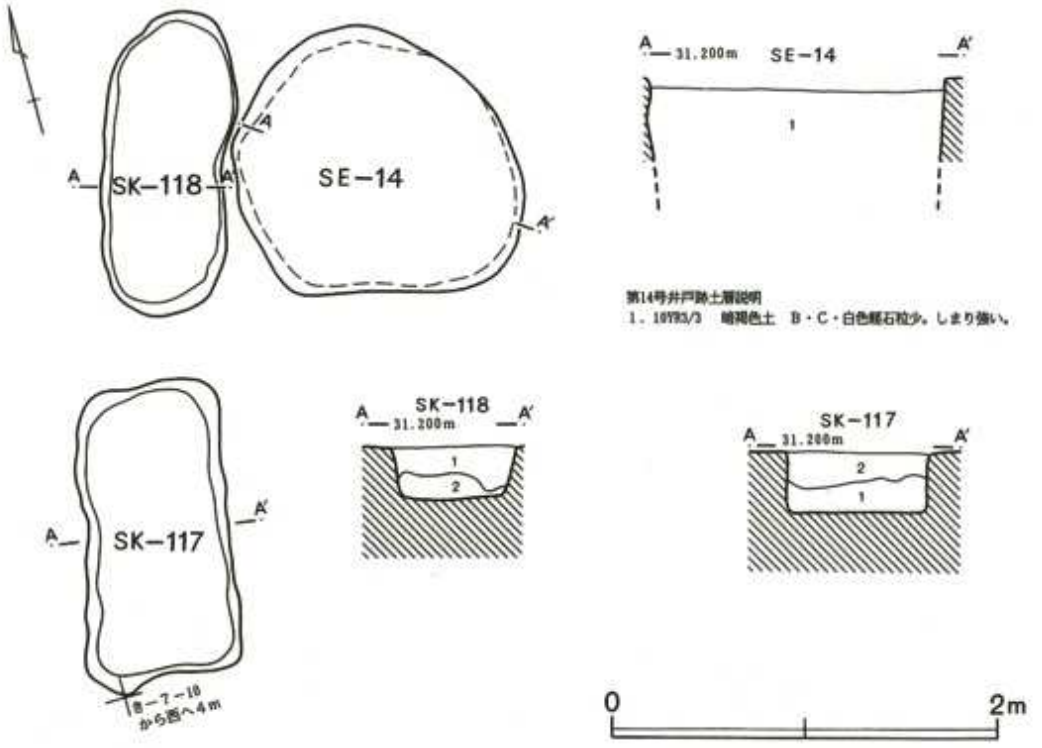


第10号井戸跡土層説明

1．10YR4/2　灰黄褐色土　粘質土。
2．10YR3/2　黒褐色土　粘質土。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘質土。
4．10YR4/4　褐色土　粘質土。
5．10YR2/2　黒褐色土　B・C粒を含む。
6．10YR3/1　黒褐色土　B・C粒を含む。
7．10YR4/3　にぶい黄褐色土　灰色粘質土を含む。
8．10YR3/4　暗褐色土　灰色粘質土を含む。
9．10YR4/4　褐色土　灰色粘質土を含む。
10．10YR4/6　褐色土
11．10YR4/2　灰黄褐色土　灰色粘質土を含む。
12．10YR6/1　褐灰色土　均質な粘土。
13．2.5Y5/3　黄褐色土　粘質土。C粒微。灰色粘質土を含む。
14．2.5Y6/3　にぶい黄色土　C粒微。暗黄色土・灰色粘質土を含む。
15．2.5Y5/1　灰黄色土　黄白色シルト・B・C粒・灰色粘質土を含む。
16．2.5Y4/2　暗灰黄色土　黄白色シルト・B・C粒・灰色粘質土を含む。
17．2.5Y6/2　灰黄色土　壁の崩落ブロック・灰色粘質土を含む。
18．2.5Y5/2　暗灰黄色土　B・C粒微。黄褐色土・灰色粘質土を含む。
19．2.5Y4/1　灰黄色土　B・C粒微。灰色粘質土を含む。
20．2.5Y4/3　オリーブ褐色土　粘質土。
21．2.5Y6/4　にぶい黄色土　粘質土。



第59図　第10・11号井戸跡



第60図　第14号井戸跡　第117・118号土坑

第18号井戸跡(第63図)

き−8−6グリッドに位置する。径1m×1.3mほどの楕円形、素掘りの井戸である。断面形は壁の崩落で定かではないが、多分筒形になるものと思われる。覆土は投棄された土からなるようであるが、均一的でしまりも良い。

第19号井戸跡(第64・65図)

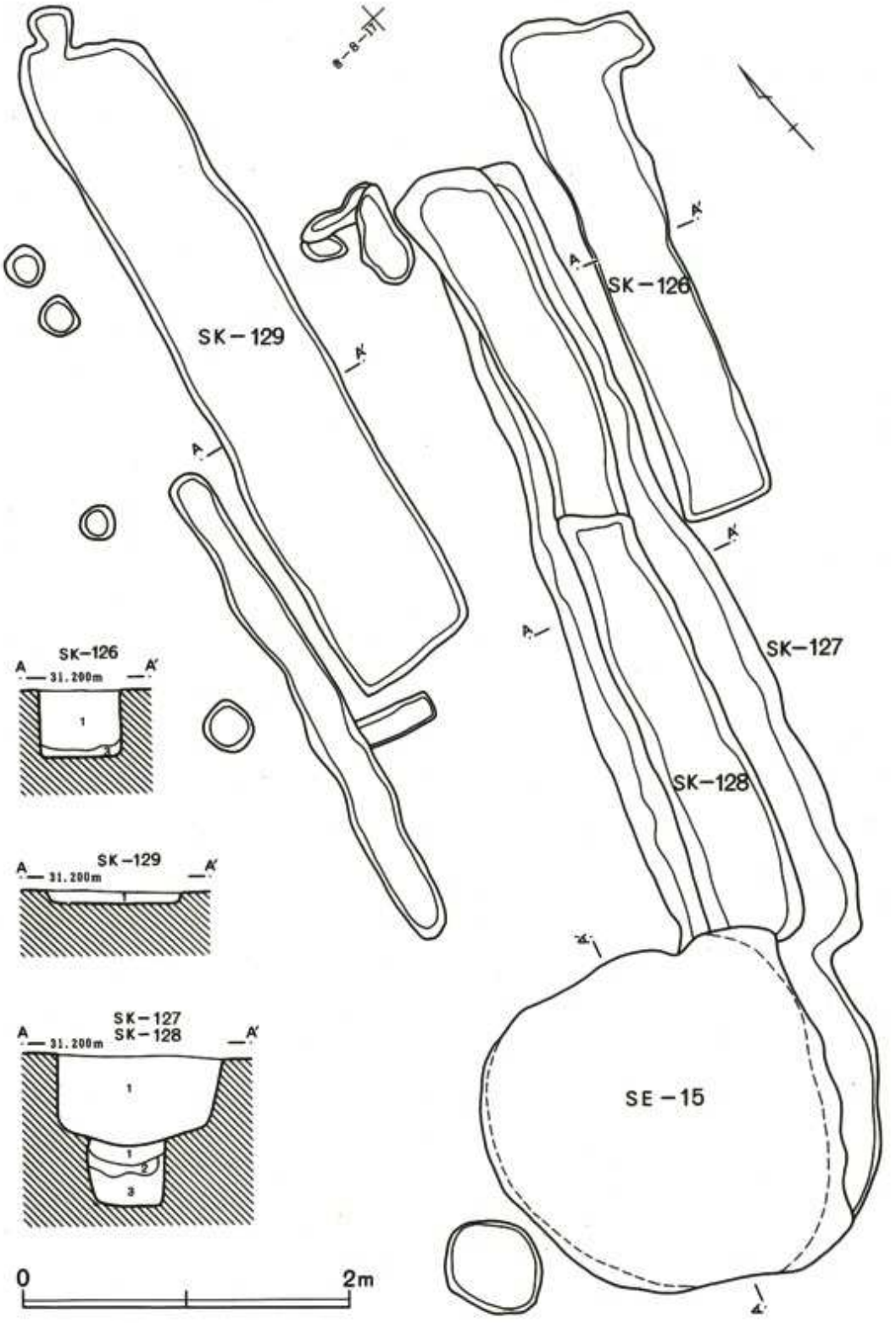
き−8−1グリッドに位置する。南側の大きく崩壊した素掘りの井戸である。第20号井戸跡と円形土坑(無番号)を切断し、第91号土坑に覆土上端まで切られる。1.17m×0.95mの不整な楕円形を呈するが、本来は円形であったと推測される。断面形は筒状となり、南西部のほかは垂直な壁が保たれている。覆土は大型のブロック土を多量に含むことから見て、おそらくは埋め戻されたものであろう。

第20号井戸跡(第64・65図)

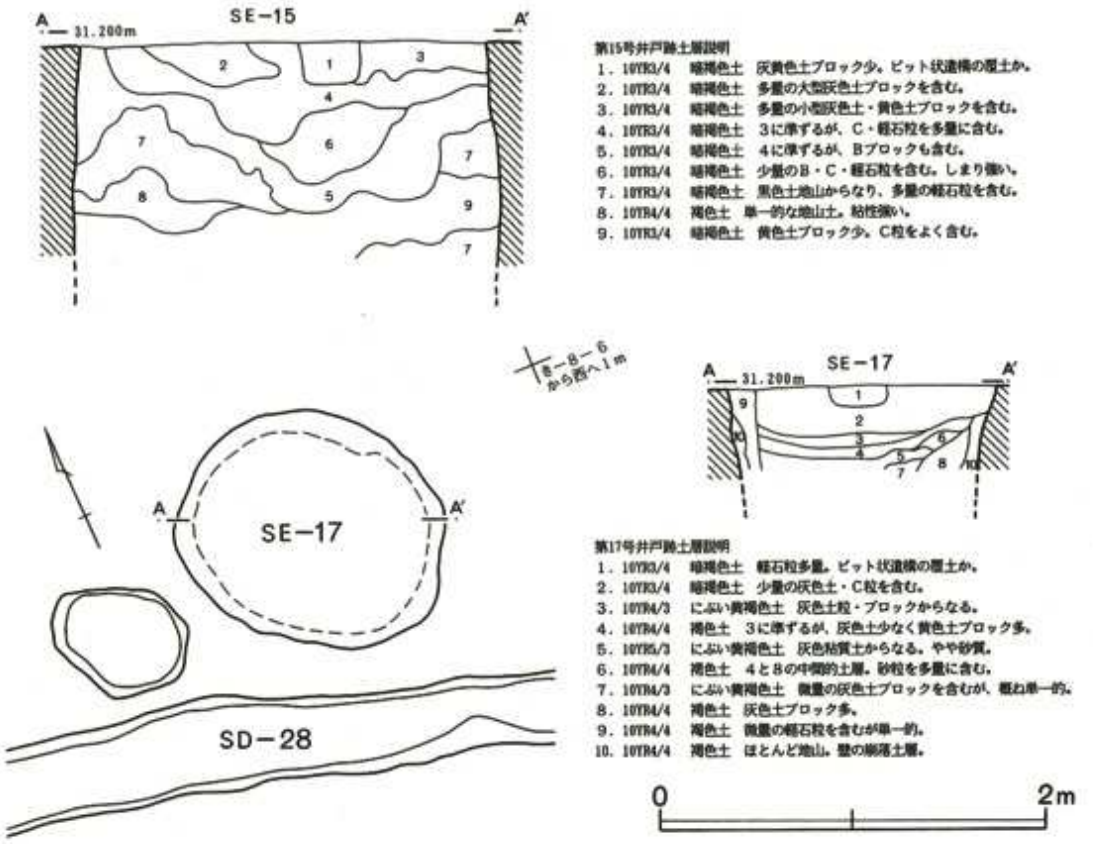
き−8−1グリッドに位置する。平面は直径約1.45mの円形で、断面はほぼ筒状となる。覆土はすべて埋め戻された土のようである。第90・91号土坑、第19・21号井戸跡に切断されている。

第21号井戸跡(第64・65図)

き−8−1グリッドに位置する。1.4m×1.8mほどの楕円形を呈する素掘りの井戸で、断面は筒形ないしは漏斗状になるものと思われる。埋め戻し土で構成される覆土は、北側から投げ込まれているようである。第20号井戸跡より新しく、第91号土坑より古い遺構である。



第61図　第15号井戸跡(1)　第126～129号土坑



第62図　第15号井戸跡(2)　第17号井戸跡

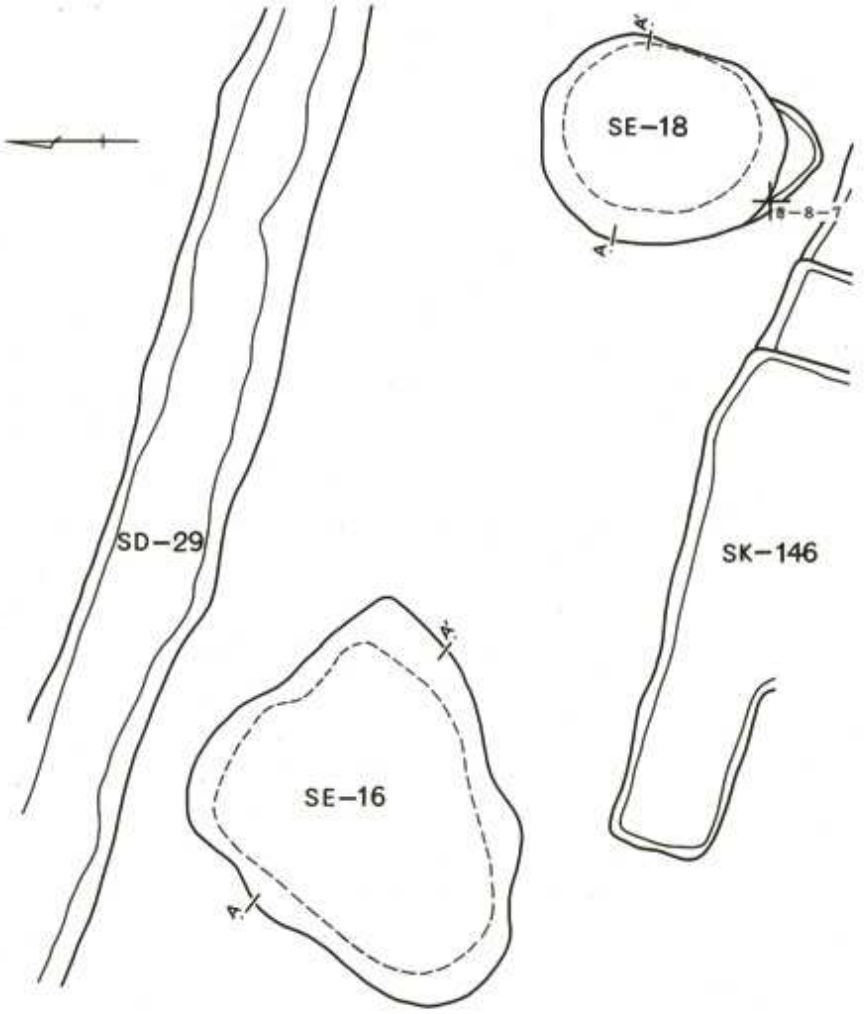
第92号土坑(第64・65図)

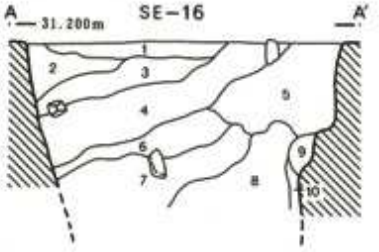
き−8−1グリッドに位置する。遺構確認時には土坑として調査したが、井戸跡の可能性が高いため、ここでは同列に扱うこととした。平面はおよそ1.2m×1.8mの楕円形、断面は漏斗状になると推測される。覆土は他の井戸跡とは異なり、土坑の覆土(1層)と同じである。単一層で、しまりが良い。

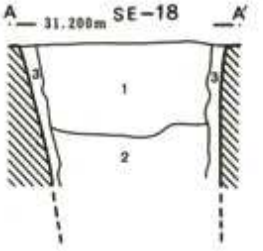
第22号井戸跡(第66図)

か−8−12グリッドに位置する。平面はほぼ円形を呈し、径は1.26mを測る。断面形は筒状となり、壁は垂直に掘り込まれている。覆土には大型のブロックが見られず、自然堆積のようである。この中より、流紋岩質凝灰岩の棹秤用分銅(第76図12)が出土している。

分銅は紐および肩部の一部を欠くが、遺存状態は良好である。現存高3.7cm、幅3.6cmを測り、底面は八角形を呈する。ドーム状に突出した紐は横方向、および頂部から縦方向に穿孔されている。肩部には2本の条線が刻まれており、表面は滑沢に磨きあげられている。重量は59.6gである。この分銅が中世のものであるとすれば、1斤(160匁)は約600gであるので、その10分の1の16匁に相当することになろう。





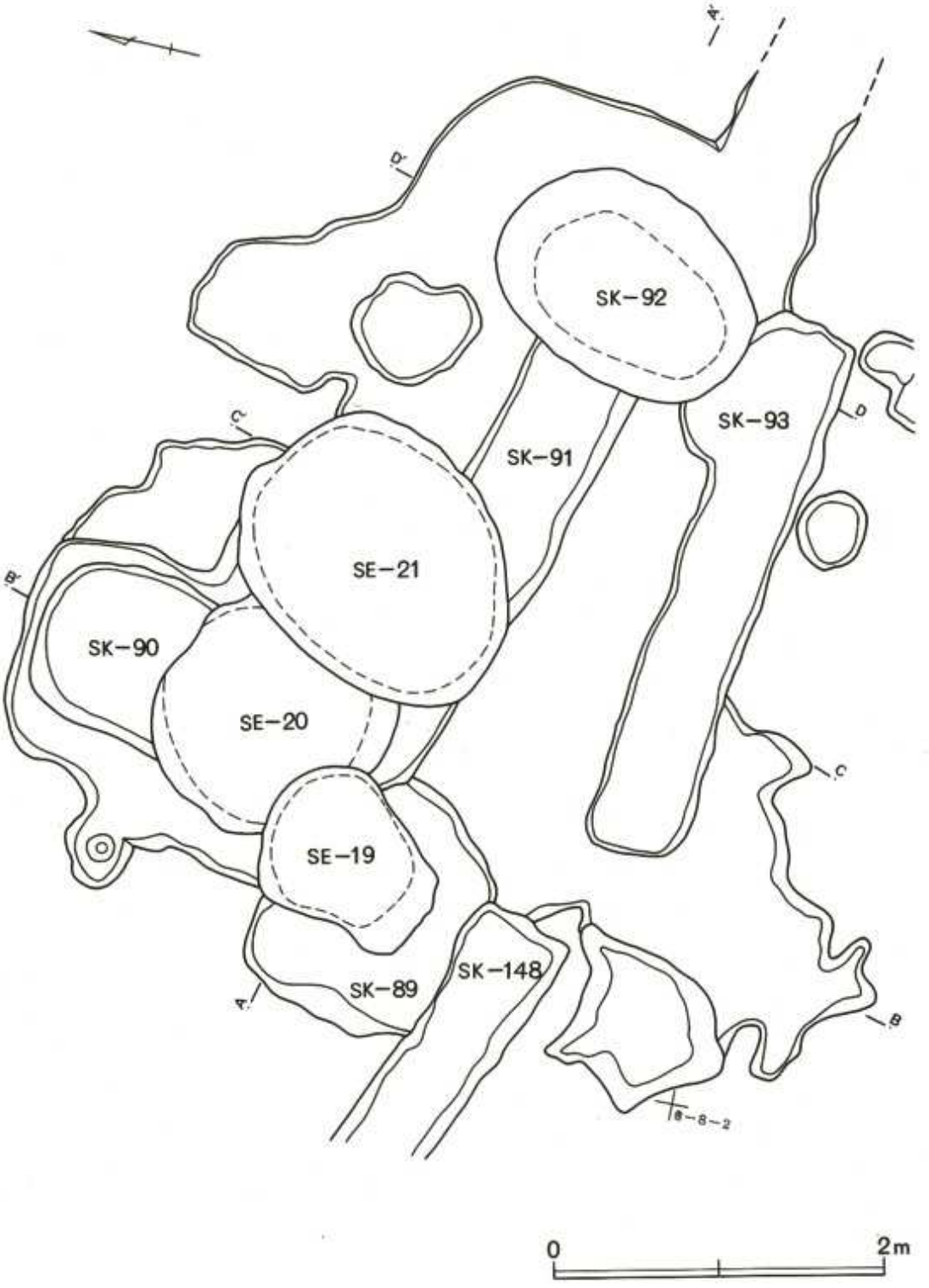


第16号井戸跡土層説明
1．10YR4/4　褐色土　灰色粘質土ブロック多。C粒微。
2．10YR4/4　褐色土　微量の灰色土粒を含むが、概ね単一的。
3．10YR3/4　暗褐色土　2に準ずるが、多量の灰色土・Fe粒を含む。
4．10YR3/4　暗褐色土　暗灰色粘質土ブロック・Fe粒多。
5．10YR4/3　にぶい黄褐色土　暗灰色粘質土ブロックからなる。
6．10YR4/3　にぶい黄褐色土　5に近似するが、色調暗く粘性強い。
7．10YR4/3　にぶい黄褐色土　5に近似するが、しまり強く粘土化している。
8．10YR3/4　暗褐色土　暗灰色粘質土ブロックを多く含む。
9．10YR4/6　褐色土　砂質。壁の崩落土層。
10．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘質土。壁の崩落土層。

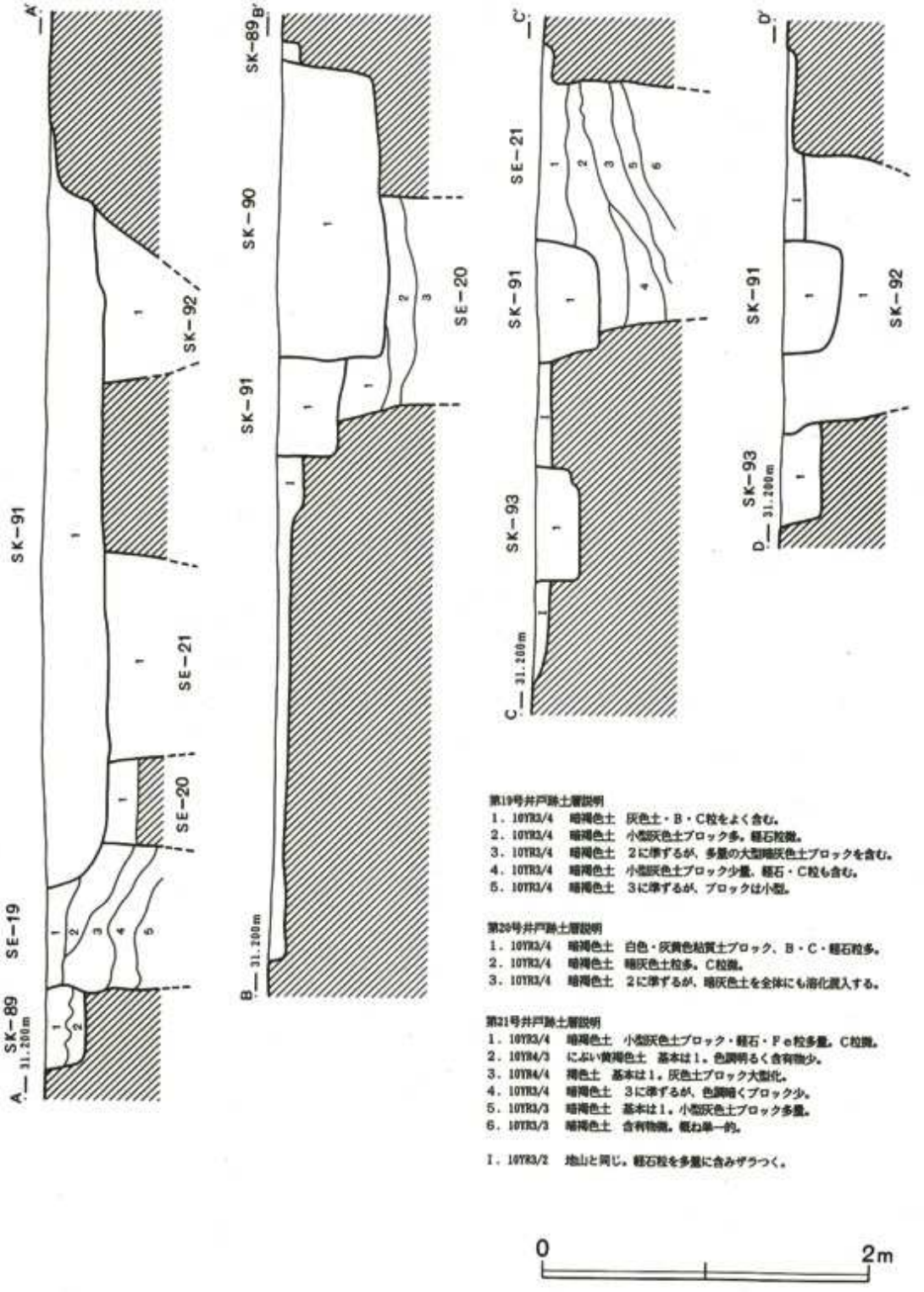
第18号井戸跡土層説明
1．10YR4/3　にぶい黄褐色土　小型の灰色粘質土ブロック少。C・Fe粒微。
2．10YR3/3　暗褐色土　多量のCを含むが、概ね単一的。
3．10YR3/4　暗褐色土　ほとんど地山。壁の崩落土層。

0　2m

第63図　第16・18号井戸跡



第64図　第19～21号井戸跡　第89～93号土坑(1)



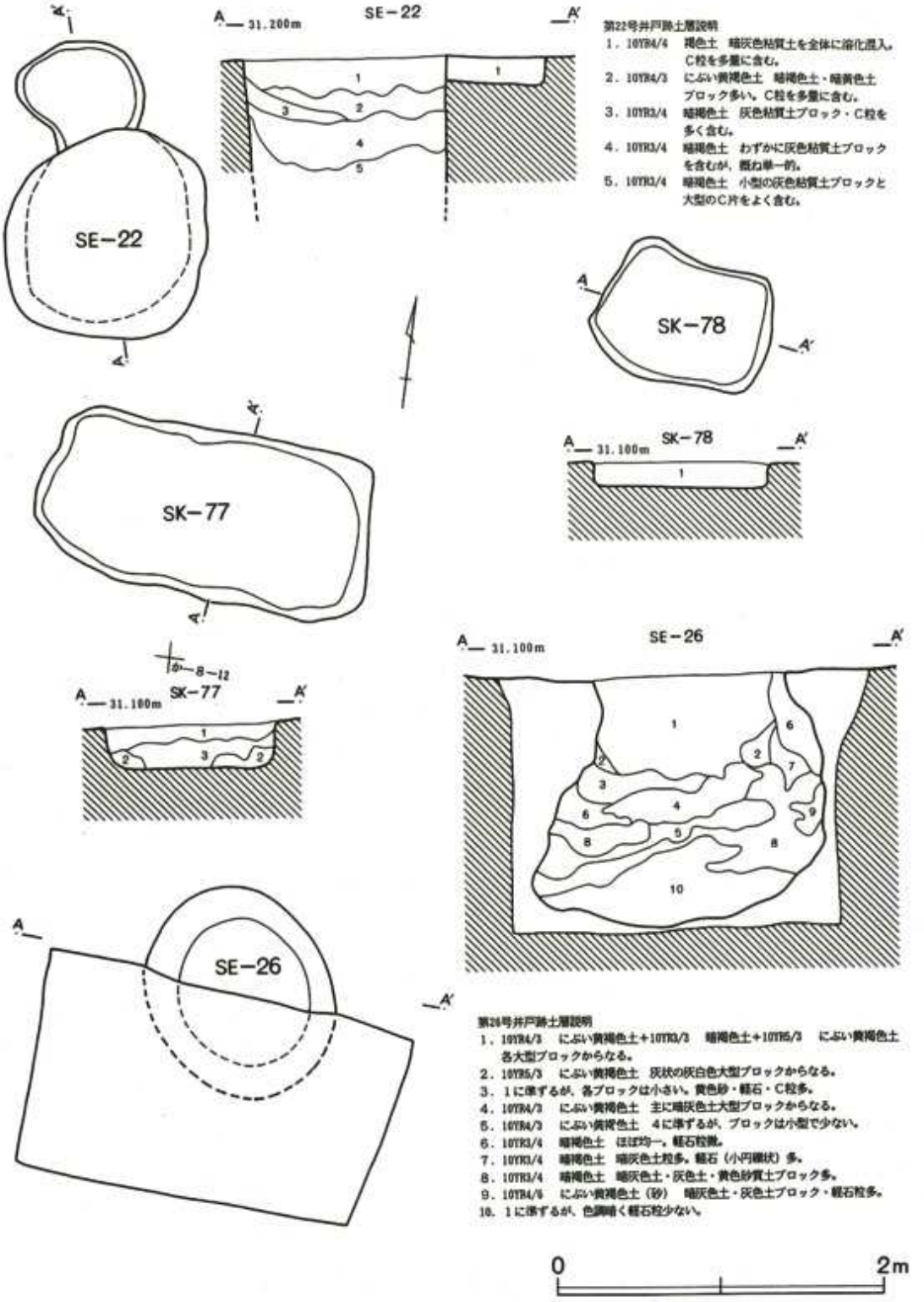
第19号井戸跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　灰色土・B・C粒をよく含む。
2．10YR3/4　暗褐色土　小型灰色土ブロック多。軽石粒微。
3．10YR3/4　暗褐色土　2に準ずるが、多量の大型暗灰色土ブロックを含む。
4．10YR3/4　暗褐色土　小型灰色土ブロック少量。軽石・C粒も含む。
5．10YR3/4　暗褐色土　3に準ずるが、ブロックは小型。

第20号井戸跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　白色・灰黄色粘質土ブロック、B・C・軽石粒多。
2．10YR3/4　暗褐色土　暗灰色土粒多。C粒微。
3．10YR3/4　暗褐色土　2に準ずるが、暗灰色土を全体にも溶化混入する。

第21号井戸跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　小型灰色土ブロック・軽石・Fe粒多量。C粒微。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色土　基本は1。色調明るく含有物少。
3．10YR4/4　褐色土　基本は1。灰色土ブロック大型化。
4．10YR3/4　暗褐色土　3に準ずるが、色調暗くブロック少。
5．10YR3/3　暗褐色土　基本は1。小型灰色土ブロック多量。
6．10YR3/3　暗褐色土　含有物微。概ね単一的。

I．10YR3/2　地山と同じ。軽石粒を多量に含みザラつく。

第65図　第19～21号井戸跡　第89～93号土坑(2)



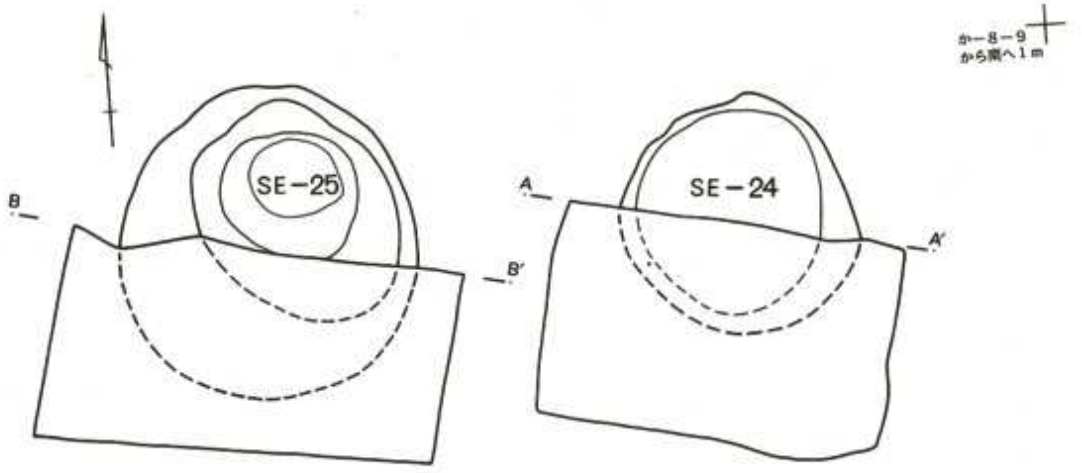
第22号井戸跡土層説明

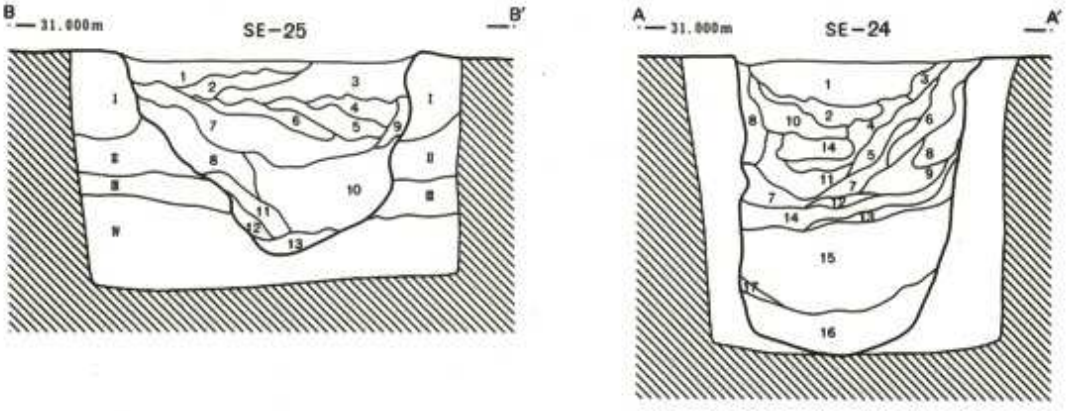
1. 10YR4/4　褐色土　暗灰色粘質土を全体に溶化混入。C粒を多量に含む。
2. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　暗褐色土・暗黄色土ブロック多い。C粒を多量に含む。
3. 10YR3/4　暗褐色土　灰色粘質土ブロック・C粒を多く含む。
4. 10YR3/4　暗褐色土　わずかに灰色粘質土ブロックを含むが、概ね単一的。
5. 10YR3/4　暗褐色土　小型の灰色粘質土ブロックと大型のC片をよく含む。

第26号井戸跡土層説明

1. 10YR4/3　にぶい黄褐色土＋10YR3/3　暗褐色土＋10YR5/3　にぶい黄褐色土各大型ブロックからなる。
2. 10YR5/3　にぶい黄褐色土　灰状の灰白色大型ブロックからなる。
3. 1に準ずるが、各ブロックは小さい。黄色砂・軽石・C粒多。
4. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　主に暗灰色土大型ブロックからなる。
5. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　4に準ずるが、ブロックは小型で少ない。
6. 10YR3/4　暗褐色土　ほぼ均一。軽石粒微。
7. 10YR3/4　暗褐色土　暗灰色土粒多。軽石（小円礫状）多。
8. 10YR3/4　暗褐色土　暗灰色土・灰色土・黄色砂質土ブロック多。
9. 10YR4/6　にぶい黄褐色土（砂）　暗灰色土・灰色土ブロック・軽石粒多。
10. 1に準ずるが、色調暗く軽石粒少ない。

第66図　第22・26号井戸跡　第77・78号土坑





第25号井戸跡土層説明

1．10YR4/3　にぶい黄褐色土　暗灰色粘質土ブロック多。軽石・C粒少。
2．10YR3/4　暗褐色土　パサパサでしまりの弱い暗灰色土ブロック多。小円礫多。
3．10YR3/4　暗褐色土　基本は2。黄色土小型ブロック多。
4．10YR3/4　暗褐色土　暗灰色粘質土ブロック多。軽石粒少。
5．10YR3/4　暗褐色土　暗灰色粘質土小型ブロック多。軽石・Fe粒多。
6．10YR3/4　暗褐色土　暗灰色土・黄色土粒からなる。軽石粒微。
7．10YR3/4　暗褐色土　灰色土ブロック・軽石粒多。黄色土粒少。
8．10YR4/3　にぶい黄褐色土　暗灰色土・暗褐色土大型ブロックからなる。
9．10YR4/4　褐色土　暗灰色土・軽石粒・小円礫多。B粒微。
10．地山Ⅰの流入土層。
11．10に暗灰色土ブロック・小円礫が混じた土層。
12．10YR3/3　暗褐色土　概ね単一的な粘質土層。
13．地山Ⅱの流入土層。

第25号井戸跡地山土層説明

Ⅰ．10YR4/4　褐色土　主に暗灰色粘質土ブロックからなる。軽石粒・小円礫多。
Ⅱ．10YR3/4　暗褐色土　灰状の灰白色粘質土＋軽石（小円礫状）＋砂粒。
Ⅲ．10YR3/4　暗褐色土　暗灰色粘質土と暗褐色土の小型ブロックからなる。
Ⅳ．10YR4/3　にぶい黄褐色土　主に暗灰色粘質土大型ブロックからなる。

第24号井戸跡土層説明

1．10YR3/3　暗褐色土　暗褐色土・暗黄色土・軽石粒多。C粒微。
2．10YR3/3　暗褐色土　暗褐色土小型ブロック多。軽石・C粒微。
3～9．10YR3/3　暗褐色土　基本は2。大型のB・Cを多量に含む。
分層はB・Cの含有量の差によった。
10～13．10YR4/3　にぶい黄褐色土　基本は14。B少なく、C・灰が極めて多い。
分層はC・灰の含有量の差によった。
14．10YR4/3　にぶい黄褐色土　大型灰色土ブロックからなる。Fe多。
15．10YR3/4　暗褐色土　大型暗褐色土・小型褐色土ブロックからなる。小円礫含む。
16．10YR4/2　灰黄褐色土　基本は15。ほとんど大型暗灰色土ブロックからなる。
17．10YR4/2　灰黄褐色土　16に準ずるが、Cの薄い層をはさむ。

第67図　第24・25号井戸跡

第24号井戸跡(第67図)

か－8－4グリッドに位置する。直径1.15mの円形を呈する素掘りの井戸である。断面形はU字形の筒状となり、遺構確認面からの深さは1.56mを測る。底面は広く、やや丸みを有している。覆土は下半の第15・16・17層が崩落した地山(壁)、上半のものは細分したが、すべて埋め戻された土である。

第25号井戸跡(第67図)

か－8－4グリッド、第24号井戸跡の西側1mに位置する。平面は円形で、径は1.5mほどである。素掘りで壁の崩落が激しい。このため断面形は大きく崩れ、全体は摺鉢状となっている。確認面から底面までは1.05mと浅く、砂礫層までは達していない。覆土は下半が崩落土、上半が埋め戻し土である。

第26号井戸跡(第66図)

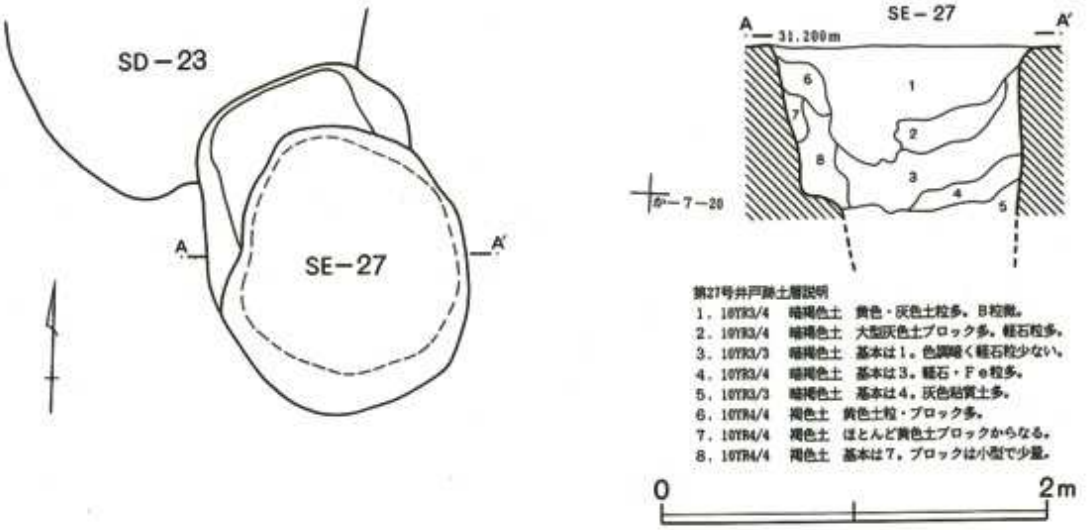
か－8－6グリッドに位置する。平面は径1.2mほどの円形で、素掘りである。壁の崩落は特に激しく、断面はフラスコ状に変形している。確認面からの深さは約1.5mである。覆土はほとんどが崩落土で、大型の地山ブロックで構成されている。

第76図5の口縁部破片は古瀬戸の灰釉盤で、覆土中位より出土している。年代的には15世紀前半期のものであろう。

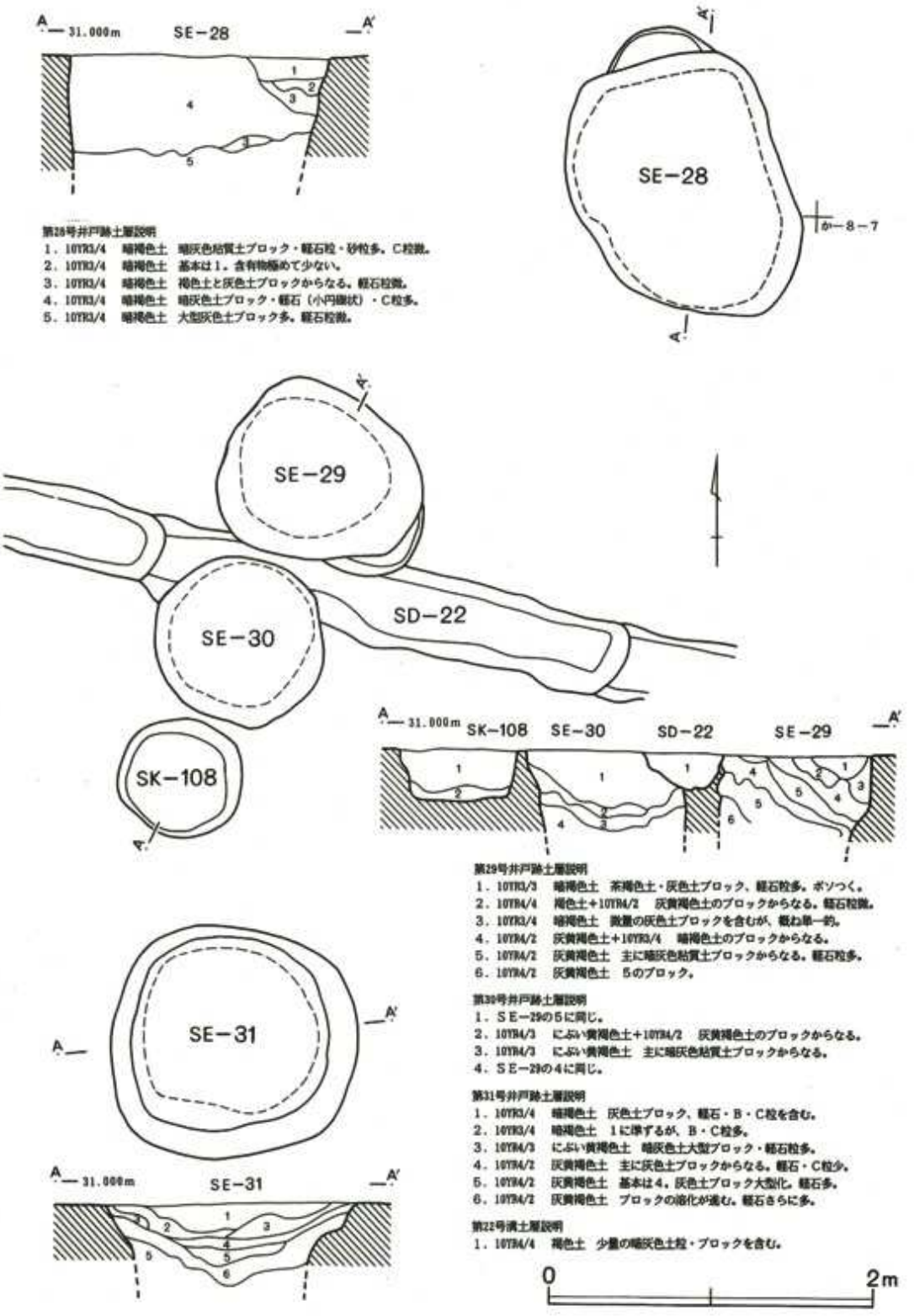
第27号井戸跡(第68図)

か－7－15グリッドに位置する。平面はおよそ径1.5mの不整円形だが、壁の崩壊で北側に半円状の突出部を形成している。本来、断面は筒形であったと思われるが、突出部ではテラス状の段ができている。覆土はほとんどが崩落土のようである。

覆土中より、スタンプ文の押印された常滑産の甕破片(第76図6)が出土している。



第68図　第27号井戸跡



第28号井戸跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　暗灰色粘質土ブロック・軽石粒・砂粒多。C粒微。
2．10YR3/4　暗褐色土　基本は1。含有物極めて少ない。
3．10YR3/4　暗褐色土　褐色土と灰色土ブロックからなる。軽石粒微。
4．10YR3/4　暗褐色土　暗灰色土ブロック・軽石（小円礫状）・C粒多。
5．10YR3/4　暗褐色土　大型灰色土ブロック多。軽石粒微。

第29号井戸跡土層説明
1．10YR3/3　暗褐色土　茶褐色土・灰色土ブロック、軽石粒多。ボソつく。
2．10YR4/4　褐色土＋10YR4/2　灰黄褐色土のブロックからなる。軽石粒微。
3．10YR3/4　暗褐色土　微量の灰色土ブロックを含むが、概ね単一約。
4．10YR4/2　灰黄褐色土＋10YR3/4　暗褐色土のブロックからなる。
5．10YR4/2　灰黄褐色土　主に暗灰色粘質土ブロックからなる。軽石粒多。
6．10YR4/2　灰黄褐色土　5のブロック。

第30号井戸跡土層説明
1．SE−29の5に同じ。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色土＋10YR4/2　灰黄褐色土のブロックからなる。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　主に暗灰色粘質土ブロックからなる。
4．SE−29の4に同じ。

第31号井戸跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　灰色土ブロック、軽石・B・C粒を含む。
2．10YR3/4　暗褐色土　1に準ずるが、B・C粒多。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　暗灰色土大型ブロック・軽石粒多。
4．10YR4/2　灰黄褐色土　主に灰色土ブロックからなる。軽石・C粒少。
5．10YR4/2　灰黄褐色土　基本は4。灰色土ブロック大型化。軽石多。
6．10YR4/2　灰黄褐色土　ブロックの溶化が進む。軽石さらに多。

第22号溝土層説明
1．10YR4/4　褐色土　少量の暗灰色土粒・ブロックを含む。

第69図　第28～31号井戸跡　第108号土坑　第22号溝

第28号井戸跡(第69図)

主にか－8－7グリッドに位置する。平面はソラマメ形を呈し、最大径は1.8mを測る。断面は壁の崩壊があるために判然としない。筒形であったのであろうか。覆土は人為的に投棄されたもので、埋め戻しと思われる。

第29号井戸跡(第69図)

第28号井戸跡の南西およそ2m、か－8－2グリッドに位置する。平面は1.1m×1.25mの鶏卵形を呈している。素掘りで、本来の断面は筒形であったと思われる。覆土は主に灰色土の大型ブロックからなり、南側より投げ込まれた様子が窺える。あるいは、第30号井戸跡掘削時の排土であろうか。

第30号井戸跡(第69図)

か－8－2グリッド、第29号井戸跡の南側に上縁を接するように営まれている。平面は直径約1mの円形で、断面はほぼ筒形になるものと思われる。覆土はやはり埋め戻されたもので、ほとんど大型のブロックで構成されている。第29号井戸跡との関係は明らかとしえないが、両者とも覆土の上端まで第22号溝に切られている。

第31号井戸跡(第69図)

同じく、か－8－2グリッドに位置し、第30号井戸跡からは1.2mを隔てるにすぎない。平面は弱い楕円形をなし、壁はやや角度をもって落ち込んでいる。断面が筒形、ないしは漏斗状となる素掘りの井戸であろうか。覆土は自然堆積のようにも見受けられるが、おそらくは埋め戻された土であろう。

第32号井戸跡(第70図)

か－7－9・10グリッドに位置する。平面は直径約1.4mの整った円形を呈し、調査部分での断面は筒形となる。素掘りの井戸で、旧状を比較的よくとどめているようである。覆土は故意に投げ込まれた土であろう。

第35号井戸跡(第70図)

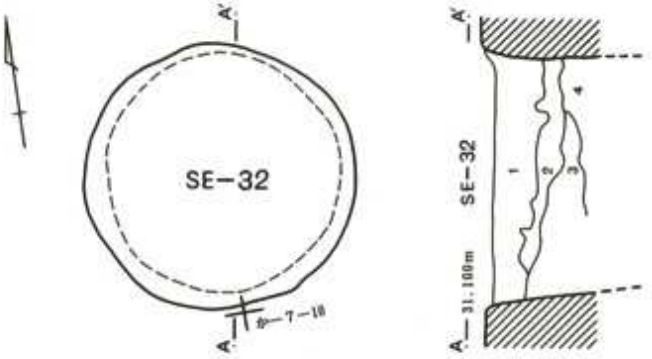
き－8－12グリッドを中心に位置する。長径2.9m、短径2.3mを測る大型の井戸跡である。現状では断面を筒形と捉えられる。覆土は埋め戻しによるものらしく、ほとんど粘質土で構成されている。

第36号井戸跡(第71図)

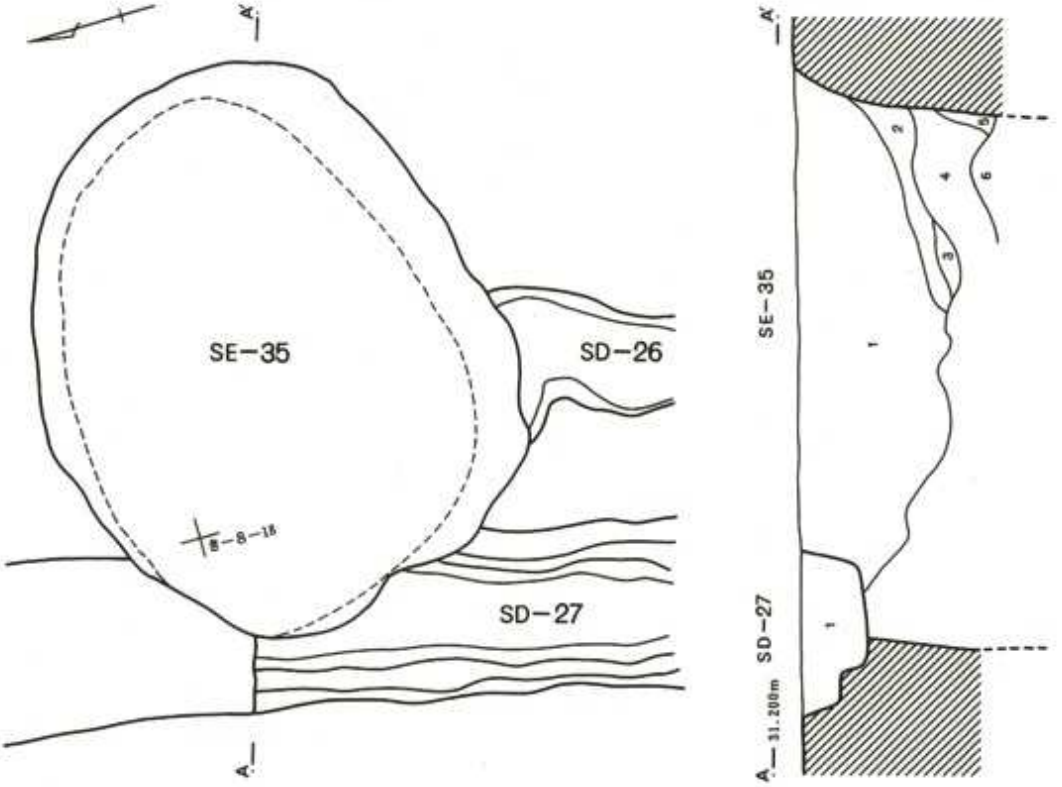
き－8－12グリッドを中心に位置する。1.5m×1.8mほどの楕円形を呈する素掘り井戸である。断面形は円筒状で、覆土は埋め戻し土である。なお、第35～37号井戸跡は第27号溝に沿うように直列している。

第37号井戸跡(第71図)

き－8－13グリッド、第36号井戸跡の南西に位置する。平面は直径約1.2mの円形で、断面形は筒状を呈する。調査部分での壁はほぼ垂直であり、旧状をよく保っているものと思われる。覆土は埋め戻された土よりなり、主に粘質土で構成される。



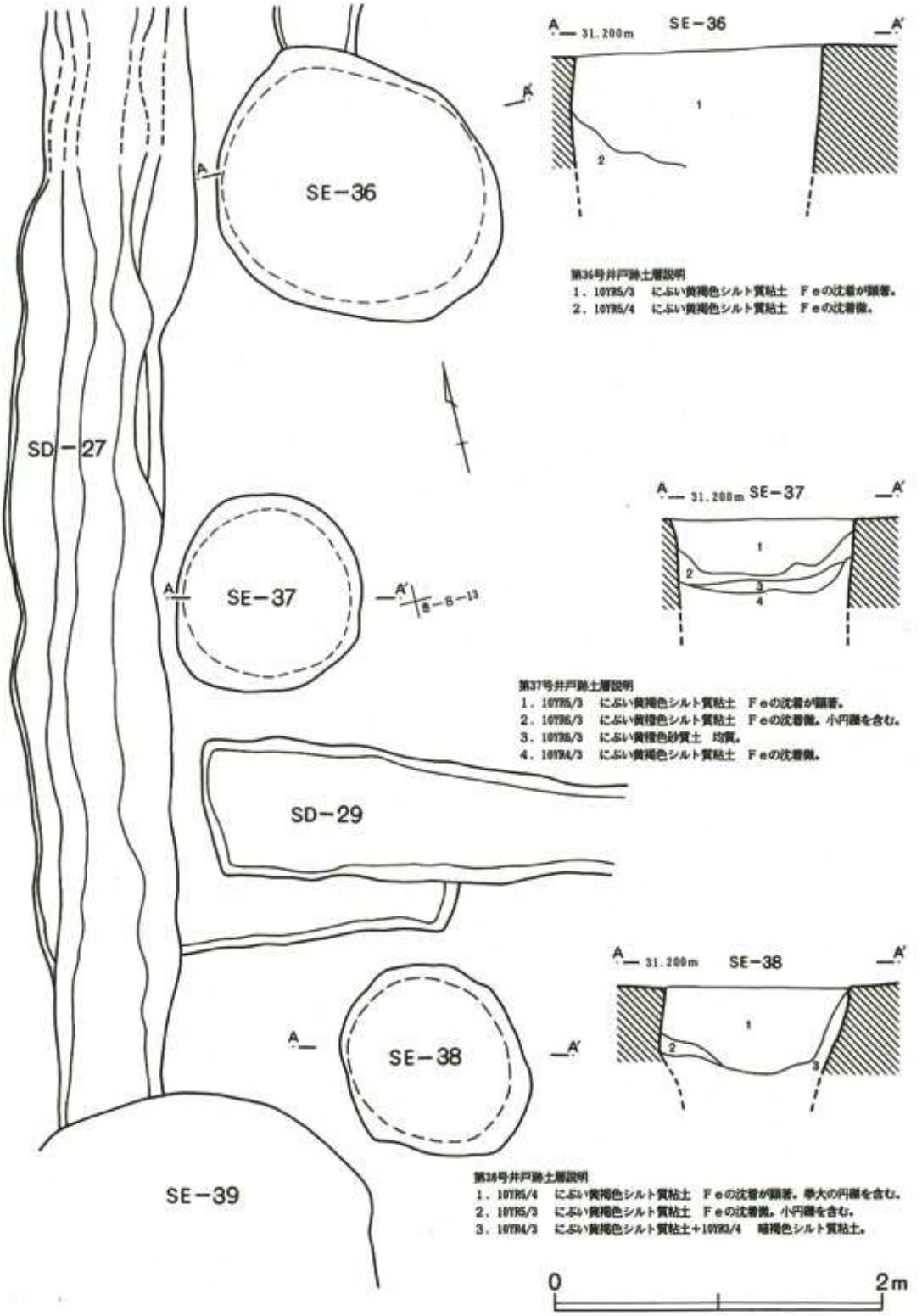
第32号井戸跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　軽石粒少。
2．10YR4/4　褐色土　砂質土＋粘質土。軽石粒少。
3．10YR4/2　灰黄褐色土　砂質。軽石多。
4．10YR2/3　黒褐色土　暗褐色土粒多。軽石粒少。



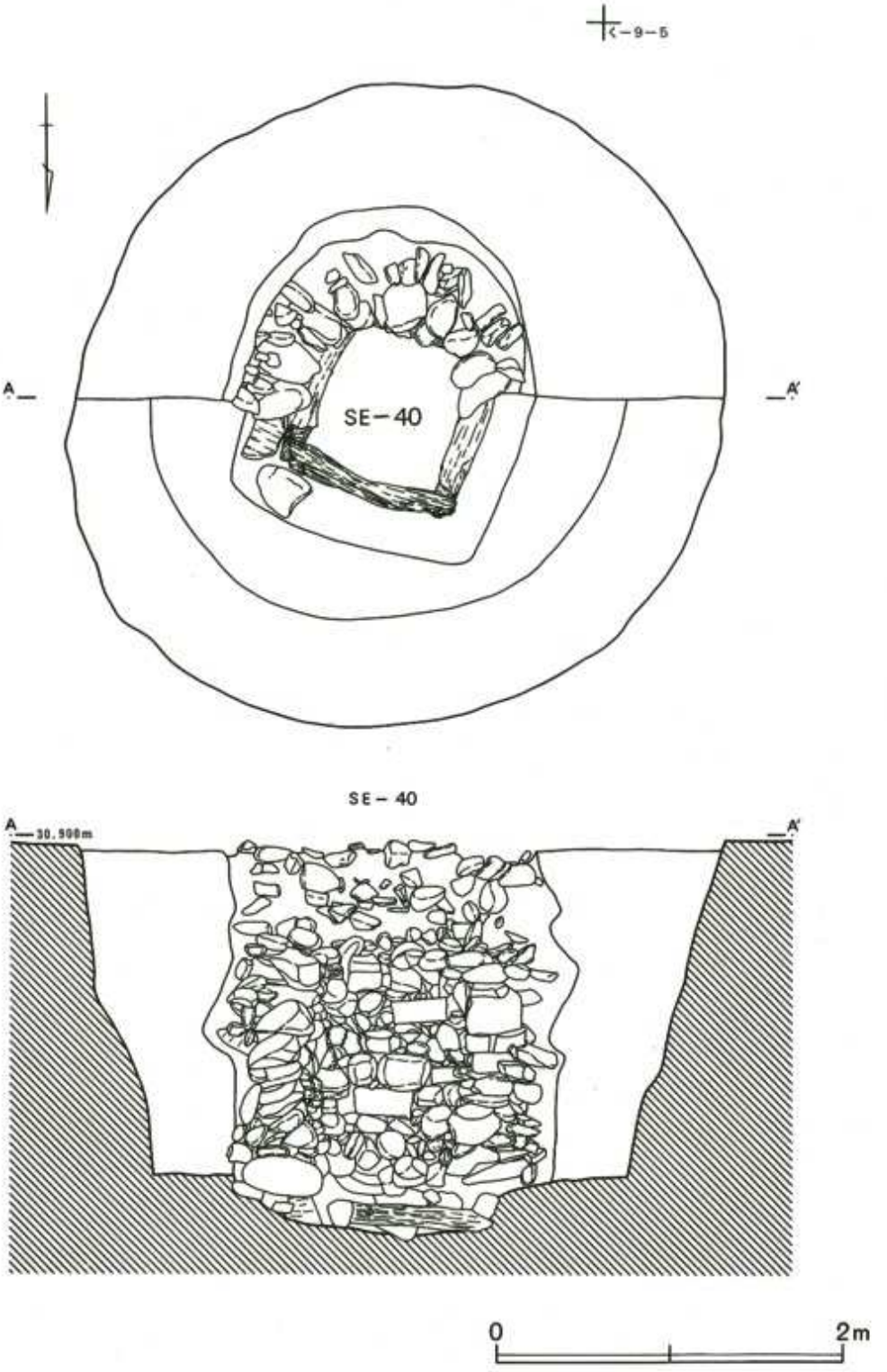
第35号井戸跡土層説明
1．10YR5/6　黄褐色シルト質粘土＋10YR7/3　にぶい黄橙色シルト質粘土。
2．10YR4/4　褐色土　シルト質粘土。灰色土粒を含む。
3．1に酷ずる。Feの沈着が顕著。
4．10YR5/4　にぶい黄褐色シルト質粘土＋10YR4/4　褐色シルト質粘土。
5．10YR4/3　にぶい黄褐色シルト質粘土　Feの沈着が顕著。
6．10YR6/4　にぶい黄褐色シルト質粘土　灰色土粒多。Feの沈着が顕著。

0　2m

第70図　第32・35号井戸跡　第27号溝



第71図　第36～38号井戸跡



第72図　第40号井戸跡

第38号井戸跡(第71図)

第37号井戸跡の南側、き－8－8グリッドに位置する。西側には第39号井戸跡が接している。最大径1.28mを測る楕円形の素掘り井戸で、断面は崩落のためか漏斗状となるようである。覆土は粘質土からなる埋め戻し土である。

第40号井戸跡(第72図)

く－9－4グリッドを中心に位置する。ウツギ内遺跡で検出された151基中、唯一の石組み井戸である。以下、構築順序に従って見ていくと、①まず、3.6m～3.9mの範囲にわたり、楕円形に掘り方の掘削が行なわれる。その深さは砂礫層まで達している。この時の断面は逆台形となり、遺構確認面からの深さは約1.9mを測る。底面全体に砂礫層が露出したところで、さらに中央部は土坑状に掘り下げられる。この掘り込みは一辺およそ1.5m、深さ0.3mほどの方形で、底面は概ね平坦である。②このなかに長さ約90cm、直径約15cmの丸太材(松か)を用いた井桁が組まれる。北辺のみは2本の材が使用され、楔状に加工された各材の両端を挟み込んでいる。その組み合わせ部には、30cm以上の河原石2個が据え置かれ、井桁を固定している(ただし、北西隅部には認められない)。その後、井桁の外側には厚く粘土が詰め込まれ、しっかりと基底部を固定する。③この上に河原石が円形に組まれ、同時にやや小ぶりの石で裏込めと、掘り方壁までの粘質土充填が行なわれる。ということになる。

石組みは円礫が主体であるが、破砕された石臼も多く用いられている。遺物として掲載した石臼は、すべてここに使用されていたものである。石組みは、基底面から1.7mの高さまで完存しているが、それより上はまばらで覆土中にも散乱し、礫も小型となっている。特に確認面では全面に及び、集石遺構状に密集している。これは上部の石組みが崩壊したためとも考えられるが、充填土の様子には否定的なものがある。礫の大きさや出土状況を加味すれば、これらの散乱する礫は石組みの一部というより、埋没時に混入したものと捉えられるべきものであろう。しかし、混入が故意の投げ込みであるのか、本跡にかかわる構造物の崩落したものなのかは俄かに判断できない。

石臼以外の遺物は少なく、図示できたものは3点のみである。いずれも口縁部の小破片で、第76図7は在地産の鉢、8は常滑産の甕、9は雷文の押印を有する瓦質の手焙りである。

石組みに使用されていた石臼は11個体である。第79図1は安山岩の上臼で、直径52.8cm、高さ25.2cmを測る大型品である。石組には半分に割れたものが別々に積まれていたが、復元するとほぼ完形となった。磨り合わせ面の摩耗は著しく、芯棒孔は消失し、全体は山形にくぼんでいる。供給口は2穴あり、径はともに3.8cmほどである。挽き木の装着孔も対位置に2穴あり、それぞれ上皿の突帯上面から側面へ貫通している。孔径は2cmと2.5cmで、断面形はカーブしている。挽き木の装着孔としたが、本品の大きさを考えると人力での使用は疑問である。あるいはこの孔にはロープが通され、牛馬に繋いだのかとも思われる。

2も大型の上臼で3の下臼とセットになるものであろう。ともに多孔質安山岩製で、2は直径42.5cm、高さ19.9cmで、芯棒受けの孔は径2.3cm、深さ2.8cmを測る。供給口の径は7.5cm、磨り合わせ面では螺旋状に「ものくばり」が刻まれる。利歯の副線は10～11本で、8分画されている。挽き木の装着孔は対位置に2穴あり、一本の棒を通したものと思われる。3の下臼は直径44cm、高さ12.5cmで、

芯棒受けは孔径4.5cmである。利歯の副線は9～12本刻まれ、上臼と同じく8分画されている。

第80図4も多孔質安山岩製の上臼である。ほぼ完形で、直径29.1cm、高さ10.1cmを測る。芯棒受けの孔は径3.3cm、深さ2.1cmで、半円状に穿たれている。供給口の径は4cmで、「ものくばり」が刻まれる。挽き木の装着孔は側面にあり(横打ち込み式)、径2.2cm、深さ3.3cmである。磨り合わせ面はかなり磨滅している。利歯の副線は6分画だが、1単位の本数は4・6・4・5・5・8とまばらで、刻まれた「目」も粗い。

5も形態的には同様の上臼で、10の下臼とセットになるものと思われる。直径は24.7cm、高さは10.3cmである。側面はわずかに丸みを有し、台形状となる。芯棒受けは径2.1cm、深さ3.2cmで、挽き木の装着孔は径2.2cm、深さ3.9cmである。供給口の径は3.2cmで、磨り合わせ面には「ものくばり」が彫り込まれる。利歯の副線は粗く4～6本刻まれ、全体は5分画されている。下臼の10は直径25.9cm、高さ9.6cmを測る。芯棒受けは貫通せず、径2.6cm、深さ3cmのほぞ穴となっている。磨り合わせ面はわずかに凸面となり、利歯の副線は上臼と同じで、分画だけが6となっている。

6は多孔質安山岩製の上臼で、9の下臼とセットになるものであろう。大型品だがともに20～30%を失っている。6の側面は台形となり、直径は上皿部で32.2cm、磨り合わせ面で34.8cmである。供給口は径4.2cmで、「ものくばり」を備える。芯棒受けは孔径4.4cm、深さ2.5cmを測る。挽き木の装着孔は上皿突帯を貫通し、2穴が並行して穿たれている。磨り合わせ面は凹面となっており、利歯の副線は6～7本刻まれいる。6分画であろうか。9の下臼は磨り合わせ面が凸面となり、底面直径35.8cm、高さ15cmを測る。芯棒孔は径3.7cmで、底面へ向けて広がっている。利歯の副線は5～7本刻まれ、6分画されている。

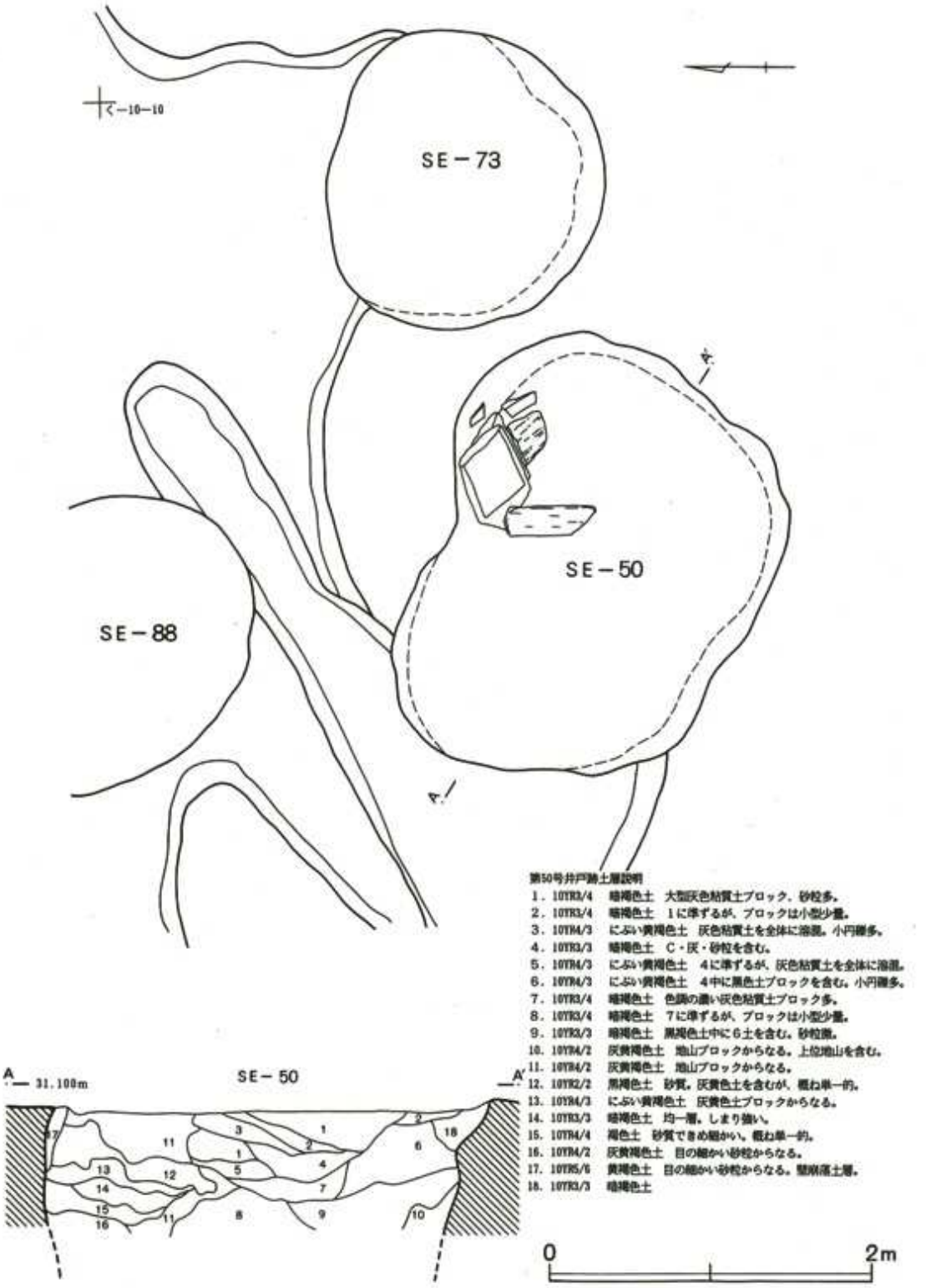
7は多孔質安山岩製の下臼であるが、半分以上を欠損している。復元径は27.6cm、現存高で10.6cmである。芯棒孔は径2.3cmで貫通しており、断面形は漏斗状となる。磨り合わせ面は凸面で、5分画になると思われる利歯の副線は、それぞれ6～7本刻まれいる。なお、底面も皿状にかなり窪んでいるが、使用によって磨滅したものか否かは判然としない。

8も多孔質安山岩製の下臼で、やはり半分ほどの残存である。復元径で約25cm、現存高は8.8cmを測る。芯棒受けは径2.6cm、深さ2.8cmのほぞ穴となる。磨り合わせ面はわずかに凹面となり、利歯の副線は6本刻まれている。また、側面下端には一辺2.7cm、深さ1cmの方形の窪みが刻まれている。

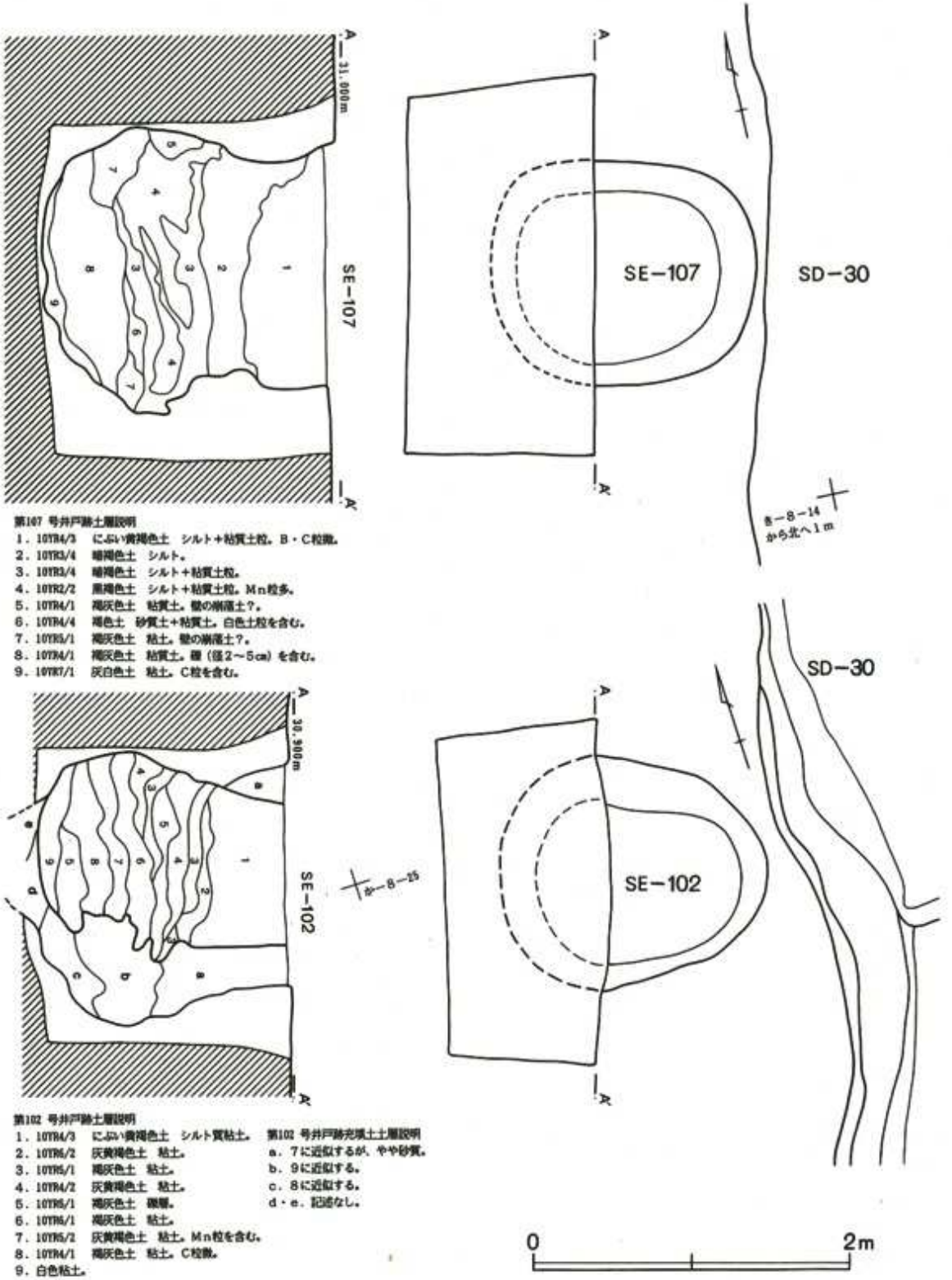
11の下臼も多孔質安山岩製で、ほぼ完存している。直径29cm、高さ9.6cmで、側面は逆台形を呈する。芯棒孔は径2.7cmで貫通しており、断面形は逆位の漏斗状となる。磨り合わせ面は凸面で、磨滅が激しい。利歯の副線は4～5本刻まれ、5分画されている。

第50号井戸跡(第73図)

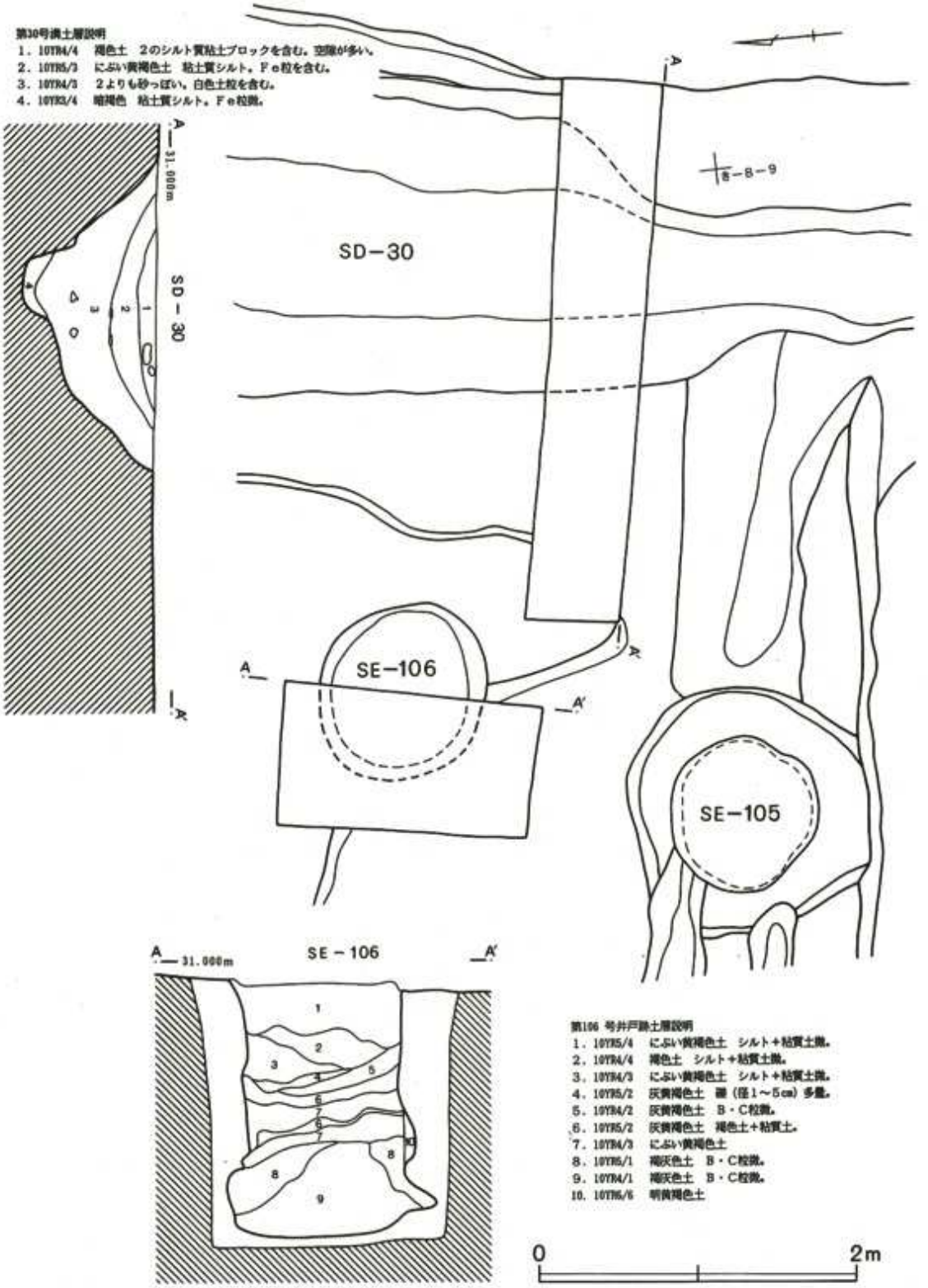
く―10―5グリッドに位置する。2.2m×2.8mほどのソラマメ形を呈しており、2基の井戸が重複したものかもしれない。壁はかなり崩落しているため、本来の断面形は不明である。大型のブロックで構成された覆土はしまりが弱く、大半が人為的に埋め戻されたものと思われる。北東壁際の覆土中からは、板石塔婆がまとまって出土している。やはり、これらも故意に投げ込まれたものであろう。



第73図　第50・73号井戸跡



第74図　第102・107号井戸跡

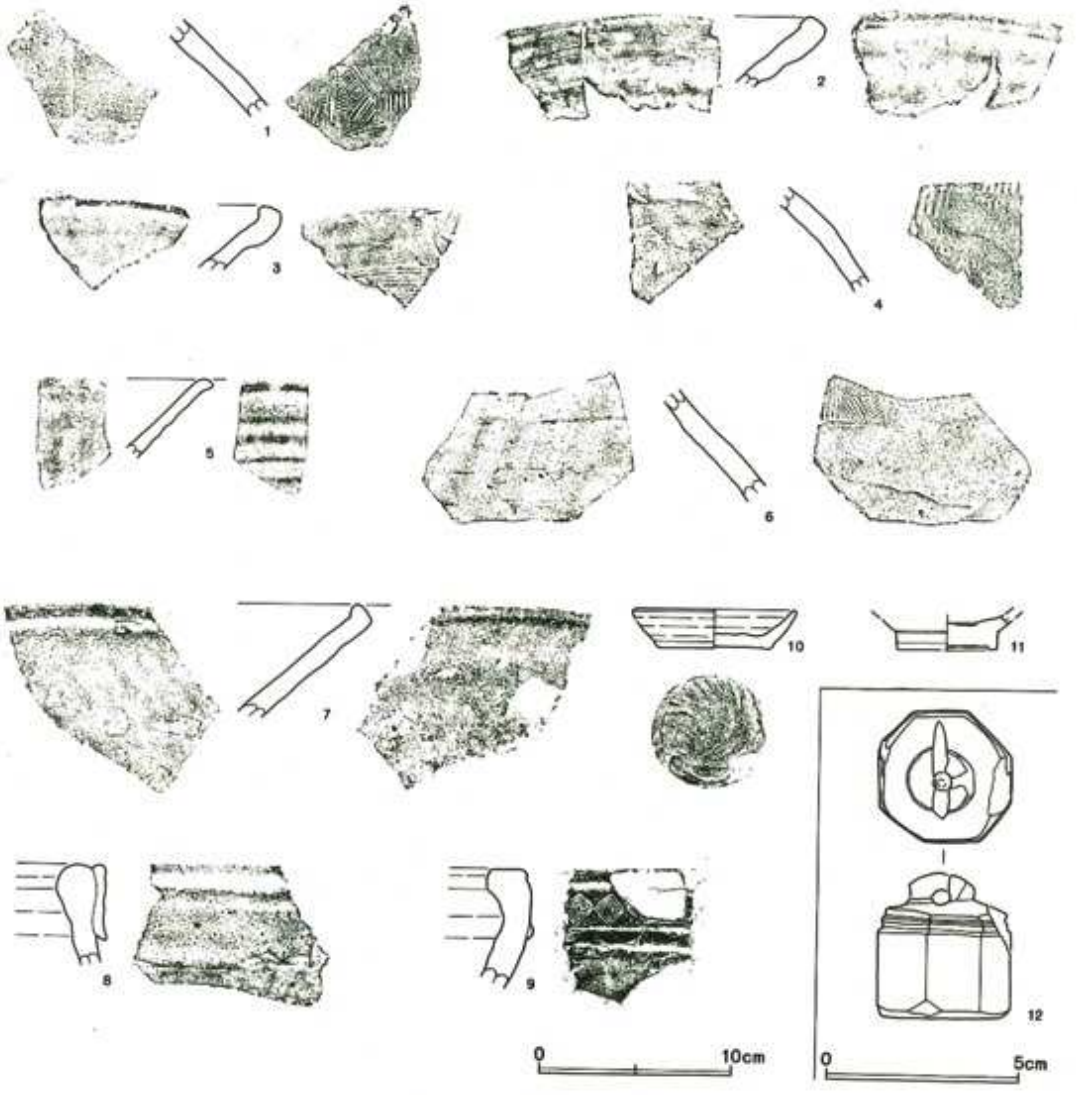


第75図　第105・106号井戸跡　第30号溝

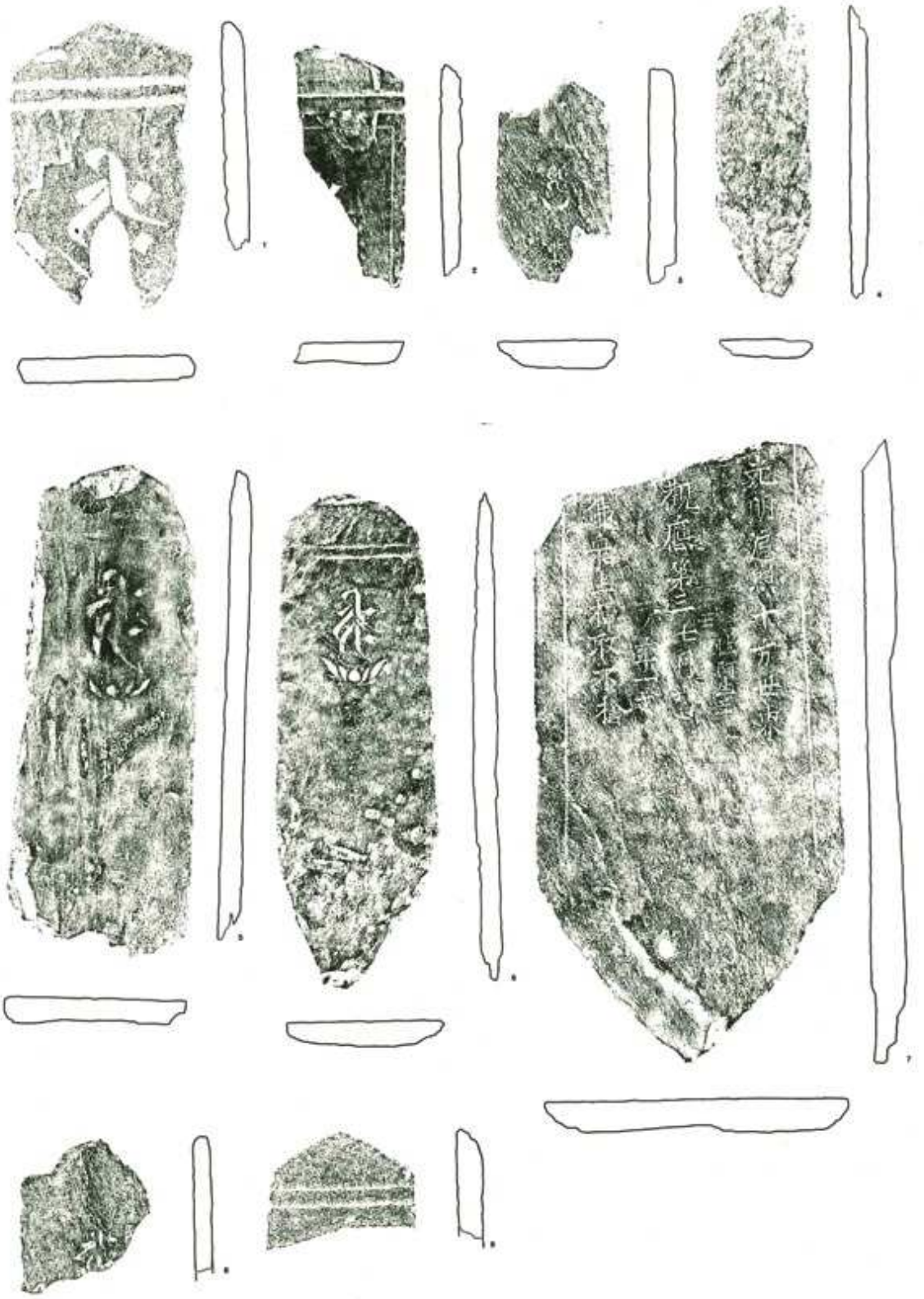
第77図５は他と同じく緑泥片岩製で、基部と頂部の一部を欠くものの、ほぼ全体の姿は窺い知ることができる。残存長58.5cm、最大幅23.2cm、厚さ2.7cmで、表面の剝離が激しい。種子は阿弥陀(キリーク)一尊。蓮座を備える。その下には紀年銘が刻まれているが、剝落のため判読不能である。

６は頂部をわずかに欠損するのみで、ほぼ完存品といってよい。残存長58cm、幅19.3cm、厚さ３cmをそれぞれ測る。種子は蓮座を備える阿弥陀(キリーク)一尊で、丁寧に彫り込まれている。紀年銘は種子に比して稚拙な文字で、「永和二年(1376)二月」と記されている。

７は上半部を欠損しながらも、残存長70cm、幅38.1cm、厚さ4.5cmとかなり大型である。枠線内の中央には「観應第三　壬辰　七月六日　性阿生年　六十一才」と紀年銘および名前と年齢、その両側には「光明遍照　十方世界　念仏衆生　摂取不捨」と観無量寿経真身観からの偈が刻まれている。「観應第三　壬辰」は1352年にあたるが、観応年号は２年までしかなく、同年は既に文和と改元されている。墓碑として造立されたものであろう。



第76図　井戸跡出土遺物(1)



第77図　井戸跡出土遺物(2)　板石塔婆

8は遺構確認時に**第99号井戸跡**から出土したものである。既述のとおり、本井戸跡は掘り下げが不可能であったため、土層図の掲載ができない。よって、遺物のみをここに併記することとした。図示した板石塔婆は上端部のみの残存で、長さ21.6cm、幅16.8cmを測る。阿弥陀(キリーク)一尊であるが、不思議なことに上下が逆になっている。すなわち、種子を正位置に見れば、板石塔婆本体の基部が上になってしまうのである。破片であるため確たる証拠はないが、破損品を再利用したものかもしれない。

第102号井戸跡(第74図)

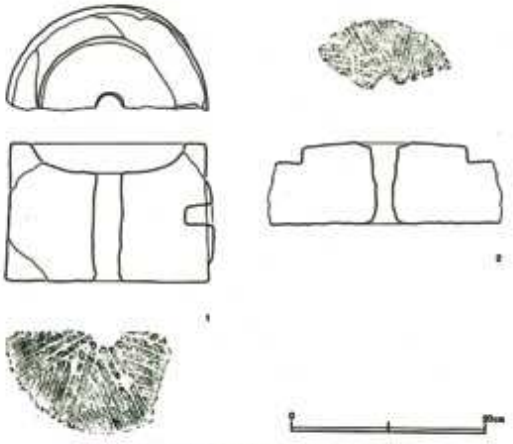
か－8－19グリッドに位置する。平面は1.4m×1.7mほどの楕円形で、旧状は激しい崩落のため大きく損なわれている。断面形も乱れており、現状ではフラスコ状を呈している。覆土はほとんど崩落土からなり、充填土も著しく崩れ落ちている。確認面から底面までは約1.6mあり、掘り方はこれよりもさらに深い。

第106号井戸跡(第75図)

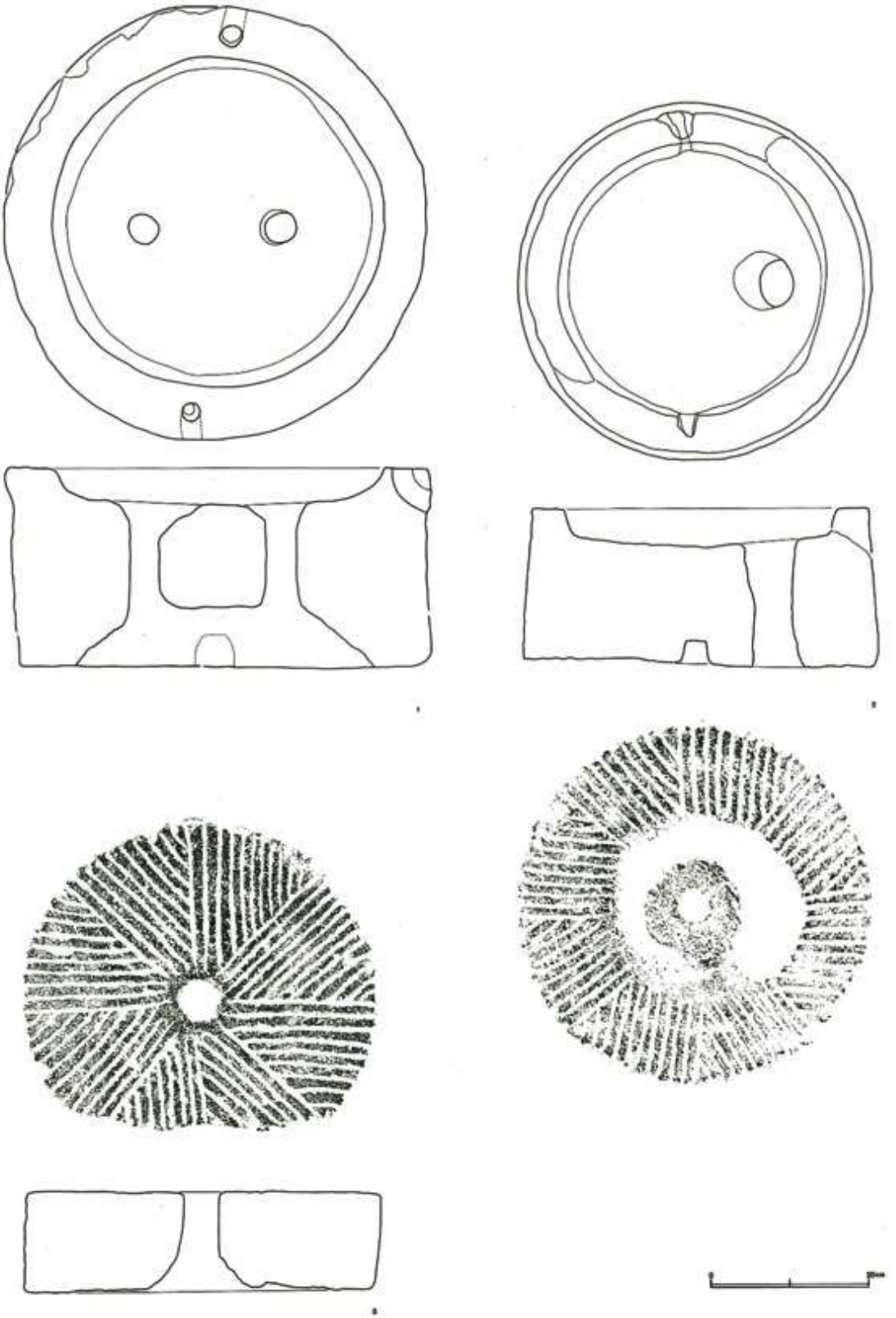
き－8－9グリッドに位置する。小型の素掘り井戸で、直径約1m、深さ約1.6mを測る。断面形は筒状であるが、下部は崩落のため大きく抉れている。覆土は下半部が崩落土、上半部が埋め戻し土である。

第107号井戸跡(第74図)

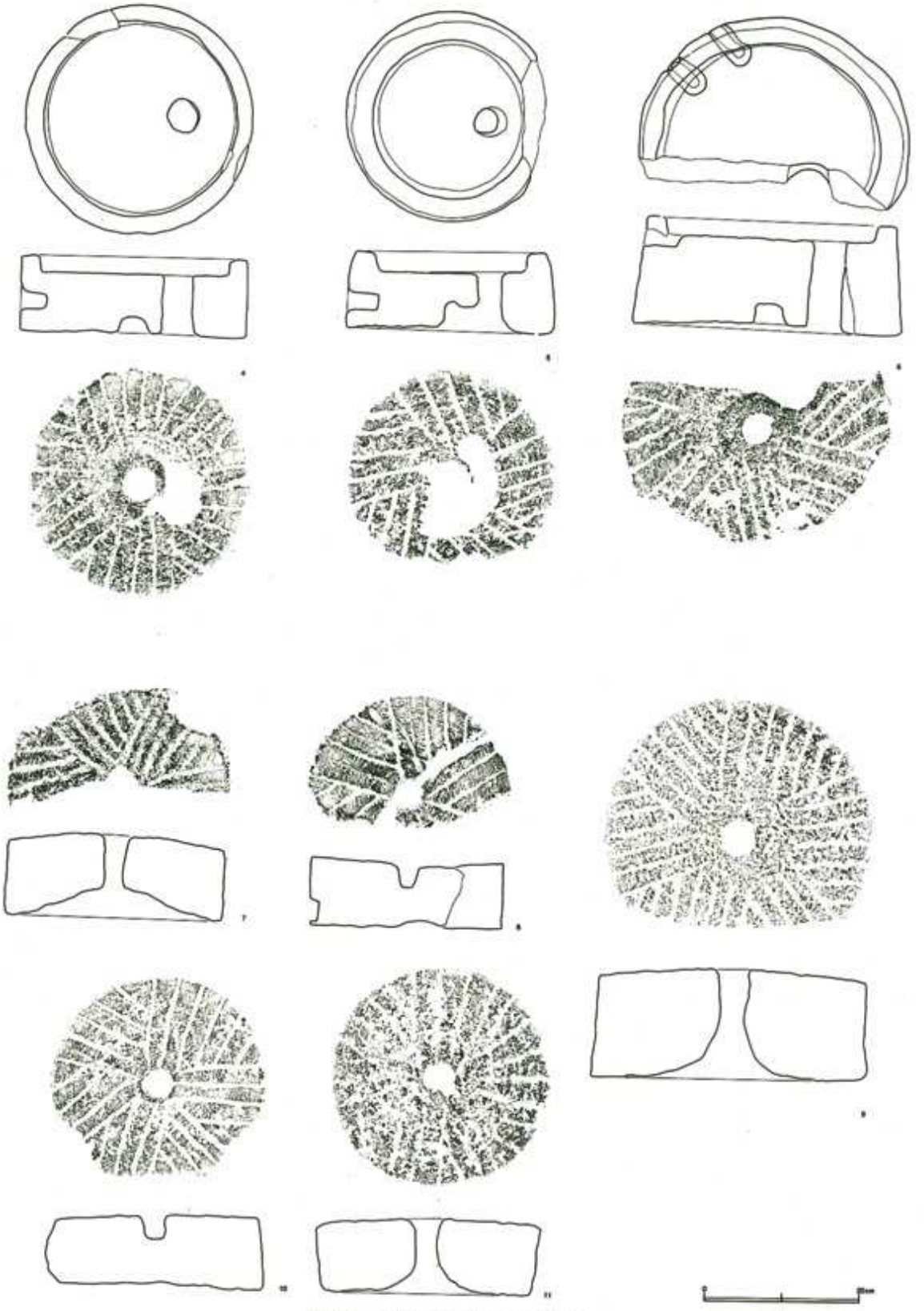
き－8－14グリッドに位置する。平面は最大径1.7mほどの楕円形で、確認面から底面までの深さは約1.8mある。壁の崩落は激しく、断面形はかなり乱れている。本来は筒形を呈していたのであろうか。覆土はすべて崩落土と埋め戻し土である。



第78図　第11号井戸跡出土石臼



第79図　第40号井戸跡出土石臼(1)



第80図　第40号井戸跡出土石臼(2)

第6表　ウツギ内遺跡井戸跡一覧(1)

No.	グリッド	平面形	最大径(m)	深さ(m)	備　考	No.	グリッド	平面形	最大径(m)	深さ(m)	備　考
1	か-7-16	円　形	2.15	(2.00)		41	き-8-8	楕円形	(2.37)	(0.84)	SD27と重複
2	か-7-16	〃	1.22	(1.76)	SD18と重複	42	き-8-8	〃	1.27	(0.66)	
3	か-7-24	〃	1.95	(1.09)		43	き-8-20	円　形	0.90	(0.53)	
4	か-7-24	〃	2.20	(0.94)	SD20より新	44	き-9-16	〃	1.08	(0.45)	SD38と重複
5	か-7-25	楕円形	2.10	(1.15)	SD20と重複	45	き-9-2	〃	1.18	(0.57)	SD35、36と重複
6	き-7-5	〃	2.35	(1.19)	SK116と重複	46	き-9-17	〃	1.05	(0.49)	
7	き-7-4	円　形	5.40	(1.35)		47	き-9-17	楕円形	1.52	(0.48)	
8	か-7-19	〃	1.80	(1.02)		48	き-9-3	円　形	1.35	(0.30)	
9	か-7-19	楕円形	1.86	(1.19)		49	き-9-4	〃	1.50	(0.26)	
10	お-8-18	円　形	1.22	1.20		50	く-10-5	楕円形	2.75	(0.82)	
11	か-8-11	〃	2.80	(0.84)		51	き-9-8	円　形	1.20	(0.48)	
12	か-8-20	〃	(1.80)	(0.58)	SE13、SK191、192より古	52	き-9-9	楕円形	1.15	(0.06)	SD64と重複
13	か-8-20	楕円形	(1.15)	(0.50)	SE12より新 SK191、192と重複	53	き-9-18	円　形	0.85	(0.35)	
14	き-7-10	円　形	1.55	(0.43)		54	き-9-23	楕円形	1.42	(0.10)	
15	き-8-7	楕円形	2.10	(1.11)	SK127、128と重複	55	く-9-3	円形？	(1.88)	(0.06)	SK162より古
16	き-8-7	〃	2.10	(0.83)		56	く-9-8	円　形	1.65	(0.05)	SE57と重複
17	き-8-1	円　形	1.40	(0.38)		57	く-9-8	楕円形	1.55	(0.03)	SE56と重複
18	き-8-6	楕円形	1.45	(0.76)		58	き-10-11	〃	2.18	(1.06)	
19	き-8-1	〃	1.15	(0.68)	SE20、SK89より新 SK91より古	59	き-10-16	〃	1.26	(0.07)	
20	き-8-1	円　形	(1.50)	(0.45)	SE19、21、SK91より古	60	く-10-1	円　形	1.20	(0.43)	
21	き-8-1	楕円形	1.80	(0.76)	SE20より新 SK91より古	61	き-10-13	楕円形	(2.26)	(0.12)	SD44と重複
22	か-8-12	円　形	1.40	(0.74)		62	き-10-23	円　形	1.88	(0.56)	
23	か-8-1	〃	1.08	(0.60)	SD22と重複	63	く-10-3	楕円形	2.25	(0.41)	SE111と重複
24	か-8-4	〃	1.25	1.52		64	く-10-3	円　形	1.20	(0.48)	SE65、111と重複
25	か-8-4	〃	1.55	1.15		65	く-10-4	楕円形	1.90	(0.51)	SE64と重複
26	か-8-6	〃	1.20	1.56		66	く-10-8	〃	2.05	(0.64)	SE67と重複
27	か-7-15	楕円形	1.48	(0.88)	SD23と重複	67	く-10-8	円　形	1.91	(0.54)	SE66と重複
28	か-8-7	〃	1.80	(0.60)		68	く-10-8	〃	1.02	(0.46)	
29	か-8-2	〃	1.25	(0.46)	SD22より古	69	く-10-13	〃	1.00	(0.47)	
30	か-8-2	円　形	1.05	(0.50)	SD22より古	70	く-10-13	〃	0.80	(0.47)	
31	か-8-2	〃	1.60	(0.57)		71	く-10-4	楕円形	1.87	(0.46)	SK72と重複
32	か-7-9	〃	1.40	(0.54)		72	く-10-4	円　形	1.64	(0.48)	SK71と重複
33	き-7-4	〃	1.14	(0.24)	SK116と重複	73	く-10-5	〃	1.82	(0.48)	
34	き-7-4	〃	1.45	(0.78)	SK116と重複	74	く-10-4	〃	1.00	(0.71)	
35	き-8-12	楕円形	2.95	(1.05)	SD27より古 SD26と重複	75	く-10-9	〃	1.10	(0.42)	
36	き-8-12	〃	1.85	(0.75)	SD26と重複	76	く-10-4	〃	1.58	(0.59)	
37	き-8-13	円　形	1.25	(0.53)		77	く-10-9	楕円形	1.47	(0.63)	
38	き-8-8	楕円形	1.28	(0.54)		78	く-10-10	〃	1.45	(0.38)	
39	き-8-8	円　形	2.40	(0.63)	SD27と重複	79	く-10-9	円　形	1.34	(0.47)	
40	く-9-4	〃	3.90	2.25	石組み	80	く-10-9	円形？	2.12	(0.45)	

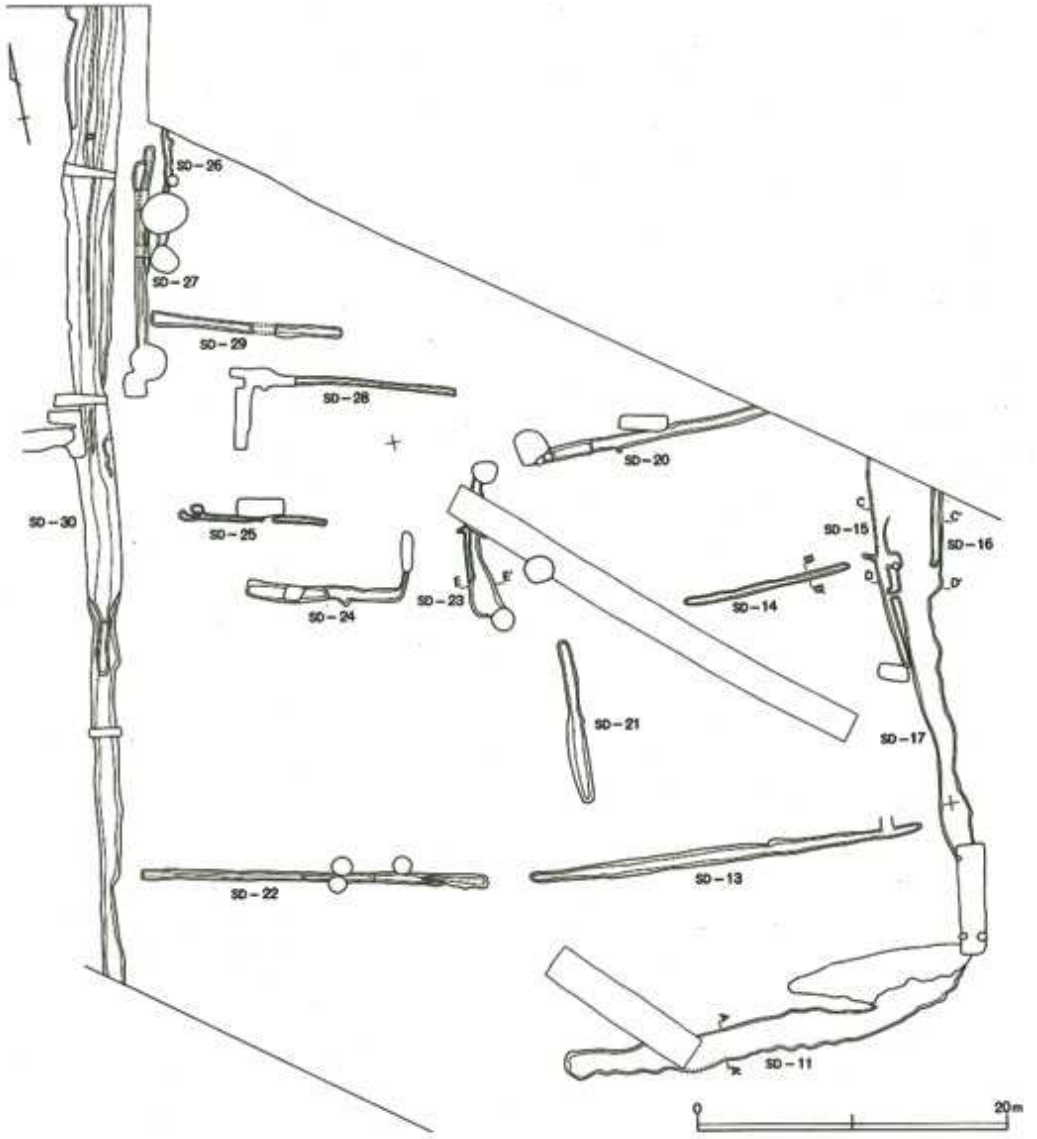
第7表　ウツギ内遺跡井戸跡一覧(2)

No.	グリッド	平面形	最大径(m)	深さ(m)	備　考	No.	グリッド	平面形	最大径(m)	深さ(m)	備　考
81	く-10-9	楕円形	1.90	(0.44)		117	く-10-18	円　形	2.70	(0.42)	SE118と重複
82	く-10-15	円　形	1.40	(0.61)		118	く-10-18	楕円形	(1.95)	(0.40)	SE117と重複
83	く-11-1	楕円形	(2.00)	(0.54)	SE84と重複	119	け-10-8	〃	0.98	(0.19)	SD49と重複
84	く-11-1	〃	(1.42)	(0.46)	SE83と重複	120	く-10-24	〃	(1.35)	(0.22)	
85	く-11-1	〃	2.38	(0.44)	SE89と重複	121	け-10-4	〃	1.31	(0.31)	
86	く-11-1	〃	(2.05)	(0.26)		122	け-10-19	円形？	(1.03)	(0.25)	SD61と重複
87	く-10-5	円　形	1.70	(0.45)		123	く-11-20	円　形	1.05	(0.37)	
88	く-10-5	〃	1.88	(0.44)		124	く-11-21	〃	1.28	(0.28)	SE125と重複
89	く-11-6	楕円形	(1.18)	(0.68)	SE85、112と重複	125	く-11-21	〃	1.15	(0.26)	SE124と重複
90	く-11-11	円　形	2.22	(0.45)		126	け-11-6	楕円形	1.10	(0.30)	
91	く-11-11	楕円形	2.20	(0.48)		127	く-11-22	円　形	1.66	(0.24)	
92	く-11-11	円　形	(2.76)	(0.46)	SE93と重複	128	け-11-3	楕円形	1.42	(0.30)	
93	く-11-11	〃	(2.15)	(0.49)	SE92と重複	129	け-11-3	円　形	1.37	(0.35)	
94	く-11-2	楕円形	(2.03)	(0.35)		130	け-11-7	〃	0.93	(0.22)	SD56と重複
95	く-11-7	円　形	1.47	(0.41)		131	け-11-7	楕円形	2.10	(0.15)	SD56と重複
96	く-11-7	楕円形？	(2.05)	(0.37)		132	け-11-4	〃	1.76	(0.27)	
97	く-11-8	楕円形	(1.85)	(0.08)		133	け-11-4	円　形	2.06	(0.29)	
98	く-11-12	円　形	1.20	(0.51)	SE99、100と重複	134	け-11-5	〃	2.40	(0.24)	
99	く-11-12	〃	(1.65)	(0.47)	SE98、100と重複	135	け-12-12	〃	1.28	(0.28)	
100	く-11-12	〃	(1.15)	(0.50)	SE98、99と重複	136	け-12-17	楕円形	1.51	(0.26)	
101	く-11-12	楕円形	1.71	(0.49)		137	け-12-17	円　形	2.35	(0.35)	SJ3より新 SE138と重複
102	か-8-19	〃	(1.48)	1.53		138	け-12-17	〃	1.77	(0.30)	SE137と重複
103	き-8-4	円　形	1.62	(0.39)		139	け-12-21	〃	1.68	(0.37)	
104	き-8-4	〃	1.40	(0.41)		140	け-12-18	〃	1.90	(0.38)	
105	き-8-9	〃	0.95	(0.67)	SD34より新	141	け-12-19	楕円形	2.70	(0.22)	
106	き-8-9	〃	(1.03)	1.65		142	け-12-24	円　形	1.23	(0.27)	
107	き-8-14	楕円形	(1.70)	1.82		143	け-12-19	〃	1.54	(0.24)	
108	き-8-14	楕円形？	(1.30)	(0.16)		144	く-11-1	〃	(2.40)	(0.24)	
109	き-8-19	円　形	1.02	(0.36)		145	き-10-19	〃	(1.75)	(0.10)	
110	く-8-3	〃	0.98	(0.40)		146	き-10-18	楕円形	(1.40)	(0.71)	SD44と重複
111	く-10-3	楕円形	(1.60)	(0.55)	SE63、64と重複	147	き-9-18	円　形	1.68	(0.07)	
112	く-11-6	円　形	(0.80)	(0.52)	SE89と重複	148	き-9-22	楕円形	1.06	(0.44)	
113	く-10-8	〃	1.22	(0.48)		149	き-8-22	円形？	(1.78)	(0.82)	
114	く-10-21	〃	1.82	(0.34)		150	か-8-10	円　形	1.45	(0.68)	
115	く-10-21	〃	0.98	(0.32)		151	か-8-14	〃	1.05	(0.55)	SK190と重複
116	け-10-1	楕円形？	(0.92)	(0.28)							

(4) 溝

検出された95条の溝は調査区全体に分布しており、特に集中したり、偏在するような傾向は看取されない。大きく分ければ、①備前渠用水の北側、河川跡1に添うように並行して走るもの、②調査区の中央部で、土坑群を取り囲むように開鑿されているもの、③その他、ということになろう。①に属する溝以外は、方向がほぼ南北・東西を指しており、関連性があるのかもしれない。ここではすべての溝について述べる余裕がないため、②に関する溝についてのみ、区画という観点から触れておきたい。

②において対象となる溝は、グリッドでいえばおおよそ［お－6］から、［き－8］に分布している(第81図)。これらは開鑿の方向性から見て、第30号溝を中心とする西半の一群と、第17号溝を中

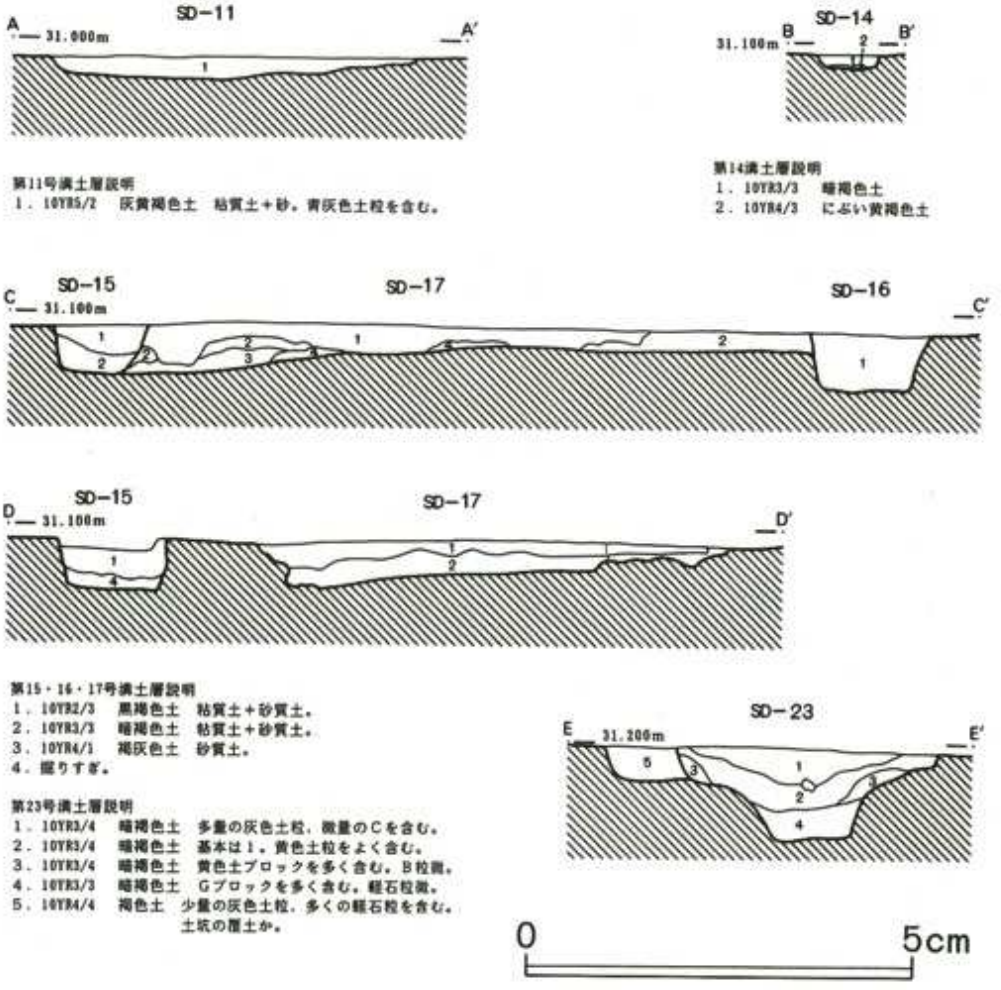


第81図　第11・13～17・20～30号溝(1)

心とする東半の一群とに二分できる。西群には第22・24～30号溝、東群には第11・13～18・20・21・23号溝がそれぞれ含まれる。また、東西両群に取り囲まれた土坑の大半も、方向はほぼ各群内で一致している。

A　西群

第30号溝　西群の西端を南北に走る第30号溝は、ウツギ内遺跡の中で最も規模の大きい溝である。北半部は２条に分かれているが、西側のものが新しく、これが南端まで延びている。検出長は約64m、最大幅は約2.4mを測る。断面(第75図)は薬研形を呈し、溝底の幅は平均で0.4mほどである。方向はおよそN－10°－Eを指す。覆土は自然堆積を示し、中には多くの遺物や礫を含んでいる。水などが流れた様子は認められず、機能時には空堀であったと思われる。底面は北端より南へ向けて深くなり、中央部付近では段を有して立ち上がる。その後も下降は続き、南端は北端よりは0.4mほど低くなっている。



第82図　第11・13～17・20～30号溝(2)

第26号溝　第30号溝に平行するものとしては、第26・27号溝が挙げられる。両者はともに第30号溝のすぐ脇にあり、ぴったりと並走している。第35号井戸跡との重複関係からは、第26号溝が古いことが分かる(第70図)。第26号溝は検出長7.3m、上幅約0.4mである。深さは5～20cmで、底面は北から南へ傾斜している。幅・深さとも小規模であることから、第27号溝同様、さほど長くは延びないものと思われる。

第27号溝　検出長12.5m、上幅は約0.8m、下幅は0.3m～0.4mを測る。南端は第39号井戸跡と重複しているが、全長は15mを越えないであろう。深さは23cm～53cmに及び、やはり南へ向かって深くなる。

第22号溝　上記の他は、すべて第30号溝から東へ垂直に延びる溝である。いちばん南側の第22号溝は、全長22.3mの完結した溝で、上幅約0.4m、下幅約0.3mをそれぞれ測る。溝底は東から西へいくつかの段を有し深まっているが、形態的には4～5基の長大な土坑が、同一方向に直列しているようでもある。覆土は土坑のものに準じ、横断面(第69図)はU字形ないし箱形を呈する。第29・30号井戸跡を切断する。

遺物は比較的多く、東端部より土鍋、かわらけなどが出土している。

第24号溝　第22号溝の北方およそ18mに並行している。検出長16m、東端は北へ方向を転じ、第109号土坑にとりついている。幅は西で0.3mと狭く、東で0.9mと広くなっている。深さは東側隅部では30cmほどで、これより西へ向けて60cmほどまで深くなっている。ただし、これも第102号土坑付近で立ち上がり、西端部では約5cmを測るのみとなっている。横断面(第37図)は箱形を呈する。第99号土坑に切られている。

第25号溝　第24号溝の北側、約4.5mを並走する小規模な溝である。検出長は9.6mで、中央部が切れている。幅は平均0.3mほどで、深さは10～20cmと浅い。横断面(第44図)は箱形を呈し、第150号土坑を切断している。

第28号溝　第25号溝の北側約9m、第29号溝の南側約3mの位置に開鑿されている。方向はともに一致する。検出された長さは10.5mのみである。これは東が第116号土坑、西が第146号土坑と重複しているため、両端部を検出できなかったことによる。第146号土坑部分の断面観察では、本溝の存在が認められなかった(第42・43図)。上幅は約0.4mを測り、深さは20cmほどで高低差はほとんどない。

第29号溝　検出長は12.4mで、両端は方形状を呈している。西端部は第27号溝まで延びているが、重複する20cmほど手前で掘りとどめられている。両溝のなす角度はほぼ垂直である。上幅はおよそ0.6mで、西端部のみ0.8mと広くなっている。深さは30～40cmほどで、レベル的に見れば底面は平坦である。横断面は箱形を呈する。

B　東群

第17号溝　第15・16号溝に切断される南北溝で、同群の東端を画している。南端部は攪乱坑のため不明であるが、第12号溝より南には延びていない。あるいは、第11号溝が規模や形態的に近似しているなど、本来は直角に曲がる一本の溝であったのかもしれない。検出長は約24mで、幅は約1.8m、深さは20cmほどである。底面はほぼ平坦で、横断面(第82図)は浅い箱形を呈している。溝の方向は

およそN－3°－Eを指す。なお、本溝の東側には土坑群の広がりはなく、あたかも境界をなしているようである。

第11号溝　検出長約26m、幅約2mを測る東西溝である。東端はやや北側へ向けて曲線を描いており、第17号溝へ続くと考えられる。深さは5cm前後と浅く(第82図)、底面は平坦である。調査区東端まで延びる第12号溝との重複関係は把握できなかった。

第15号溝　第17号溝の西壁を切断する。ほぼ同一方向に延びているが、やや曲線的な溝である。検出長約13.5m、幅0.6m、深さは30cm前後である。横断面(第82図)は逆台形状となり、南端部も急角度で立ち上がっている。

第16号溝　検出長約7m、北から5mほどのところで一段高くなっているため、これより南の底面は第17号溝と一体となっている。幅約0.6m、深さは35cmを測る。第17号溝の東壁に沿うようにこれを切断しているものの、溝の方向はおよそN－13°－Eと東へ偏している。断面(第82図)は箱形を呈し、底面は概ね平坦である。

第13号溝　第11号溝に並行する完結した溝である。西群の第22号溝(溝間は約2.6m)とは、直列するように開鑿されている。第11号溝から北へ約11m、垂直にとりつく第17号溝とは1.3mほどの間隔(掘り残し)がある。全長は約25.5mで、他溝に比してかなり直線的である。その西端は第21号溝の延長線上よりも約4.5m西へ延びている。上幅は約1mを測り、中央部が両端部よりもやや広くなっている。確認面からの深さも中央部がより深く、約40cmとなっている。横断面はU字形ないしは舟底形(第30図)を呈する。

第14号溝　第13号溝の北約8m、第20号溝の南約6mに位置する東西溝である。おおよそ両溝に並行しており、全長約10.8m、幅約0.5mを測る。深さは5cmと浅く、横断面は浅いU字形を示す(第82図)。

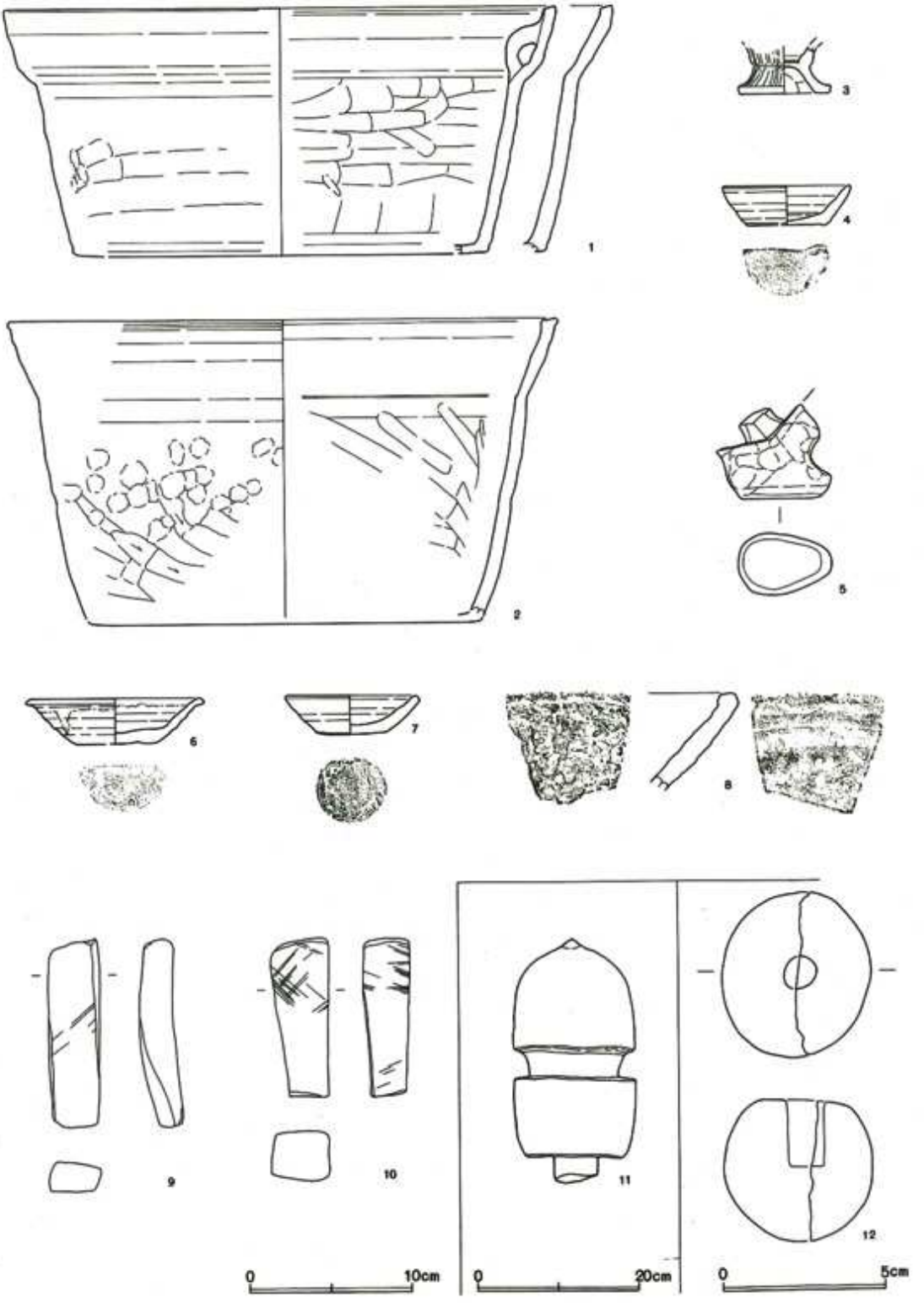
第21号溝　第17号溝と並行する南北溝で、同溝からは22mほど離れている。北端は第14号溝の延長線上にあり、全長は約10.4mと短い。幅は中央部が約1.2mで、両端部よりも0.4mほど広くなっている。溝底は40～50cmの深さを有し、北から南へ傾斜している。横断面は薬研状を呈している。

第23号溝　第21号溝とは方向を揃えるが、西へ約4mずれている。北部は土坑や井戸との重複が多く、検出長は8.7mほどにすぎない。ただし、第20号溝の延長線よりも北へは延びていないので、両溝がここで一角をなしているとも考えられる。幅は0.6mから1.5mを測り、南へ行くにしたがって広くなる。横断面は箱薬研形を呈し、深さは35cm～45cmで一定しない。

第20号溝　東群の中ではいちばん北に位置する東西溝で、第11号溝からは約27m離れている。検出長約14.5m、幅約0.7mを測る。東は調査区外、西は土坑群と重複しているが、全長は26mを越えないものと思われる。10cm～20cmの深さを有し、東から西へ向けて傾斜している。横断面は箱形を呈する(第28・29図)。

C　出土遺物

遺物は第22号溝と第30号溝に集中しており、他溝からの出土は極めて少ない。第30号溝の場合、遺物は覆土の中位に多く、分布は溝全体に及んでいる。ほとんどが破片となっており、中には火熱を受けたものも見られる。特に常滑産の甕などは、故意に打ち欠かれているようである。いずれも



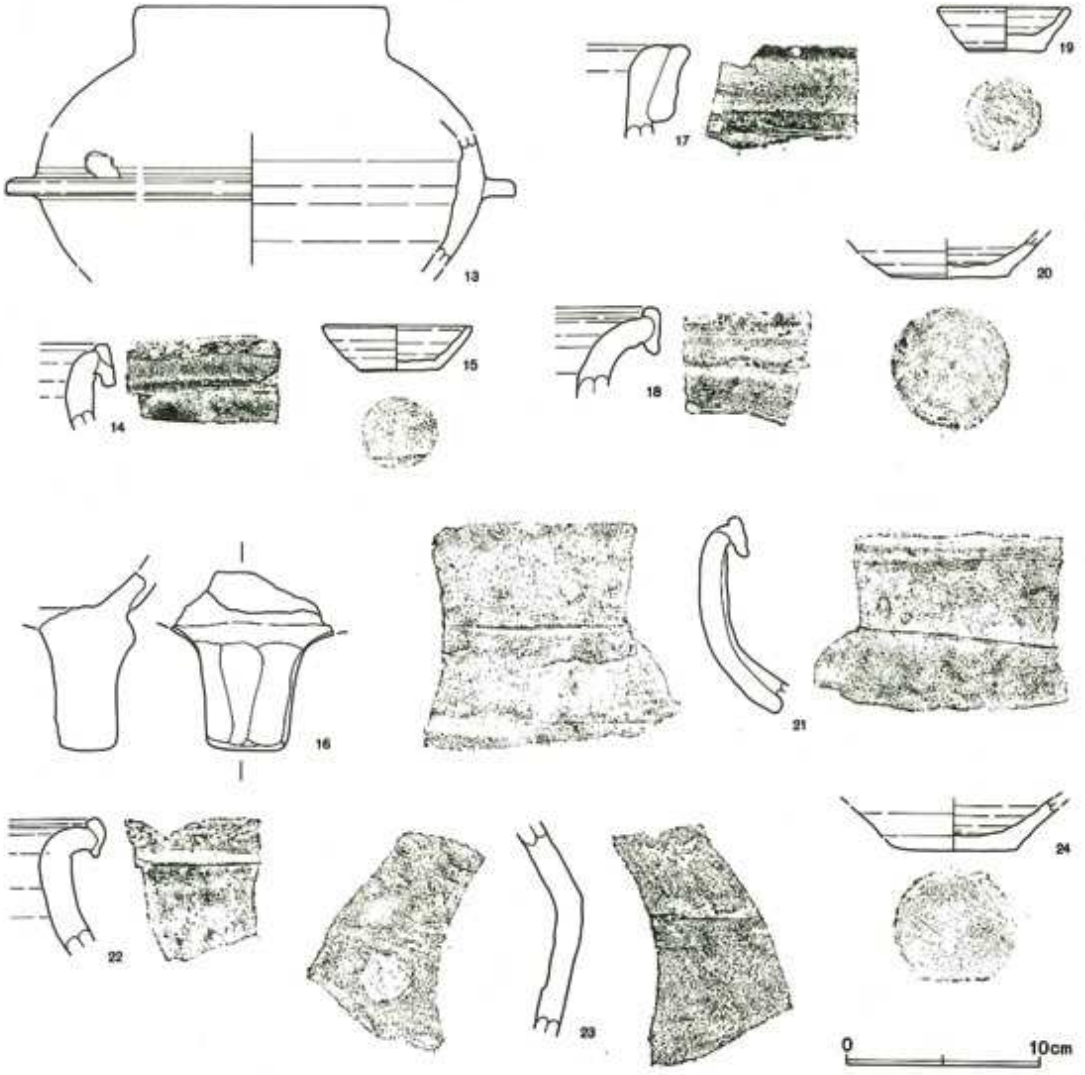
第83図　溝出土遺物(1)

溝の埋没途中に投棄されたものであろう。

第19号溝　第83図11は五輪塔の空・風輪である。多孔質安山岩製で、風輪部下面には出ほぞが刻み出される。全体は砲弾状を呈し、高さ約30cm、最大径15.2cmを測る。

第20号溝　第83図10は砥石で、残存長11.4cm、幅3.2cm、厚さ1.8cmを測る。9も砥石であるが、溝の帰属が不詳であるため、ここに併記する。残存長9.6cm、最大幅3.6cm、最大厚3cmを測る。

第22号溝　第83図1・2は在地産の内耳鍋である。1は40%ほどの残存で、復元口径28cm、現高15.3cm、復元底径25.6cmをそれぞれ測る。口縁部は体部より緩やかな「く」字状に立ち上がり、口縁自体はわずかに内湾する。体部外面は横位のヘラ削りが、内面横位はヘラなでが施される。外面には煤の付着が見られる。底部は平らで、器肉は体部よりも薄い。2は口縁から底部直上までの破片で、復元口径34cm、現高18.2cm、復元底径23cmとなる。口縁部の外反は1よりも弱く、器面の調整も



第84図　溝出土遺物(2)

粗い。外面には煤が付着し、指頭痕も多く見られる。いずれも15世紀中頃のものであろう。

3は中国産の青磁花瓶で、現高3㎝、脚の裾径3.8㎝を測る。

4はかわらけで、40%ほどの残存である。復元口径8㎝、現高2.2㎝、復元底径5㎝を測り、底部は回転糸切り痕が残る。

5は獣足状を呈する手焙りの脚である。現高は5.6㎝で、底面は長さ4.8㎝、幅3.4㎝の鶏卵形となっている。手焙り本体との接合面は平滑で、「く」字状に屈曲している。その中心部には、斜め方向に八角錘状のほぞが造り出されている。

第84図13は土釜胴部破片で、「つば」の張り出しは強い。

第23号溝　第83図6は古瀬戸縁釉の鉄釉皿である。復元口径11㎝、現高2.8㎝、底径5.2㎝を測り、底部には回転糸切り痕が残る。年代的には、15世紀後半(第Ⅲ四半期)に位置づけられよう。

第24号溝　第83図8は片口鉢の口縁部破片である。口縁端部は丸頭状で、内面は沈線状に屈折している。外面には指頭痕が多く残る。

第29号溝　第83図7はほぼ完形のかわらけで、内外面とも煤の付着が顕著である。底部には回転糸切り痕が残るが、中央部はヘラなでが加えられている。口径8㎝、器高2.4㎝、底径4.1㎝を測る。

第30号溝　第85図1は内耳鍋で、体部1/3ほどの破片である。器壁はかなり歪んでいるが、およそ口径31.2㎝、底径22.6㎝、器高16.5㎝に復元される。口縁部の外反は弱く、器壁断面は緩やかな「S」字を描いている。15世紀中頃のものであろう。

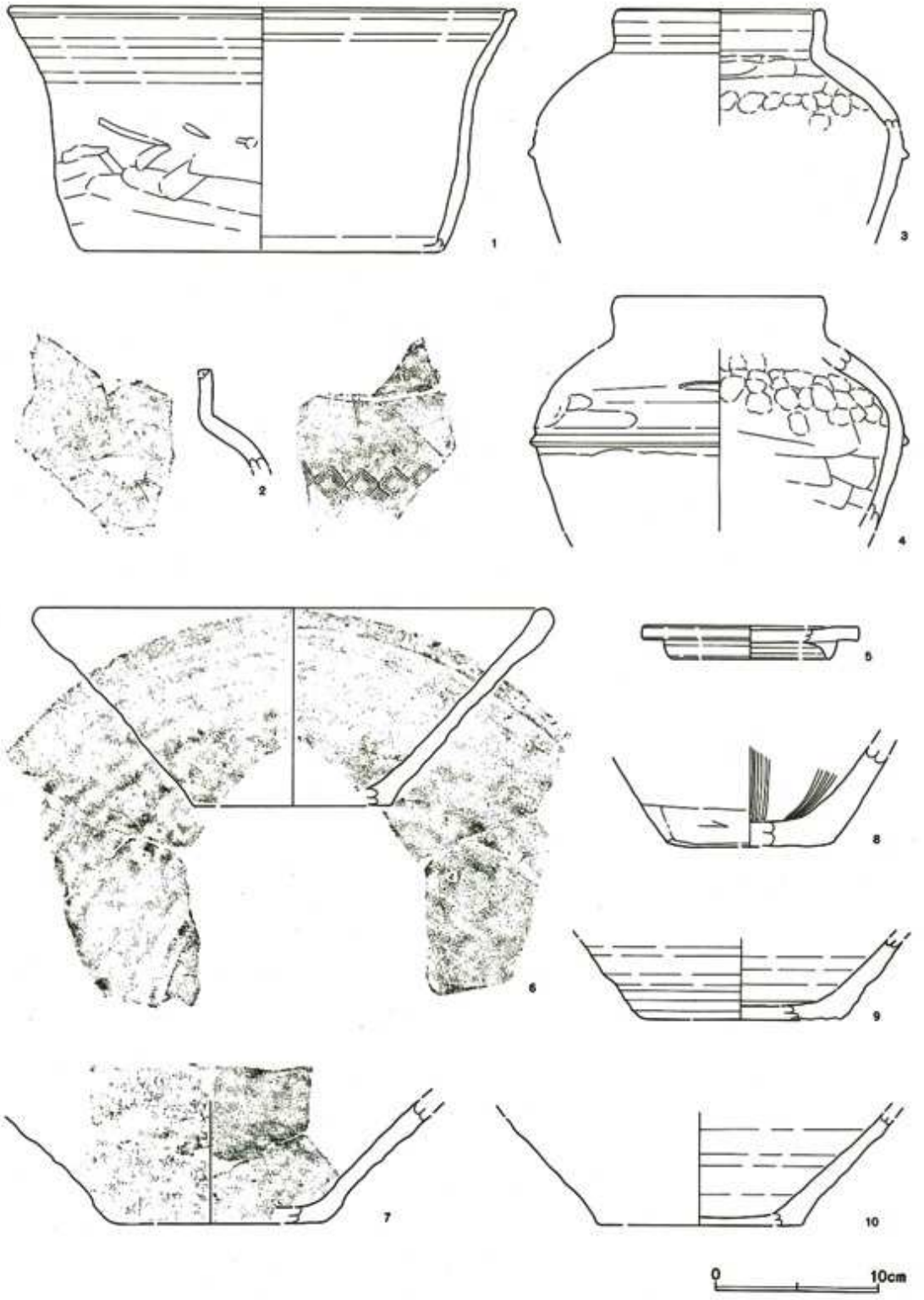
2は手焙りないしは風炉の破片であろう。口縁は頸部で強く屈曲して直立するが、それ自体はやや内湾している。口縁部および肩部には連繋する雷文が押印される。

3・4は土釜で、同一個体と思われる。両破片を合わせた計測値は、口径12.8㎝、現高14.2㎝、胴部最大径(肩部)22.8㎝となる。口縁部は丸みを有し、頸部から直立する。肩部には断面三角形の隆帯が貼付され、その直上に把手が付く(接合部端がわずかに残る)ようである。器表は内外面とも丁寧に撫で付けられているが、内面上部には指頭痕が多く残っている。また、外面下部には煤の付着が見られる。

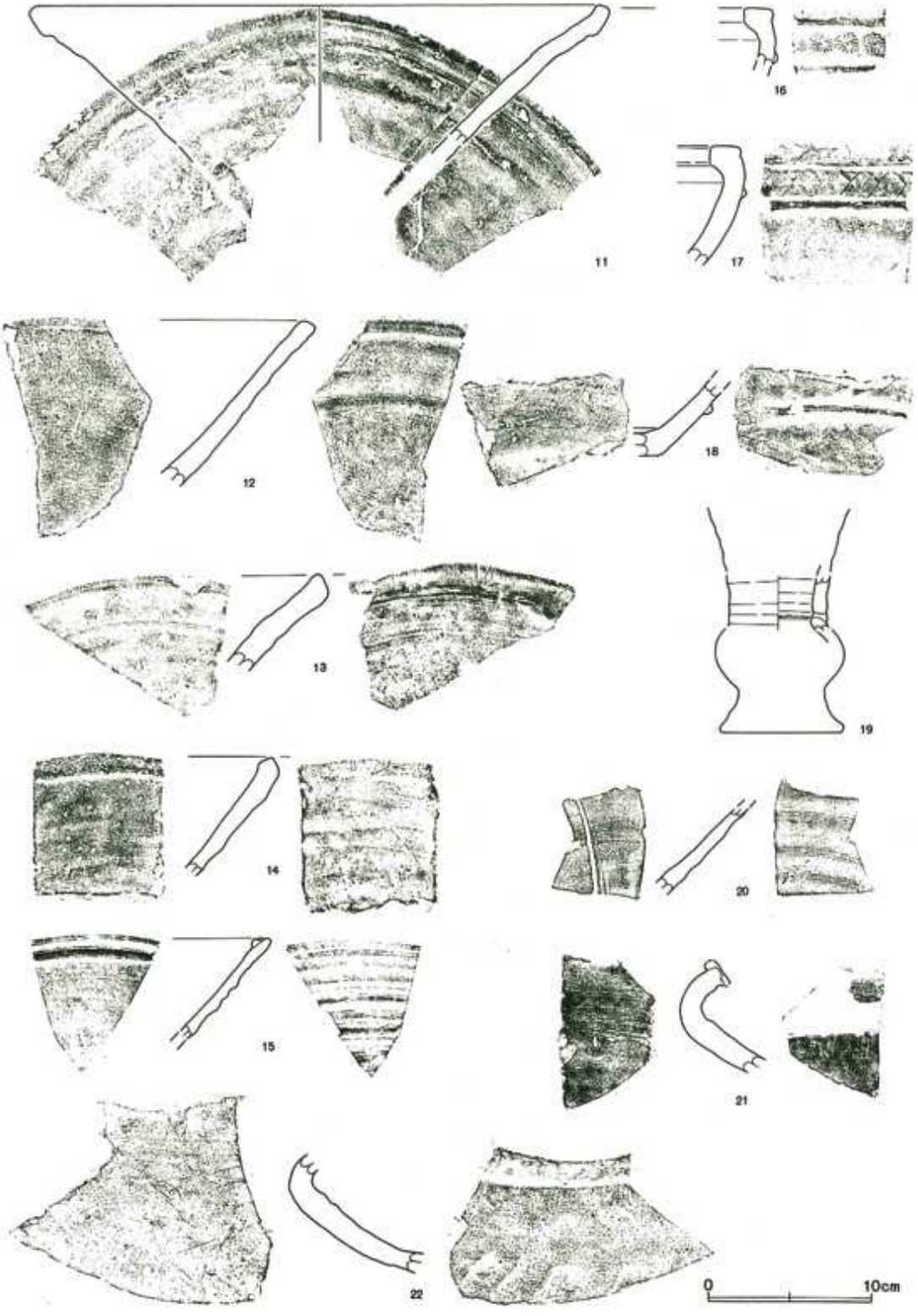
5は円盤状の土製品で、その大きさや形状から見て、土釜の蓋になるものと考えられる。小破片であるが、復元すると外径13.4㎝、「かえり」部径9.1㎝ほどになる。現高は1.9㎝で、「つまみ」のようなものは見られない。「かえり」の突帯は断面三角形を呈し、土釜に接する部分は磨耗している。本例のような土釜の蓋らしきものは、入間郡毛呂山町の堂山下遺跡ＳＢ４、およびＳＥ６からも出土している(宮瀧　1991)。ただし、堂山下遺跡では突帯を「つまみ」と見ているようで、図が本書とは上下逆になっている。

第85図6・7・9・10、第86図11～14、第87図30は片口鉢で、いずれも内面下半部は擦れて滑沢となっている。6は復元口径32㎝、同底径12㎝、現高12.1㎝で、口縁部は肥厚して丸頭状となる。7・9とともに14世紀前半代に位置づけられよう。7・9・10・30は底部片で、復元底径はそれぞれ14.4㎝、12.4㎝、12.4㎝である。このうち、9は常滑系で底面はザラザラとなっている。11～14は口縁部片で、11の復元口径は35.6㎝になる。12は常滑産で13世紀代のものと思われる。

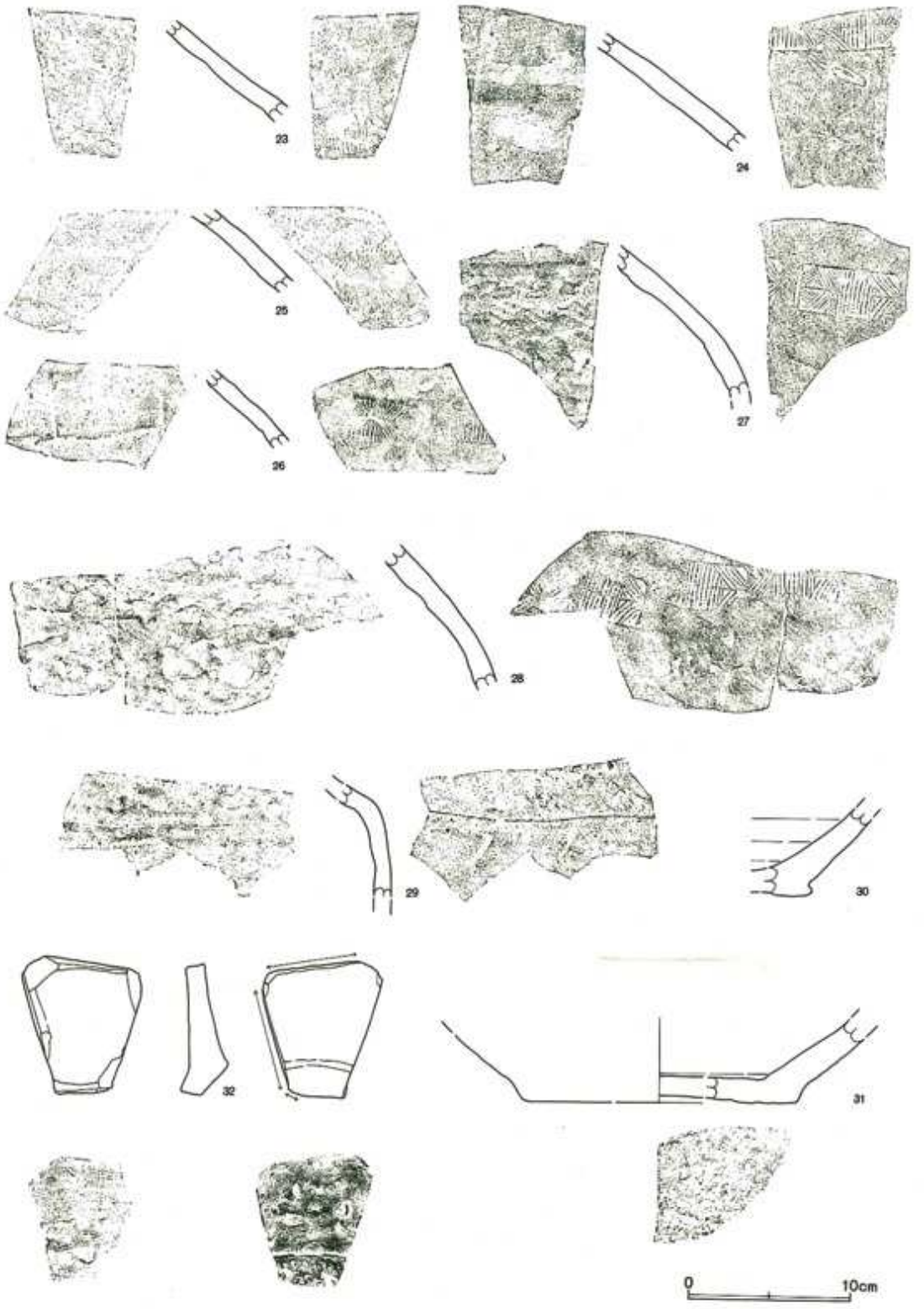
第85図8・第86図15・20は擂鉢である。8は在地産で、5本歯の櫛歯状工具で卸し目がつけられて



第85図　第30号溝出土遺物(1)



第86図　第30号溝出土遺物(2)



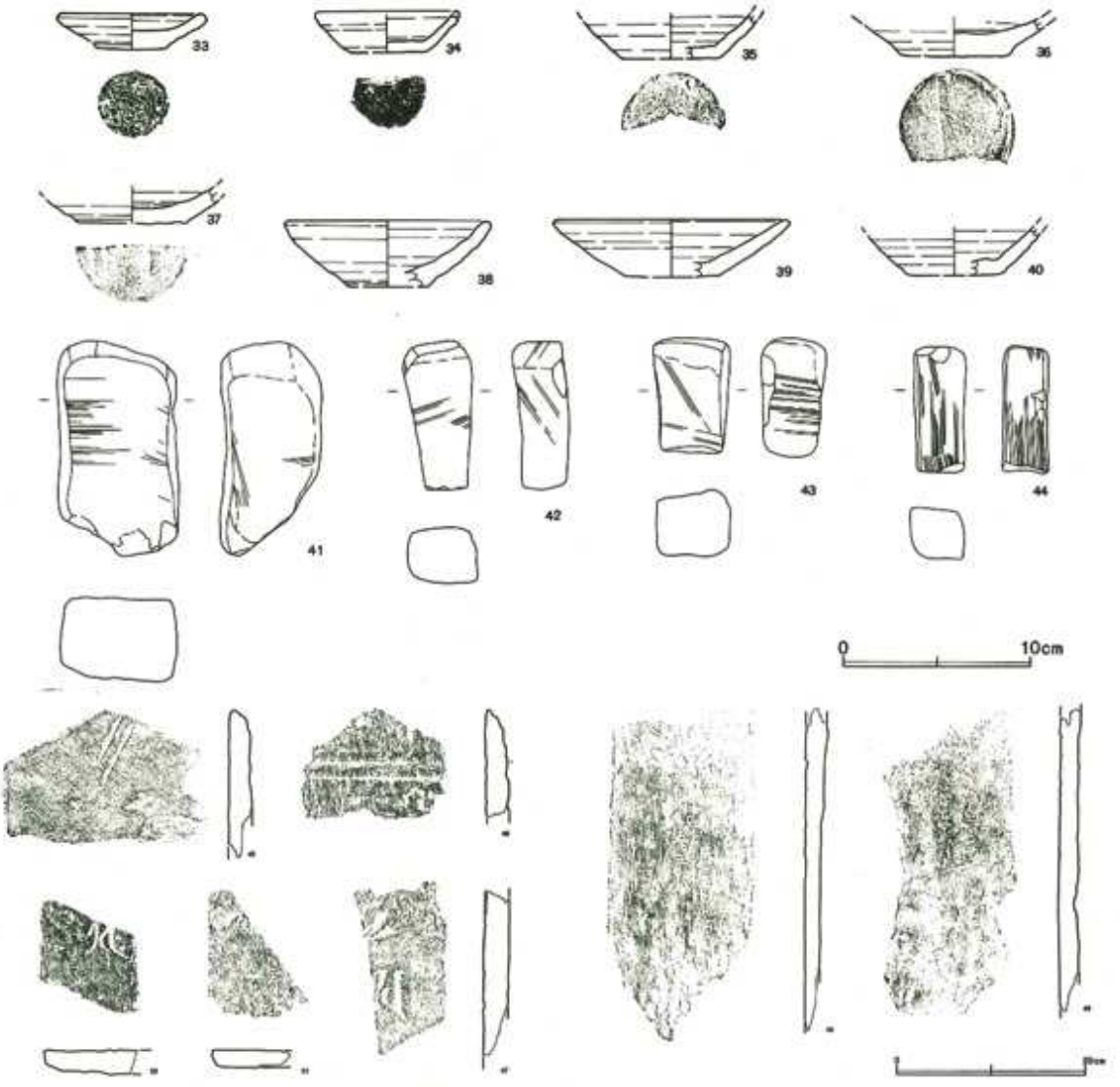
第87図　第30号溝出土遺物(3)

いる。15世紀前半から中頃のものであろう。15は瀬戸産で口縁部内面に隆帯が巡る。20も瀬戸産で卸し目は3本と思われる。ともに15世紀中頃に位置づけられよう。

第86図16・17は手焙りで、ともに口縁部は内溝し、端部は角頭状を呈する。隆帯の上には16が菊花文、17が雷文が押印される。18は手焙りの底部で、やはり隆帯が貼付されている。

19は古瀬戸尊式花瓶の頸部片で、径は6cmほどになろう。14世紀後半から15世紀前半のものであろう。

第86図21・22、第87図23～32は常滑産の甕である。このうち、21と22、25と26、27と28はそれぞれ同一個体と思われる。23～28にはスタンプ文が押印されている。また、21・28・29の表面には煤が付着し、22・25の割れ口には補修(接着)のための漆が残っている。31・32は底部で、32は割れ口が平滑に調整されている。研磨器に転用されたものであろう。27と28は13世紀後半代に属そう。



第88図　第30号溝出土遺物(4)

第88図33～40はかわらけである。33・34は火熱を受けて黒変しているが、他は土師質で浅黄橙色から明黄褐色を呈する。33は復元口径8cm、現高1.9cm、底径3.5cmを測り、器表は内外面ともに煤けている。底部には回転糸切り痕が残る。34は口縁端部を欠き、底面はなでられている。現高2cm、底径4cmである。35は回転糸切りされた底部破片で、現高2.4cm、復元底径5.4cmを測る。36の現高は2.1cm、底径は5.6cmである。37も底部破片であるが、底面はへら削り後なでられている。現高2cm、復元底径5.8cmを測る。38・39も小片で、38は口径11cm、器高3.5cm、底径4.3cmに、39は口径12.6cm、器高2.6cm、底径5cmに復元される。40は底部片で、現高2.6cm、復元底径5.2cmを測る。

第88図41～44は砥石である。いずれも断面は長方形ないしは菱形を呈する。現長・幅・厚さは、他に比して大型の41が11.4cm×6.2cm×4.1cm、42が7.9cm×3.6cm×2.9cm、43が6.2cm×3.9cm×3.6cm、44が6.6cm×2.7cm×2.1cmを各々測る。

第88図45～49は板石塔婆である。45は残存長13.6cm、残存幅21.3cm、厚さ2.4cmの頭部片で、二条線は見られない。46も同様の破片で、残存長11.5cm、残存幅15.1cm、厚さ2.4cmを測る。47は残存長18.3cm、残存幅9.7cm、厚さ2.8cmの小片であるが、主尊の蓮座の一部と脇待である観音(サ)種子が残る。48は残存長34.7cm、残存幅15.3cm、厚さ2.2cmを測る。阿弥陀(キリーク)一尊で、蓮座を備える。紀年銘は「貞和五年(1349)八月日」と刻まれている。49は阿弥陀(キリーク)一尊種子と思われるが表現は拙く、紀年銘も判読できない。残存長32.5cm、残存幅13.8cm、厚さ2.1cmほどである。

第32号溝　第84図14は常滑産の甕の口縁部片で、13世紀後半代のものと思われる。15はかわらけで、内外面には煤が付着している。およそ80%の残存で、口径7.7cm、器高2.4cm、底径4.1cmを測る。16は手焙りの脚で、残存高9.2cm、底面は3cm×4cmほどである。

第34号溝　第84図24はかわらけ片で、底面には回転糸切り痕が残るが、なでが加えられている。現高は2.8cm、底径は6.2cmである。

第36号溝　第88図51は板石塔婆で、残存長13.7cm、残存幅10.5cm、厚さ1.8cmほどの小片である。残存する種子は勢至(サク)であることから、本来はこれを脇待とする阿弥陀三尊板石塔婆であったものと思われる。紀年銘は「□三年七月　七」と読める。

第39号溝　第83図12は半分ほどに欠けた球状の土製品である。径は約4.8cm、中心に向けて円筒形の孔が穿たれている。この孔は未貫通で、用途は不明である。

第84図17・18は常滑産の甕の口縁部片であるが、17は15世紀代、18は13世紀後半とやや年代にひらきがある。

19・20はかわらけである。19は完形で、口径6.8cm、器高2.3cm、底径4cmを測る。内外面には煤が付着し、底面には回転糸切り痕が残る。20は土師質で、現高2.2cm、底径6cmを測り、やはり底面には回転糸切り痕が残る。

第43号溝　第84図21・22・23は常滑産の甕で、21・22は口縁部、23は肩部の破片である。第88図50は勢至(サク)が残存する板石塔婆である。残存長11.7cm、残存幅10.5cm、厚さ2.5cmを測る。

第8表　ウツギ内遺跡溝一覧(1)

No.	大グリッド	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	備考	No.	大グリッド	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	備考
1	え-6・7	26.8	1.00	0.59	N-90°	SD2より新	41	き-9	12.6	0.30	0.30	N-73°-W	SK167より古
2	え・お-6	11.5	0.40	0.17	N-6°-W	SD1,3より古	42	き-10	9.7	0.45	0.26	N-10°-E	SD45と重複
3	お-6	11.7	0.55	0.04	N-90°	SD2より新 SD6より古	43	き-10	12.5	0.50	0.50	N-8°-E	SK207、SD45、47と重複
4	え-6、お-7	16.5	0.60	0.17	N-73°-E		44	き-10	11.0	0.70	0.48	—	SE61、146、SK211、SD43、94と重複
5	お-6・7	17.0	0.65	0.15	N-79°-E	SD7より新	45	き・く-10	13.2	0.50	0.22	—	SD42と重複
6	お-6	3.1	0.60	0.05	N-5°-E	SD3より新	46	き-10	4.8	0.20	0.16	N-6°-E	
7	え・お-7	7.0	0.75	0.02	N-65°-E	SD5より古	47	き・く-10	29.0	1.20	0.19	—	環状である
8	お-6	12.3	0.40	0.09	N-90°		48	け-10	7.0	0.50	0.17	—	SD49、50より新
9	お-6	13.8	0.95	0.21	N-90°	SD10と重複	49	く・け-10	15.0	0.50	0.21	N-0°	SD48より古 SD50より新
10	お-6・7	39.5	0.95	0.09	N-90°	SK3より新 SK4より古	50	く・け-10	14.0	0.50	0.19	N-0°	SD48、49より古
11	お-7	29.6	2.10	0.09	N-90°	SD12と重複	51	け-10	6.5	0.40	0.18	N-0°	SD63と重複
12	お-6・7	38.5	0.85	0.15	N-90°	SD11、17と重複	52	け-10・11	9.6	0.45	0.05	N-77°-W	
13	お・か-7	25.5	0.70	0.36	N-80°-W	SK10より古 SK61より新	53	け・こ-11	12.0	0.70	0.03	N-8°-W	
14	か-7	10.9	0.40	0.06	N-90°		54	け-11	6.0	0.90	0.25	N-90°	SD55より新
15	か-7	13.7	1.00	0.24	N-3°-E	SD17より新	55	け-11	16.0	0.60	0.10	—	SD54より古
16	か-6	5.0	0.60	0.24	N-3°-E	SD17より新	56	け-10・11	25.5	0.55	0.09	—	SE130、131、SD55、56、57と重複
17	お・か-7	24.5	1.45	0.19	N-3°-E	SD15、16より古	57	け-11	18.0	0.60	0.06	—	SD56と重複
18	か-7	3.3	0.45	0.13	N-79°-W	SK33より古	58	く・け-10	9.2	0.60	0.10	N-12°-W	
19	お-7	8.6	0.65	0.20	N-90°	SK47と重複	59	く-9	4.0	1.20	0.48	N-57°-W	SK216と重複
20	か-7	14.9	0.75	0.22	N-90°	SE4、SK47より古 SK50より新	60	け-11	6.2	0.20	3.06	N-15°-E	
21	か-7	10.5	1.20	0.52	N-0°	SK75より新	61	け-11	13.7	0.40	0.04	N-0°	SE122と重複
22	か-8	23.8	0.45	0.30	N-75°-W	SE29、30より新	62	け-11	9.0	0.35	0.10	N-0°	
23	か-8	6.0	1.35	0.50	N-0°	SE27と重複	63	け-10	4.0	0.20	0.17	N-72°-E	SD51と重複
24	か-8	17.5	0.90	0.55	—	SK99より古	64	き-9	12.0	0.75	0.06	—	SE52と重複
25	か-8	3.5	0.30	0.10	N-72°-W	SK150より新	65	欠番	—	—	—	—	—
26	き-8	4.9	0.40	0.10	N-12°-E	SE35より古	66	〃	—	—	—	—	—
27	き-8	23.4	0.90	0.50	N-17°-E	SE35より新	67	お-7	9.3	1.80	0.11	N-68°-E	SK12より古
28	き-7・8	10.4	0.40	0.22	N-75°-W	SK116、146と重複	68	い-3	4.6	0.50	0.17	N-90°	
29	き-8	14.9	0.65	0.47	N-69°-W		69	い-3	7.6	0.88	0.19	N-90°	
30	か・き-8	65.5	2.10	0.91	N-10°-E	SK204と重複	70	い-3	11.4	0.40	0.19	N-90°	
31	き-9	12.5	0.80	0.43	N-4°-W	SD32、33、34、36と重複	71	あ・い-3	14.6	0.45	0.34	N-0°	
32	き-8・9	30.7	0.40	0.43	N-83°-W	SE105より新 SK167より古	72	い-3	12.4	0.40	0.16	N-0°	SD73と重複
33	き-8・9	12.8	0.40	0.30	N-83°-W	SE105より古	73	あ・い-3	13.2	0.60	0.37	N-0°	SD72と重複
34	き-8・9	25.0	1.05	0.34	—	SE105、SK165より古	74	あ・い-2	18.3	0.40	0.11	N-0°	
35	き-9	4.5	0.30	0.08	N-90°	SD36より古	75	う-2	14.3	0.80	0.52	N-19°-W	SK212、213、SD77と重複
36	き-9	21.7	0.40	0.07	N-90°	SD35より新	76	い・う-2	26.8	0.60	0.24	N-13°-W	SD77、83と重複
37	か・き-9	18.5	0.50	0.14	—	SD35、36より新	77	い・う-2	17.7	0.50	0.42	—	SD75、76、83、84と重複
38	き-9	10.2	0.25	0.02	N-8°-E	SK164より新	78	い・う-2	14.8	0.50	0.14	N-29°-W	
39	き-9	16.9	1.10	0.26	N-62°-W	SK167、SD40より古	79	い-1・2	18.0	1.77	0.07	N-90°	SD76、78、80、81、82と重複
40	き-9	6.8	0.50	0.70	N-62°-W	SK167より古 SD39より新	80	う-2	18.0	0.45	0.18	N-2°-W	SK214、SD79、83と重複

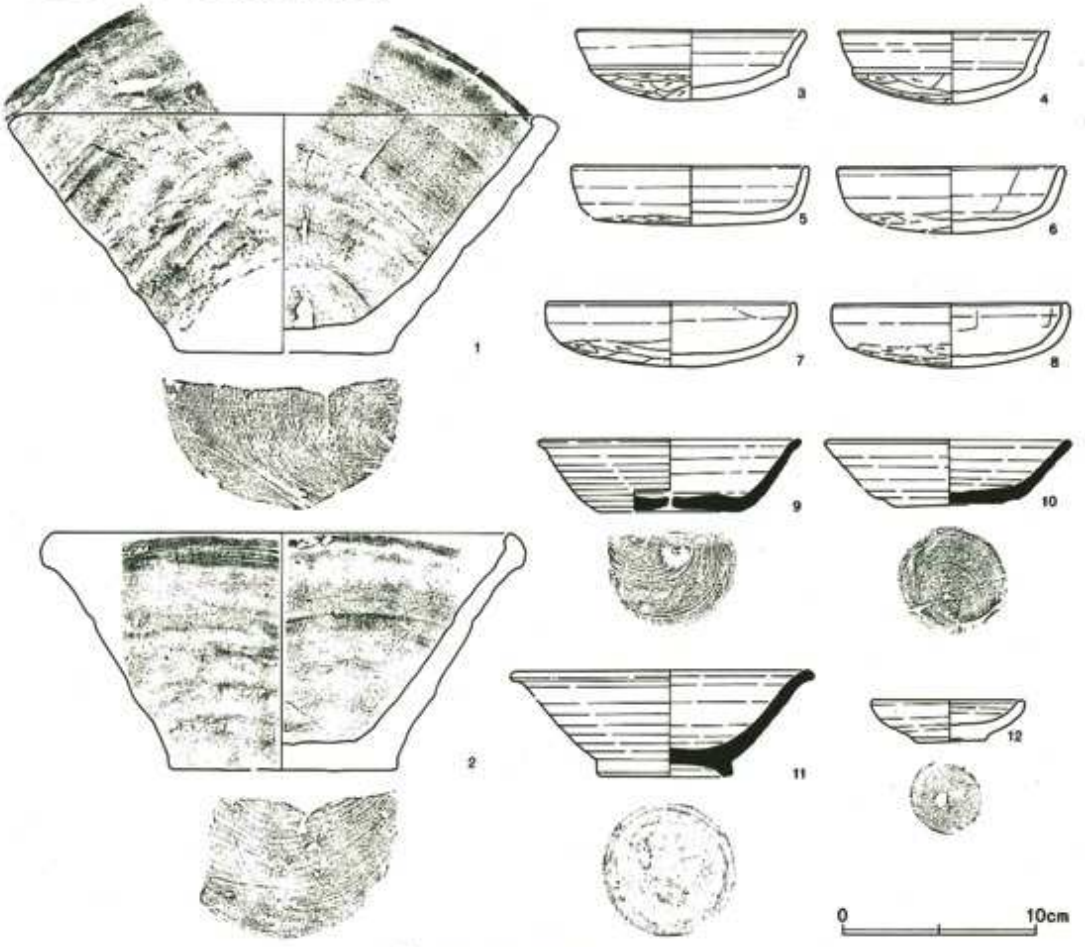
第9表　ウツギ内遺跡溝一覧(2)

No.	大グリッド	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	備考	No.	大グリッド	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	備考
81	う-2	17.2	0.70	0.45	N-18°-W	SD79,82と重複	88	い-2	5.5	0.60	0.16	N-0°	SD89と重複
82	い-2	5.0	0.40	0.33	N-55°-W	SD79,81と重複	89	い-2	5.5	0.90	0.30	N-0°	SD88,90,91と重複
83	い-2	7.5	0.70	0.47	—	SD76,77,80,84と重複	90	い-2	3.5	0.45	0.23	N-49°-W	SD89と重複
84	い-2	4.5	0.45	0.42	N-63°-W	SD77と重複	91	い-2	5.9	0.45	0.18	—	SD89と重複
85	い-2	3.4	0.35	0.15	N-90°		92	い-2	6.0	0.45	0.38	N-51°-W	
86	い-2	5.5	0.45	0.19	N-90°		93	い-1	10.5	2.60	0.13	N-5°-E	
87	い-2	4.9	0.73	0.20	N-0°		94	き-10	8.0	0.40	0.09	—	SD43,44と重複

(5)　河川跡(第6図参照)

河川跡1(全体図参照)

調査II区の南端で検出された東西方向の河川跡で、流路自体はやや湾曲している。精査中に水没してしまったため覆土の観察は実施できなかったが、断面はおよそ緩い箱薬研形を呈するものである。自然流路というよりも、人為的に掘鑿されたものとの印象を受ける。調査前には完全に埋没している。覆土は砂が主体的であった。



第89図　河川跡出土遺物

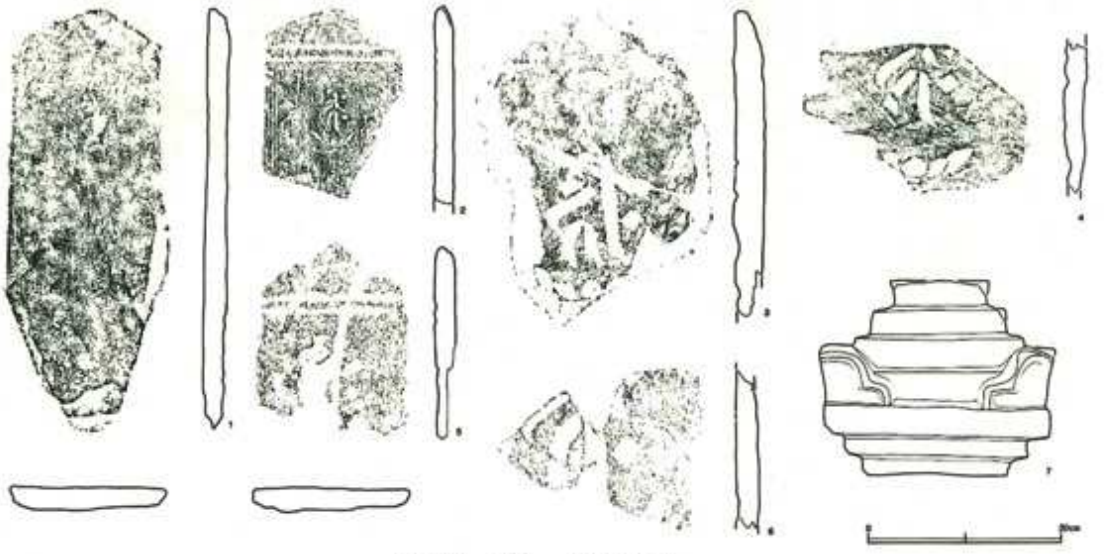
なお、本遺跡のII区とIII区の間には、江戸時代に開鑿された「備前渠」用水が現在も流れている。その流向は河川跡1とほぼ同一で、位置的にもごく近い。このことから見れば、本跡を「備前渠」との関係で捉えることができるのかもしれない。「備前渠」は農業用水として、関東代官頭の伊奈備前守忠次によって拓かれた。しかし、天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う火山灰が水路を塞いでしまったため、その後は洪水が頻発し、用水の機能も著しく低下してしまった。そこで文政11年(1828)、豪農吉田市右衛門たちの出資により、ようやく改修工事が行なわれることとなる。さらに、明治の初頭にも再度改修が行なわれている(埼玉県　1983)。調査では覆土中に火山灰は認められないこと、最上位にはガラスビンの破片などが含まれていることが明らかとなった。このことから、河川跡1を明治期の改修によって廃絶した、「古備前渠」に想定することも可能かと思われる。

図示しえた遺物はいずれも中世のもので、第89図1・2は在地産の片口鉢、12はかわらけである。1は復元口径28.6cm、現高12cm、復元底径12.4cmを測る。2は復元口径25.4cm、現高12.1cm、復元底径12cmをそれぞれ測る。ともに残存率は30%ほどで、内面は使い込まれて滑沢となっている。14世紀中頃に位置づけられよう。12はほぼ完形で、口縁部には煤の付着が認められる。口径7.9cm、現高2.2cm、底径3.7cmを測り、底面には回転糸切り痕が残る。

第90図2は板石塔婆である。残存長20.1cm、残存幅14.4cm、厚さ1.9cmをそれぞれ測る。表面には二条線および枠線が表出され、その内に丁寧な薬研彫りで種子と蓮座、およびやや稚拙な紀年銘が刻まれている。種子は阿弥陀(キリーク)一尊で、紀年銘は「康安(1361)」であろうか。また、蓮座の上には「三ツ鱗」紋が追刻されている。後北条氏と関係があるのであろうか。

河川跡2(第6図参照)

III区東南端、く—10グリッドを中心に位置する。幅3m、深さ0.3m～0.4mほどの落ち込みである。調査時点では河川跡として扱ったが、その後、II区まで延びていないことや、水の流れた様子が認められないことなどが判明したため、ここでは性格不明の遺構として捉えておく。



第90図　グリッド出土遺物

(6) グリッド出土遺物

すべて表土除去中に出土したもので、帰属する遺構は不明である。

第90図1はほぼ完存する板石塔婆で、残存長43.2cm、残存幅16.2cm、厚さ2.4cmを測る。表面の磨耗は激しく、主尊種子の阿弥陀(キリーク)以外は、蓮座と紀年銘らしきものの痕跡が看取できるにとどまる。3は[き－7－15]グリッド出土で、残存長32.5cm、残存幅24.4cm、厚さ3.2cmの破片である。主尊種子の阿弥陀(キリーク)と蓮座の一部が残る。ともにしっかりした薬研彫りで、本来は大型の板石塔婆であったと思われる。5は出土位置不詳。残存長19.7cm、残存幅16.2cm、厚さ2.1cmを測り、二条線と阿弥陀(キリーク)の主尊種子が認められる。6は[き－8－2]グリッド出土の主尊部片で、残存長16.4cm、残存幅21.1cm、厚さ2.2cmを測る。種子の阿弥陀(キリーク)は薬研彫りで深く刻まれ、かなり大型である。7はトレンチ出土の宝篋印塔で、一石から削り出された笠部分の完存体である。残存高20cm、最大幅は一辺24.2cmを測り、上面には円筒形のほぞ穴が穿たれている。

引用参考文献

埼玉県　1983『新編　埼玉県史』資料編13　近世4　治水

宮瀧交二　1991『堂山下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第99集

開通した上武道路(砂田遺跡からウツギ内遺跡方面)

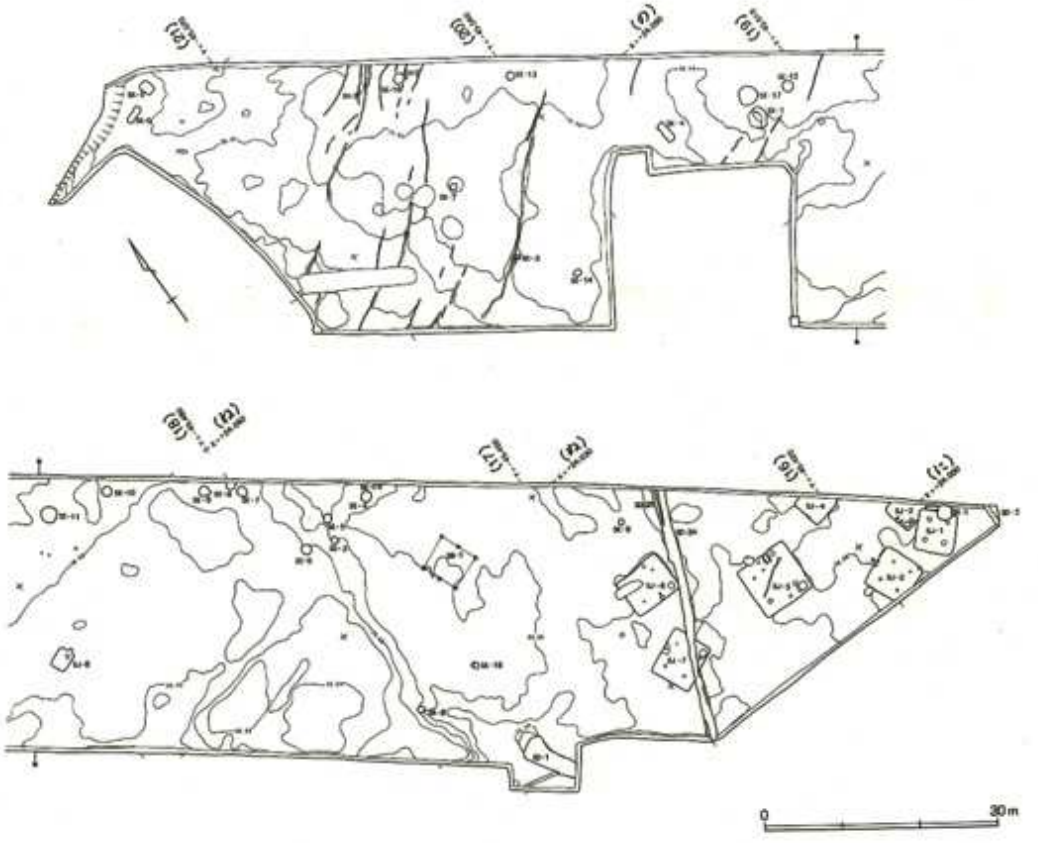
IV　砂田遺跡の調査

1　遺跡の概要

砂田遺跡はウツギ内遺跡の南東部に隣接し、柳町遺跡とは一連の集落跡を形成する。調査区中央部に位置する［ね−19］グリッド杭は、第IX系座標でX＝24.060m、Y＝−45.510mを示す。これを経緯度にすれば、北緯36°12′56.9048″、東経139°19′37.5348″になる。調査前は全面が水田となっており、標高は約31mを測る。

表土は10cm〜30cmほどの耕作土一枚のみが乗り、遺構確認面はほぼ平坦となっている。これは煉瓦用粘土の採掘が行なわれたためで、周辺の地形から復元すれば、本来は中央部から三方へ緩やかな傾斜があったものと思われる。その形跡は航空写真測量により、わずかながら認められる(全体図参照)。

立地と環境でも述べたように、砂田遺跡は小河川によって解析された自然堤防上に営まれている。この自然堤防は本遺跡の北端で切れ、以北は利根川の旧河道となっている。また、東側も蛇行する旧流路に画されている可能性が高いため、遺跡の中心は西方の明戸小学校付近に想定される。調査



第91図　砂田遺跡全体図

区はその東辺部を縦断する形をとり(第4図参照)、面積は11,100㎡に及ぶ。南側は柳町遺跡と接しており、遺跡の境は「小字」を分ける道路においている。ただし、両遺跡を明分するような地形的特徴はなく、遺構の内容も大きく相異するものではない。ここでは便宜上、両遺跡を個別に扱ったが、調査区内に限ってみれば、本来は一つの集落遺跡と捉えられるべきものである。

遺跡の立地する自然堤防は、緻密でしまりの良いローム状の粘質土からなる。この土は乾燥するとひび割れて石のように硬くなるが、水分を吸収するとたちまち粘土化する。上位は黄色味を帯び、下位はより粘性の強い灰色の土となる(第18号井戸跡断面図参照)。

検出された遺構は、住居跡8軒(古墳時代7、平安時代1)、掘立柱建物跡1棟(時期不明)、井戸跡16基(平安時代1、中世)、土坑8基(内2基は井戸跡)、溝3条(中世)である。

住居跡は調査区の南端部に集中しており、平安時代の1軒のみが中央部に位置する。古墳時代の住居跡のうち、第4～7号は砂田遺跡および柳町遺跡の中では最も古い段階に属する。いずれも定形的な模倣坏出現以前の土器群を出土し、しかもしっかりしたカマドを備えている。深谷市周辺における、カマド初現期の集落として注目されよう。

中世の井戸跡はすべて素掘りで、形態や覆土の状況などはウツギ内遺跡のものとほとんど同じである。調査区中央部の東よりにやや多く分布し、重複は見られない。第1号井戸跡から古瀬戸の尊式花瓶の優品が出土しているほか、第18号井戸跡からもまとまった遺物が得られている。

土坑の多くは不定形であり、覆土も単一で薄い。調査時に土坑番号を付した第8・9号土坑は井戸跡である。

遺跡より赤城山を望む(手前は第7号住居跡)

溝のうち2条は薬研堀で、第2号溝は柳町遺跡第2号溝と同一のものである。時期の判断できる遺物はないが、中世以降と思われる。第1号溝は幅が一定せず、底面は南へ傾斜しているものの凹凸が強い。降雨時などに形成された自然流路で、柳町遺跡第1号溝に繋がるものと思われる。

2　検出された遺構と遺物

(1)　住居跡

前述のように、古墳時代の住居跡は調査区の南端部、柳町遺跡の北隣に集中している。グリッドでいえば、[な～に]、[15～16]部分に相当する。集落跡としては柳町遺跡から連続するもので、位置的にはその北端ということになる。このうち、第4～7号住居跡の4軒はほぼ同一時期に営まれた住居跡群で、最大の第5号住居跡を中心に弧状の配置が看取される。

第1号住居跡(第92図)

な—15—24グリッドを中心に位置する。第2号住居跡南壁の一部を切り、第1号井戸跡に北東の壁を切断される。全体は長方形を呈し、隅部はやや丸みを有している。規模は軸長5.35m×4.4m、面積約23.5㎡を測る。長軸の方向はおよそN—45°—Eを指し、遺構確認面から床面までの深さは5cm～10cmと浅い。

床面は中央部がわずかに高く、壁際でいくぶん柔軟なものの、特に硬化したような部分は認められない。各壁の立ち上がりは概ね垂直で、部分的に壁溝が巡る。壁溝は幅10cm～15cm、深さ5cmほどである。

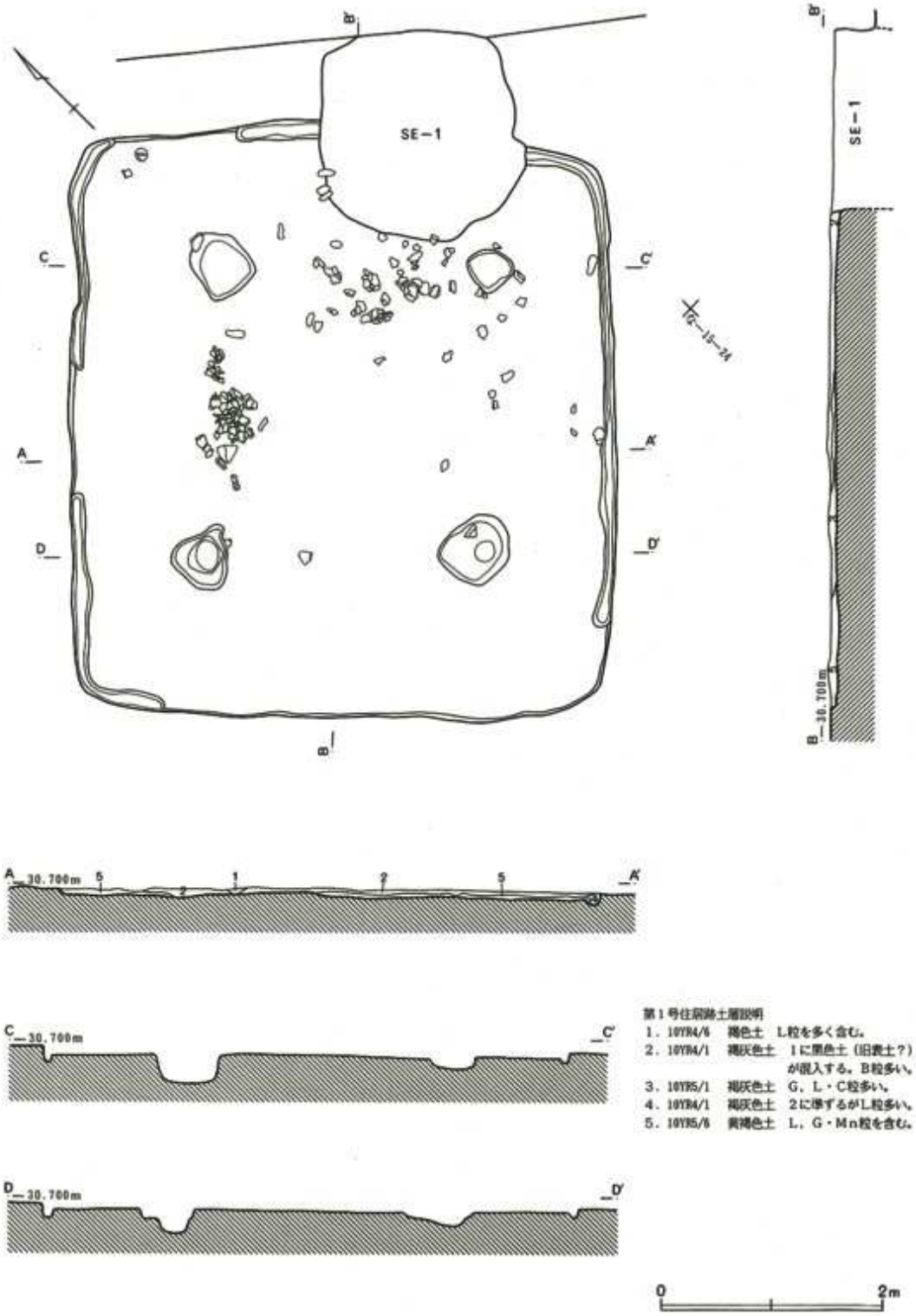
カマドは慎重に精査を行なったにもかかわらず、その痕跡すら検出することはできなかった。おそらくは、第1号井戸跡の構築時に破壊されたものと考えられる。

柱穴は4箇所確認された。いずれも不整形で、掘り込みは10cm～25cmの深さである。貯蔵穴は検出されなかった。

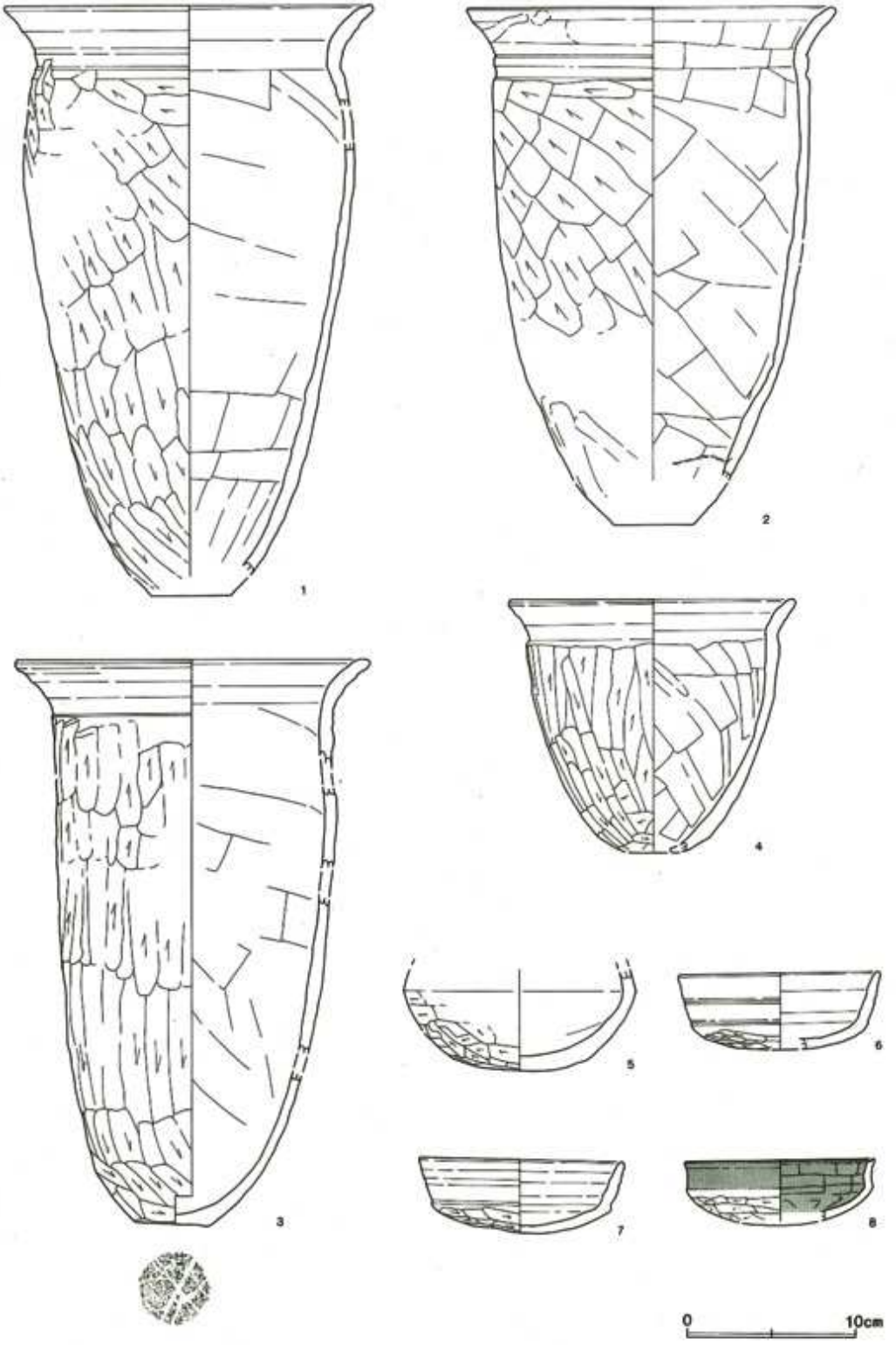
遺物は床面直上より、甕・甑・坏などが出土している。完形品はなく、破砕状態で柱穴間に散乱していた。

第1号住居跡出土遺物(第93図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	(22.0)×(33.6)×—	30%	W+W′+B′	橙	
2	〃	(22.0)×(27.9)×—	40%	W+W′+B′多	〃	
3	〃	(21.6)×(31.6)×4.0	50%	W+R+B′	〃	底部に木葉痕
4	甑？	(16.8)×(15.0)×—	40%	W′+B′多	明赤褐	
5	小鉢？	—　×(6.7)×—	50%	W′+B′	〃	
6	坏	(12.2)×(4.2)×—	30%	W′+粗R+B′	〃	
7	〃	12.1 × 4.3 ×—	80%	W+B′	灰白	
8	〃	(11.4)×(3.1)×—	25%	W+W′+B′	赤褐	SE-1へ流入したものと思われる。比企型、赤彩


SE−1
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
G−15−24
30.700m
第1号住居跡土層説明
1. 10YR4/6 褐色土 L粒を多く含む。
2. 10YR4/1 褐灰色土 1に黒色土（旧表土？）が混入する。B粒多い。
3. 10YR5/1 褐灰色土 G、L・C粒多い。
4. 10YR4/1 褐灰色土 2に準ずるがL粒多い。
5. 10YR5/6 黄褐色土 L、G・Mn粒を含む。
0
2m

第92図　第1号住居跡



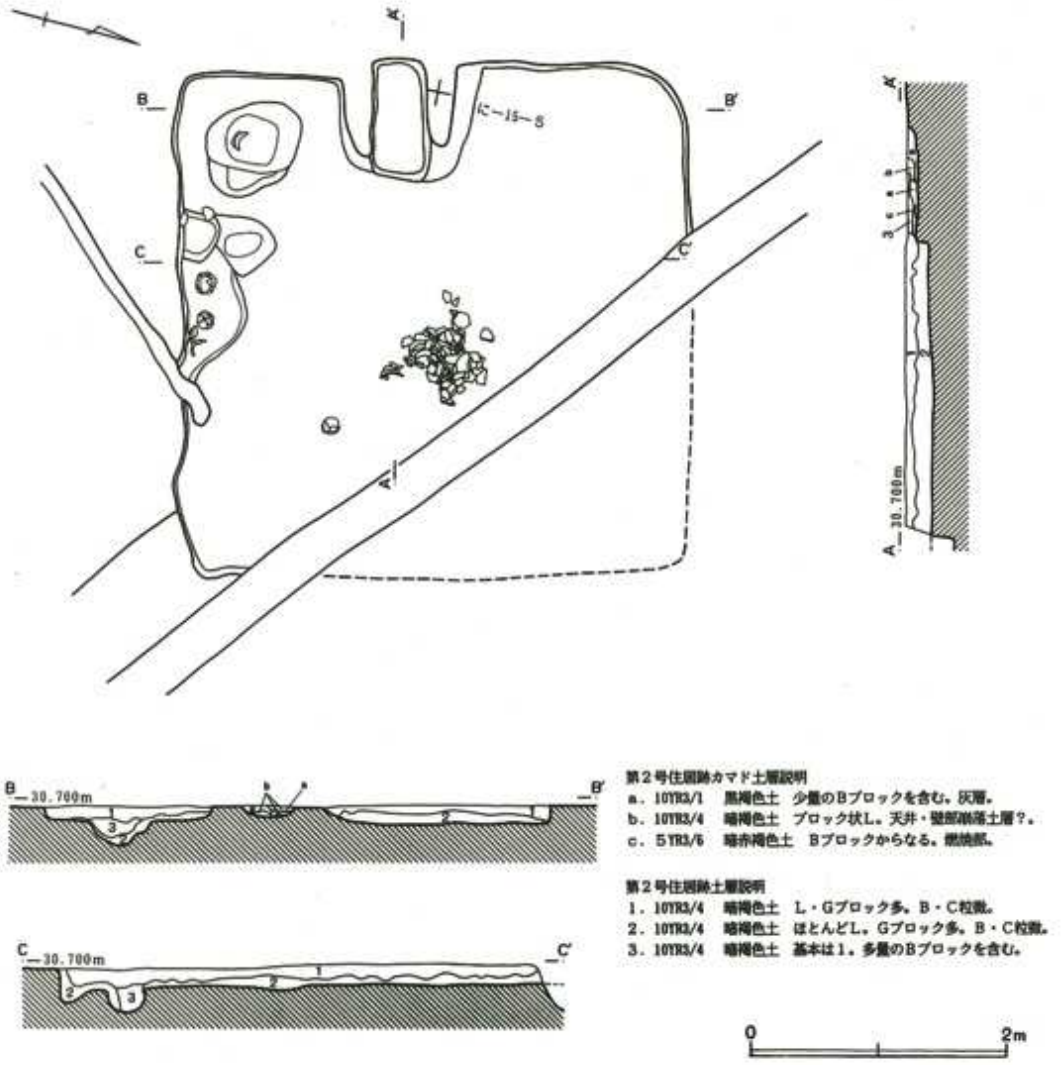
第93図　第１号住居跡出土遺物

第２号住居跡(第94図)

に―15―４グリッドを中心に位置する。北東の1/4ほどは調査区外に出ているが、およそ全体は方形を呈する。また、南壁の一部は第１号住居跡に切り取られている。規模は約3.9m×４mを測り、面積は15.6m²程度になると思われる。主軸方向はN―100°―Wを指す。

床面は軟質で、中央部から南は一段低くなっている。遺構確認面からの深さは北側で約14cm、南側で約22cmである。ところが床面と覆土２はほとんど同質なため、その境界は不明瞭である。カマドもこれより高くなっている。あるいは覆土２は貼り床の充填土で、覆土１との境が床面なのかもしれない。覆土として見てもあまり相異はなく、地山の粘質土が主体である。全体的に粘性・しまりが強く、色調もあまり変化がない。

カマドは西壁の中央部から、わずかに南へ寄っている。袖は地山を削り出したもので、高さは８



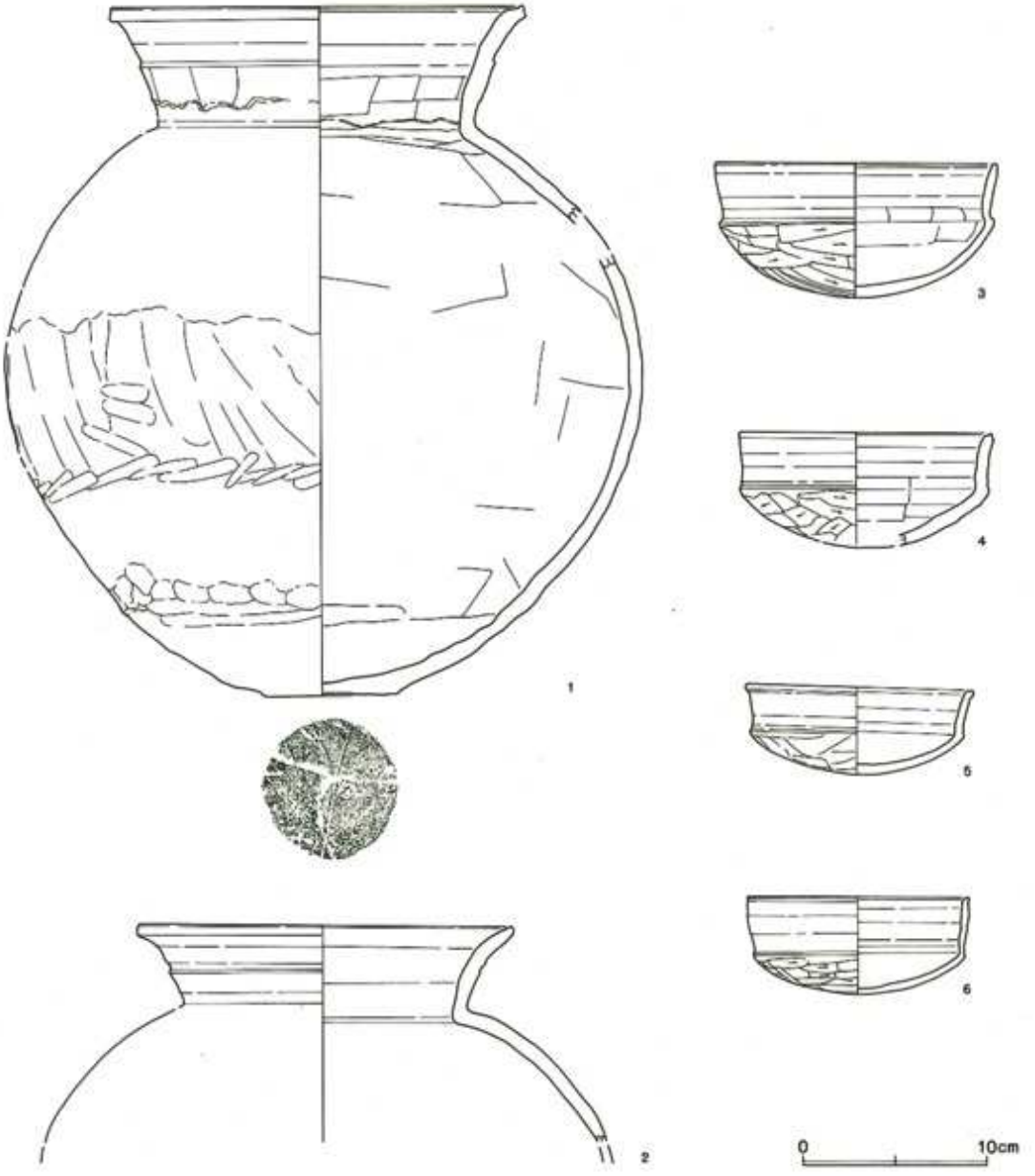
第94図　第２号住居跡

cm弱である。燃焼部は96cm×42cmの長方形を呈し、火床面および各壁はよく焼けている。

貯蔵穴は南西隅部(カマド左脇)に設けられ、東側にテラス状の張り出しを持つ。平面は50cm×70cmの不整な楕円形で、深さは24cmを測る。底面は丸みが強く、壁の立ち上がりも緩やかである。

調査範囲内での壁溝・柱穴確認はできなかったが、南壁中央部には幅40cm、深さ15cmほどの落ち込み、および径40cm、深さ20cmのピットが見られる。

遺物は住居跡中央部の床面上より壺2、南壁の落ち込みより坏3、貯蔵穴より坏1が出土している。壺はともに細かい破片となっており、欠損が多い。



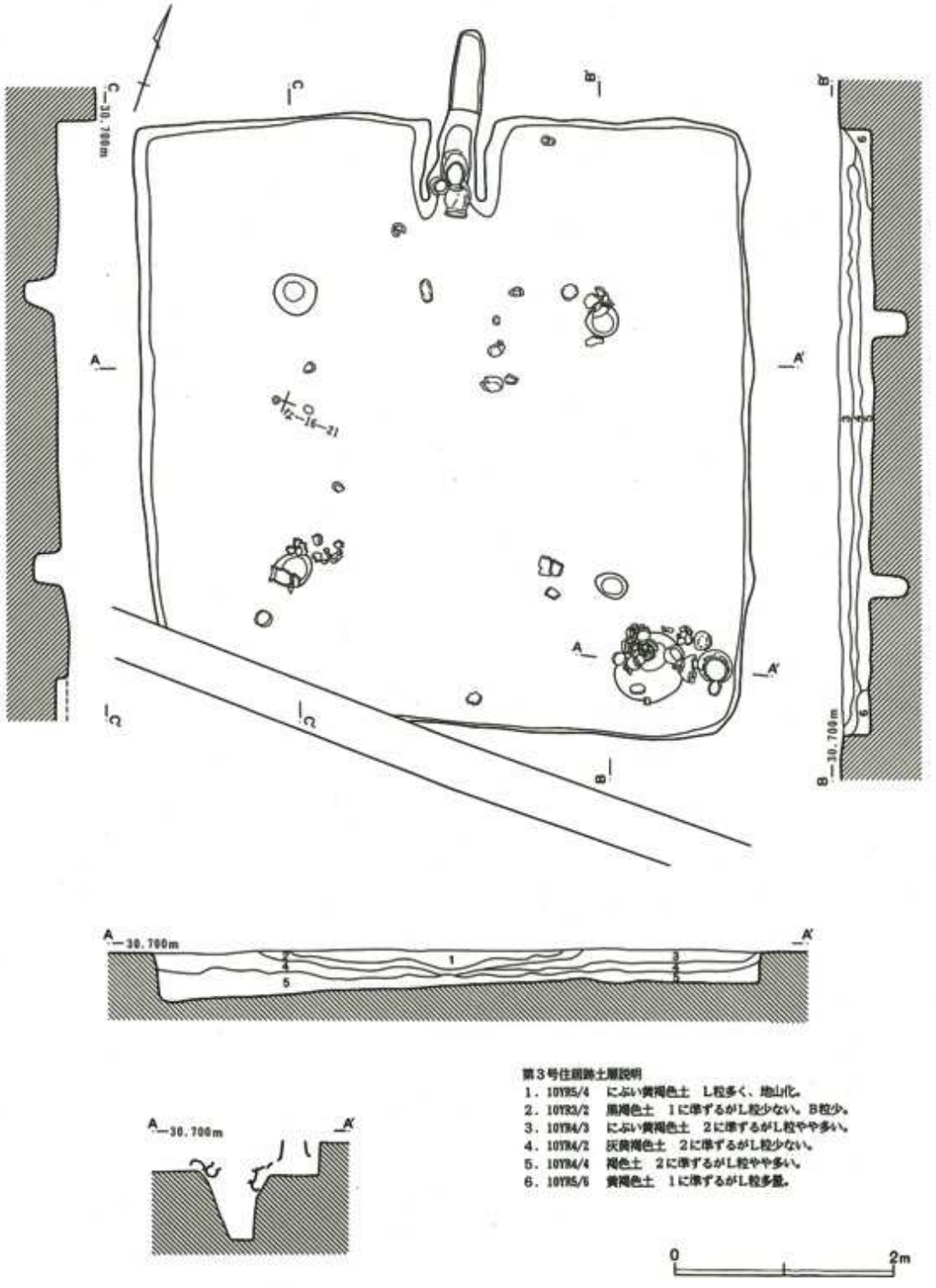
第95図　第2号住居跡出土遺物

第2号住居跡出土遺物(第95図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	22.4 × 37.1 ×7.3	60%	W′+R+B+B′	橙	底部に木葉痕
2	〃	20.3 ×(11.8)× —	口縁～肩部	W′多+B′	〃	
3	坏	15.2 × 7.3 × —	90%	W+W′+B′微	明赤褐	
4	〃	(14.8)×(6.1)× —	40%	W+W′+R	橙	
5	〃	12.1 × 5.3 × —	95%	W′+B′	〃	
6	〃	12.2 × 4.7 × —	95%	W+R+B′	〃	

第3号住居跡出土遺物(第98・99・100・101図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	(18.4)×(14.1)× —	口縁～肩部	W′+B′多	橙	
2	〃	20.7 ×(8.5)× —	〃	W′+B′	〃	
3	小型壺	9.0 × 12.7 × —	ほぼ完形	針状W+B′多	〃	
4	小型甕	12.0 × 14.4 ×4.5	完形	W+W′+R	〃	
5	〃	13.6 × 14.6 ×6.2	95%	W′+B+B′	〃	
6	甕	(19.1)× 32.6 ×5.7	70%	粗(W+W′+B′)	〃	
7	〃	(19.0)×(32.8)×5.5	50%	R′+B′	にぶい橙	
8	〃	19.0 × 30.6 ×4.8	ほぼ完形	W+B′	〃	口縁の歪みが強い
9	〃	18.0 ×(22.7)× —	口縁～胴部	粗(W+W′+B′)	橙	
10	〃	18.4 ×(23.1)× —	口縁～胴下半部	粗W′多+R+B′	にぶい橙	
11	甑	13.1 ×(20.1)× —	上半部	W′+R+B	橙	
12	坩	9.2 × 16.2 × —	95%	W′+R+B′	〃	
13	坏	15.8 × 6.7 × —	完形	W+W′+B′	〃	
14	〃	16.2 × 7.2 × —	90%	W+R多+B′	〃	
15	〃	14.8 × 6.8 × —	ほぼ完形	W′+B′	〃	
16	〃	12.6 × 5.2 × —	〃	W′+R+B′	〃	
17	〃	12.4 × 4.7 × —	完形	W′+B′	〃	
18	〃	12.8 × 5.4 × —	ほぼ完形	W′+B′多	〃	
19	〃	12.4 × 4.8 × —	95%	W+W′+B′	〃	
20	〃	12.2 × 4.8 × —	95%	W+W′+R+B′	〃	
21	〃	12.4 × 4.8 × —	完形	W′+R+B′	〃	
22	〃	12.8 × 4.7 × —	90%	W′+R+B′	〃	
23	〃	13.5 ×(5.0)× —	70%	W+W′+R+B′少	〃	
24	〃	12.1 × 4.6 × —	90%	W′+B′	〃	
25	〃	12.4 × 5.7 × —	完形	W′+B′	〃	
26	〃	12.4 × 5.0 × —	〃	W+W′+B′	〃	
27	〃	12.2 × 5.3 × —	〃	W+W′+B′	〃	
28	〃	12.2 × 5.6 × —	〃	W+W′+B′	〃	
29	〃	12.3 × 5.5 × —	〃	W+W′+B′	〃	
30	〃	12.6 × 5.6 × —	80%	W′+R少+B′	〃	
31	〃	12.2 × 5.4 × —	90%	W′+B′	〃	

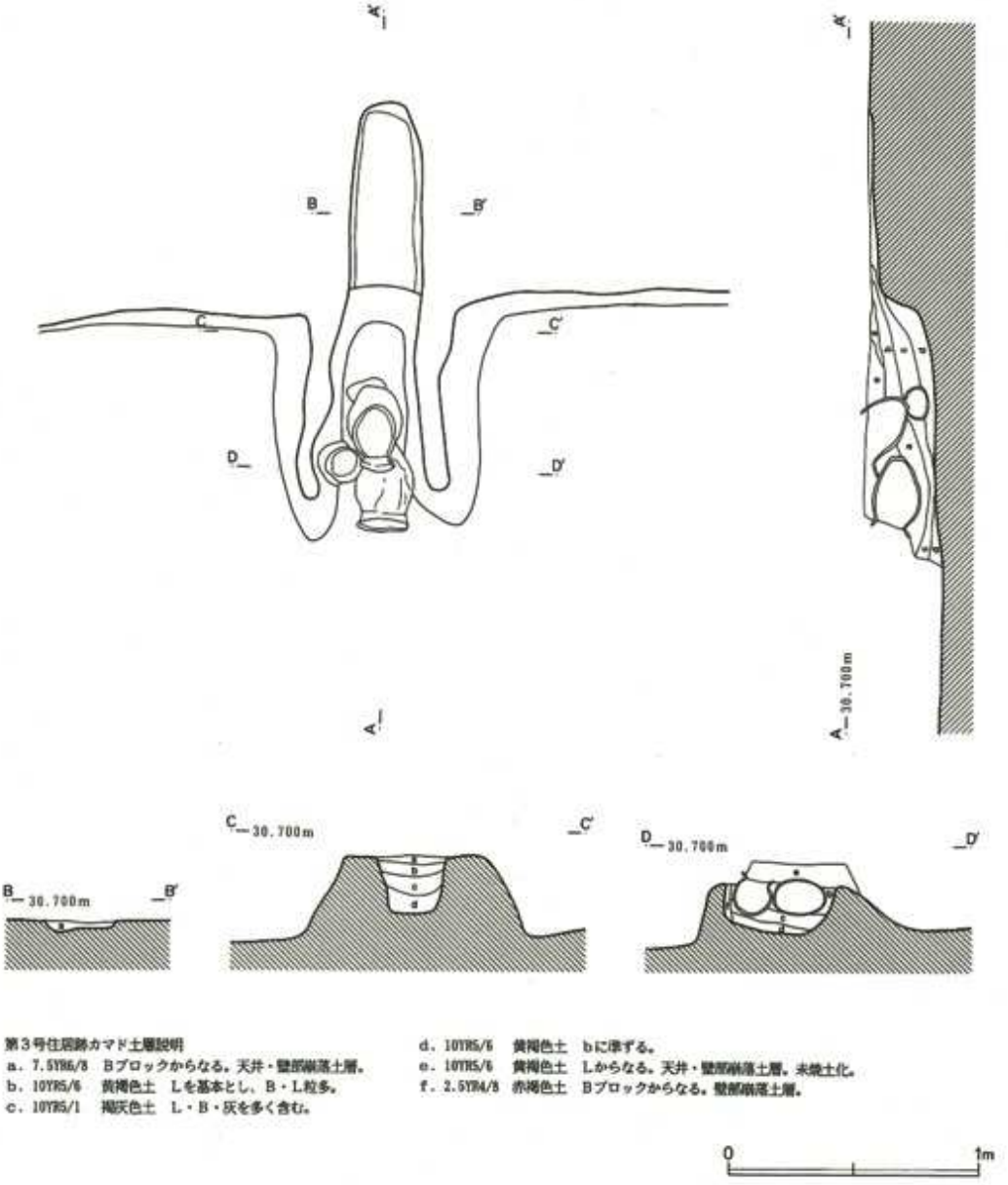

C—30.700m
B—30.700m
A—30.700m
A'
第3号住居跡土層説明
1．10YR5/4　にぶい黄褐色土　L粒多く、地山化。
2．10YR3/2　黒褐色土　1に準ずるがL粒少ない。B粒少。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　2に準ずるがL粒やや多い。
4．10YR4/2　灰黄褐色土　2に準ずるがL粒少ない。
5．10YR4/4　褐色土　2に準ずるがL粒やや多い。
6．10YR5/6　黄褐色土　1に準ずるがL粒多量。
0
2m

第96図　第3号住居跡

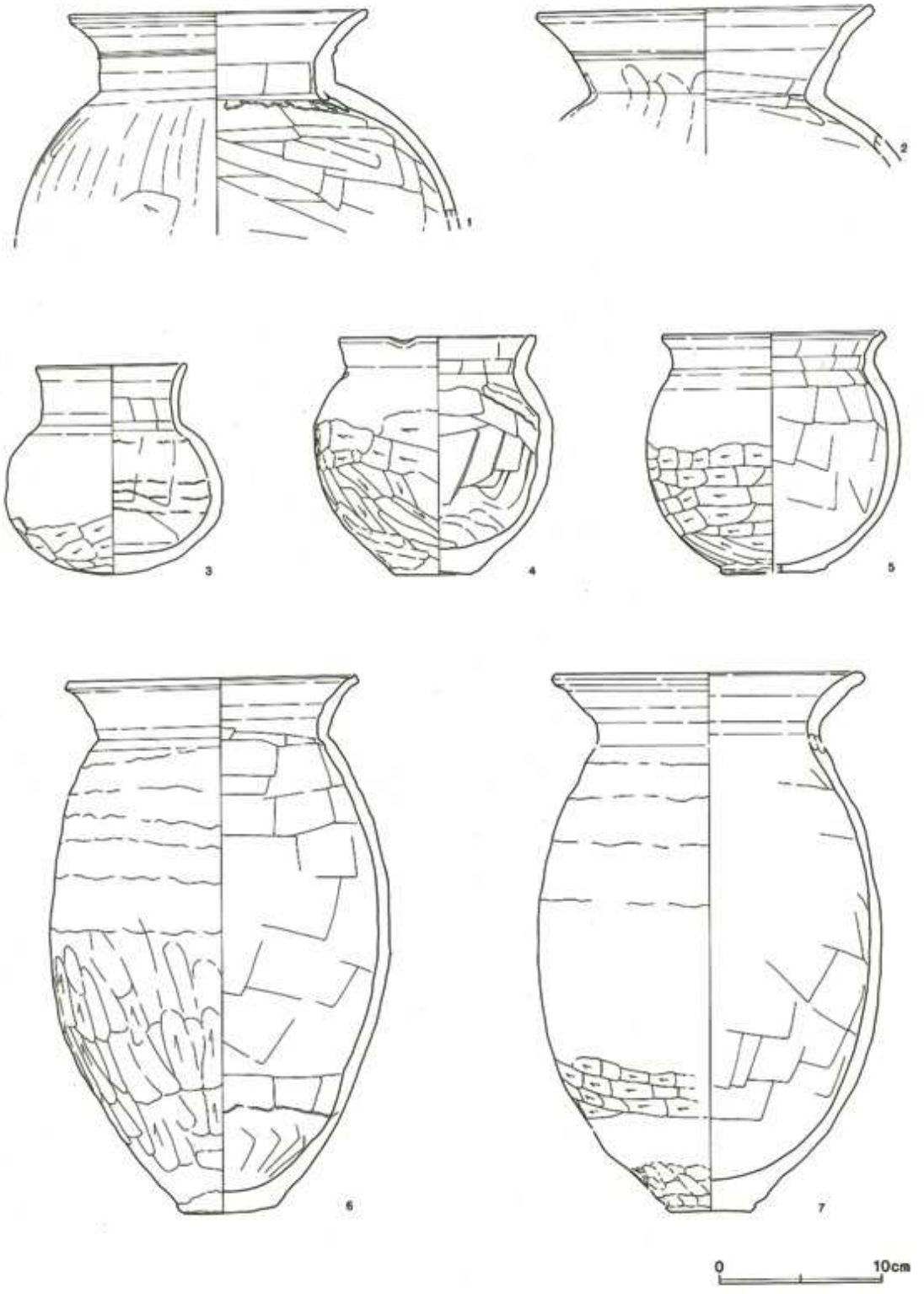
第３号住居跡（第96・97図）

な―15―25グリッドを中心に位置する。表土除去後に排水側溝の掘鑿を行なったため、南西隅部を切断してしまった。それを除けば遺存状態は極めて良好である。住居跡の平面は整った正方形で、一辺は5.55mを測る。各壁は直線的に掘られ、隅部もほぼ直角をなしている。面積は約30.8m²となり、主軸方向はN―23°―Wを指す。

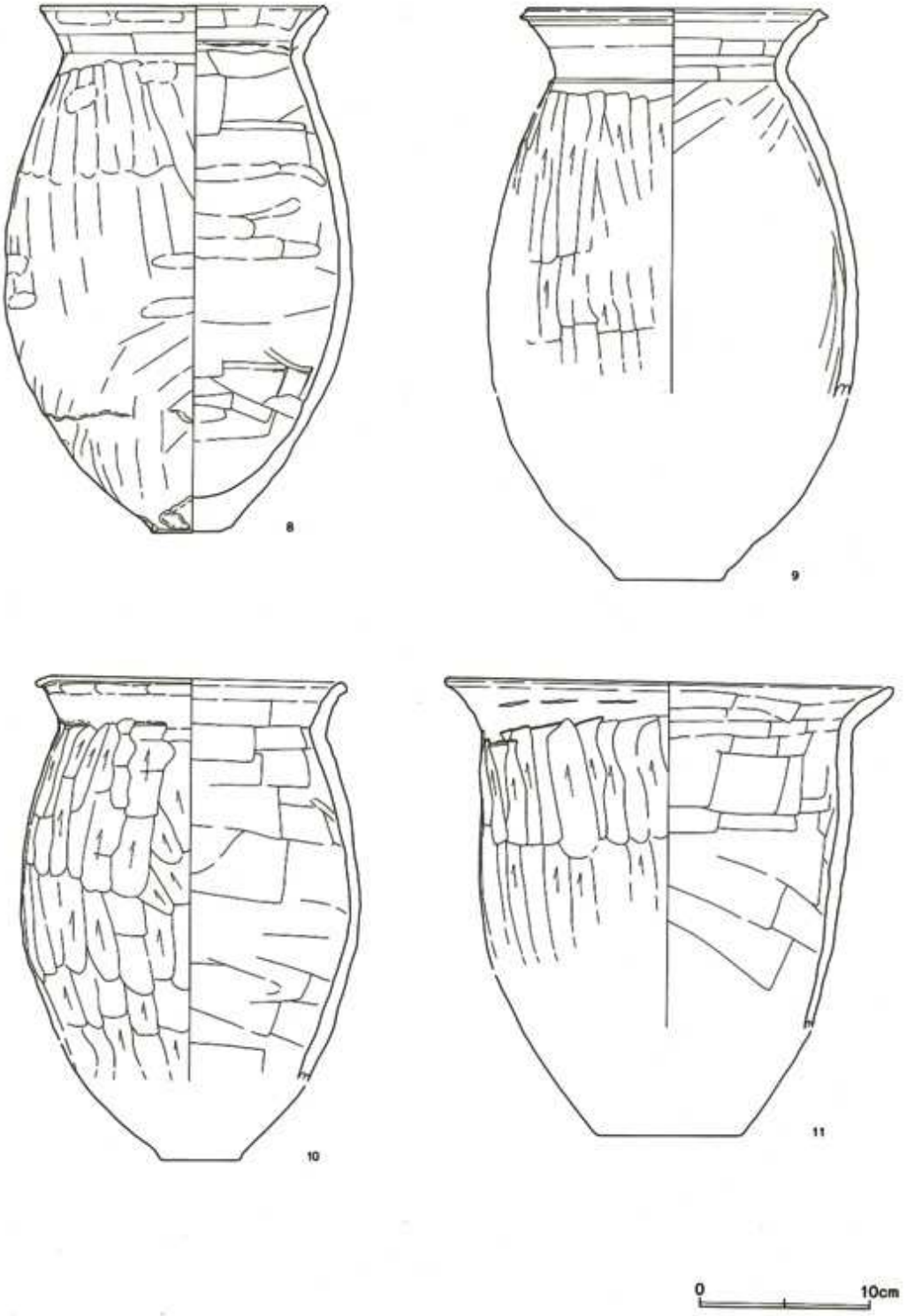
本跡の床面も比較的軟質で、地山化の進行が認められる。このため、特に踏みしまったような部位は観察できなかったが、いくぶんカマドの前面に硬さが感じられた。遺構確認面からは30cm～43



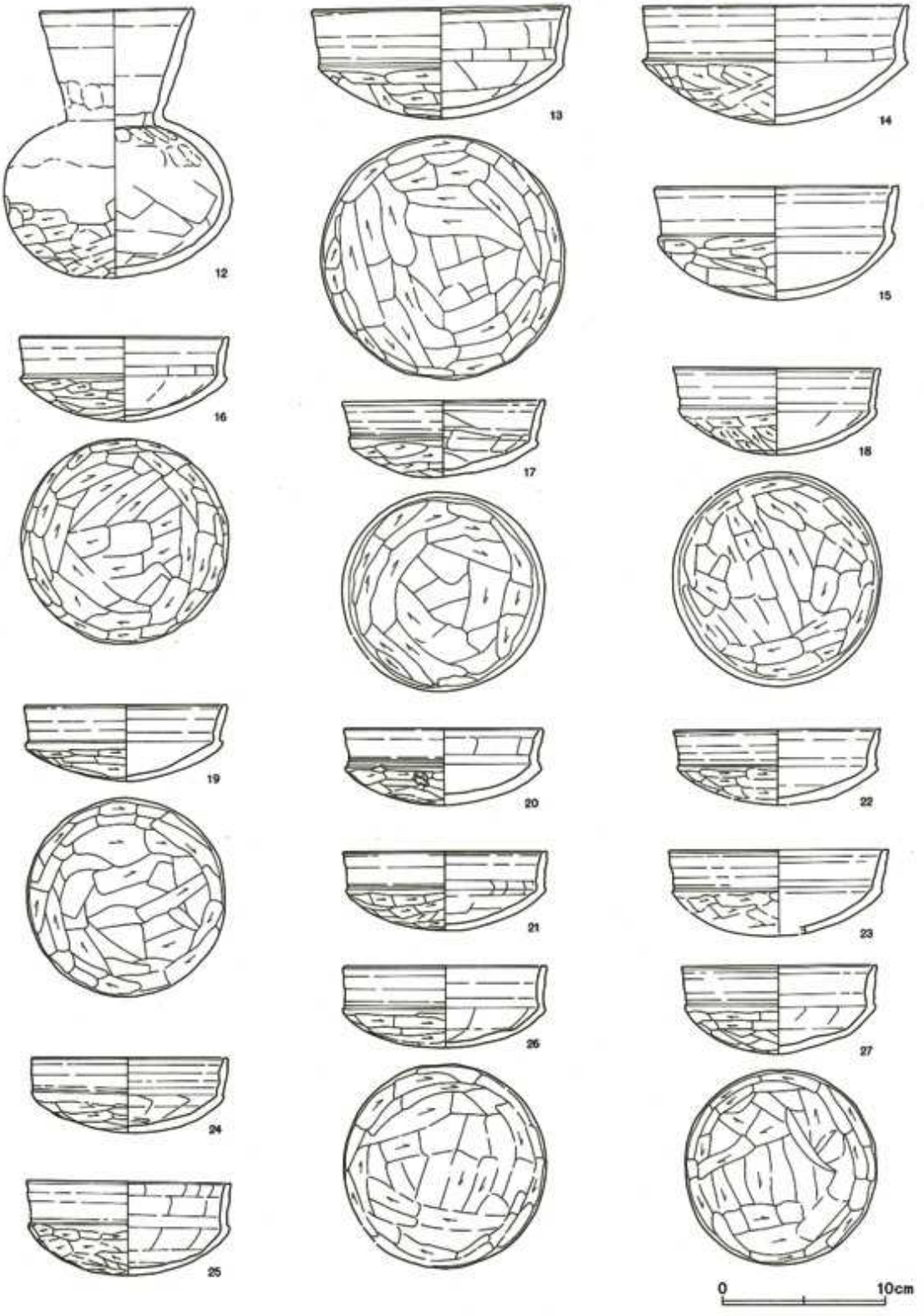
第97図　第３号住居跡カマド



第98図　第３号住居跡出土遺物(1)



第99図　第３号住居跡出土遺物(2)



第100図　第３号住居跡出土遺物(3)

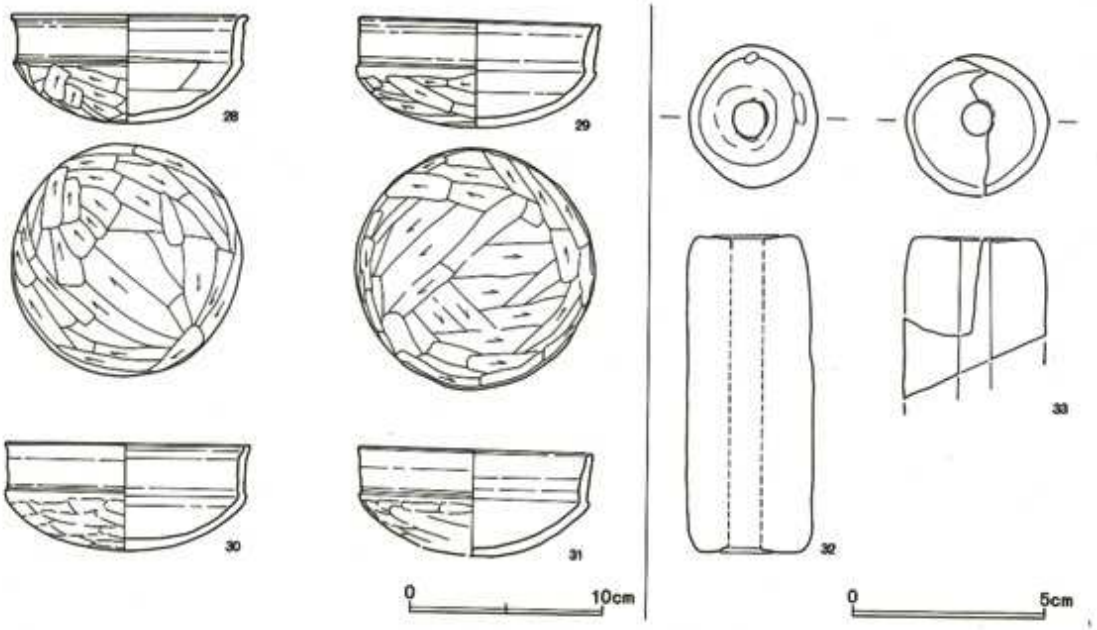
cmの深さを有し、東から西へ向けて緩やかに傾斜している。

カマドは北壁中央部に付設されている。その中心線は壁と直交せず、大きく東へ偏向している。袖は壁より削り出されており、焚き口部へいくに従って低くなる。燃焼部は細長く、奥行き70cm、幅25cmとなっている。長さに比して幅はかなり狭いという印象を受ける。火床面と両袖の内面は赤焼が著しい。なかでも袖部分は完全に焼土化し、硬くしまっている。火床面は中央部側がわずかに深く、煙道部へは急角度で立ち上がっている。その煙道は浅い溝状で、なだらかな傾斜を有している。燃焼部からは完形の甕3個体(長胴2・小型1)と、坏1個体がまとまって出土している。その状態はカマド使用当時の構架状況を保っているものと思われる。これより復元される姿は、おおよそ次のようなものであろう。まず、火床面には支脚として坏(23)が正位に据えられ、この上に長胴甕(6)が乗る。焚き口側には直列して長胴甕(8)が並べられ、二つの長胴甕と左袖の間には小型甕(5)が架けられる。長胴甕は互いに寄り掛かり合い、これを小型甕が袖と固定するという形が想定できる。

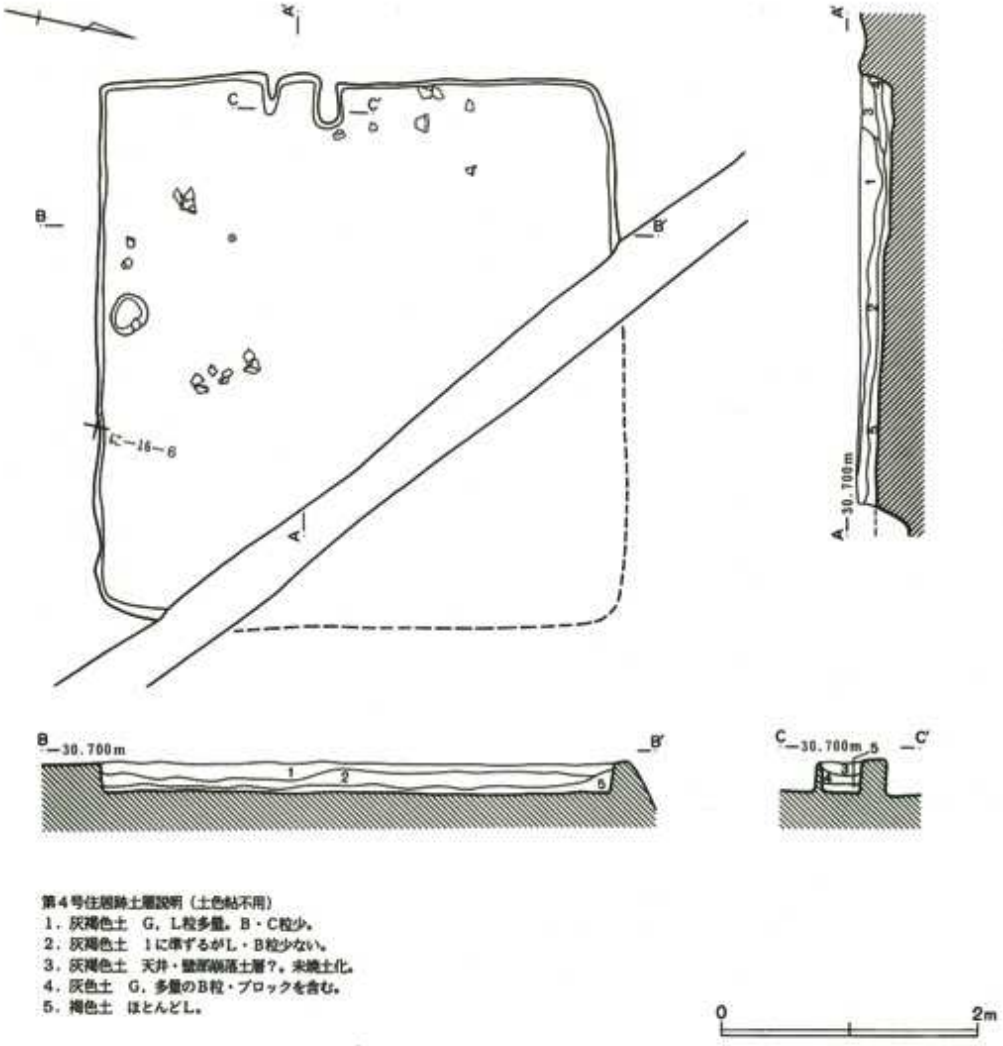
貯蔵穴は南東隅部、やや内側に寄って備えられる。平面は61cm×69cmの楕円形を呈し、床面からの深さは約50cmを測る。断面形は漏斗状で、底面は平坦である。遺物は肩部から覆土上位にかけて多く出土している。

柱穴は住居跡の対角線上に4本が検出された。直径は30cm前後で、深さは20cm程度である。覆土は激しい出水のため、充分な観察を行なえなかった。ただし、柱痕らしき土層はいずれの柱穴にも認められなかった。

カマドと貯蔵穴以外からの遺物出土は少なく、柱穴の近くに破片が散在するのみである。



第101図　第3号住居跡出土遺物(4)



第4号住居跡土層説明（土色帖不用）
1．灰褐色土　G，L粒多量。B・C粒少。
2．灰褐色土　1に準ずるがL・B粒少ない。
3．灰褐色土　天井・壁部崩落土層？。未焼土化。
4．灰色土　G，多量のB粒・ブロックを含む。
5．褐色土　ほとんどL。

第102図　第4号住居跡

第4号住居跡出土遺物（第103図）

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	18.6 ×(12.6)× —	口縁〜胴上半部	W′多+R+B′	にぶい褐	
2	椀	(13.6)× 6.8 ×(4.4)	40%	W′+R+B′	明赤褐	
3	〃	(13.6)×(4.7)× —	25%	W+W′+R	橙	

第4号住居跡（第102図）

に−16−6グリッドを中心に位置する。北東部分は調査区外に出ているため、全体の3/4ほどの調査にとどまった。およそ平面は方形を呈し、各隅部がなす角度は鋭い。軸長4.05m×4.2m、推定面積17m²の規模を有し、主軸方向はおよそN−104°−Wを指す。

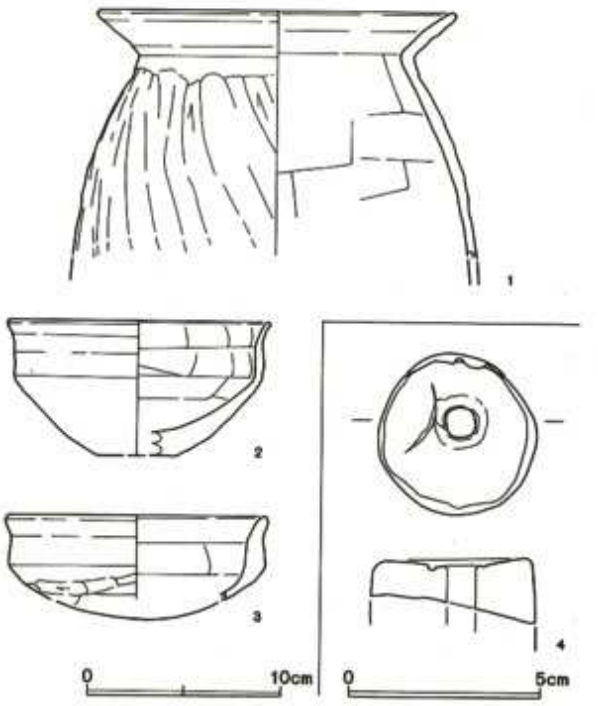
覆土の主体は地山の下層土（灰色）で、本跡の場合も覆土5と床面の境界は不明確である。遺構確

認面から床面までの深さは約25cmを測り、壁の立ち上がりは急である。床面は緩い凹凸があり、東から西へわずかに傾斜している。

カマドは西壁の南寄りに設けられている。袖は造り付けで、砂田・柳町遺跡を通じても希な例である。削り出されたものに比して流失が顕著で、確認できた分はわずかである。両袖とも地山(上層)の粘質土を用いているが、かなり軟化して脆くなっている。火床面は袖の先端部よりも内側にあり、袖もここまで延びていたものと思われる。

調査できた範囲では、貯蔵穴や柱穴、壁溝は検出されなかった。貯蔵穴の備わる住居であるとすれば、その位置は調査区外の北東隅部であろう。

遺物はすべて破片で、少量が床面上に散在していたにすぎない。



第103図　第4号住居跡出土遺物

第5号住居跡(第104～106図)

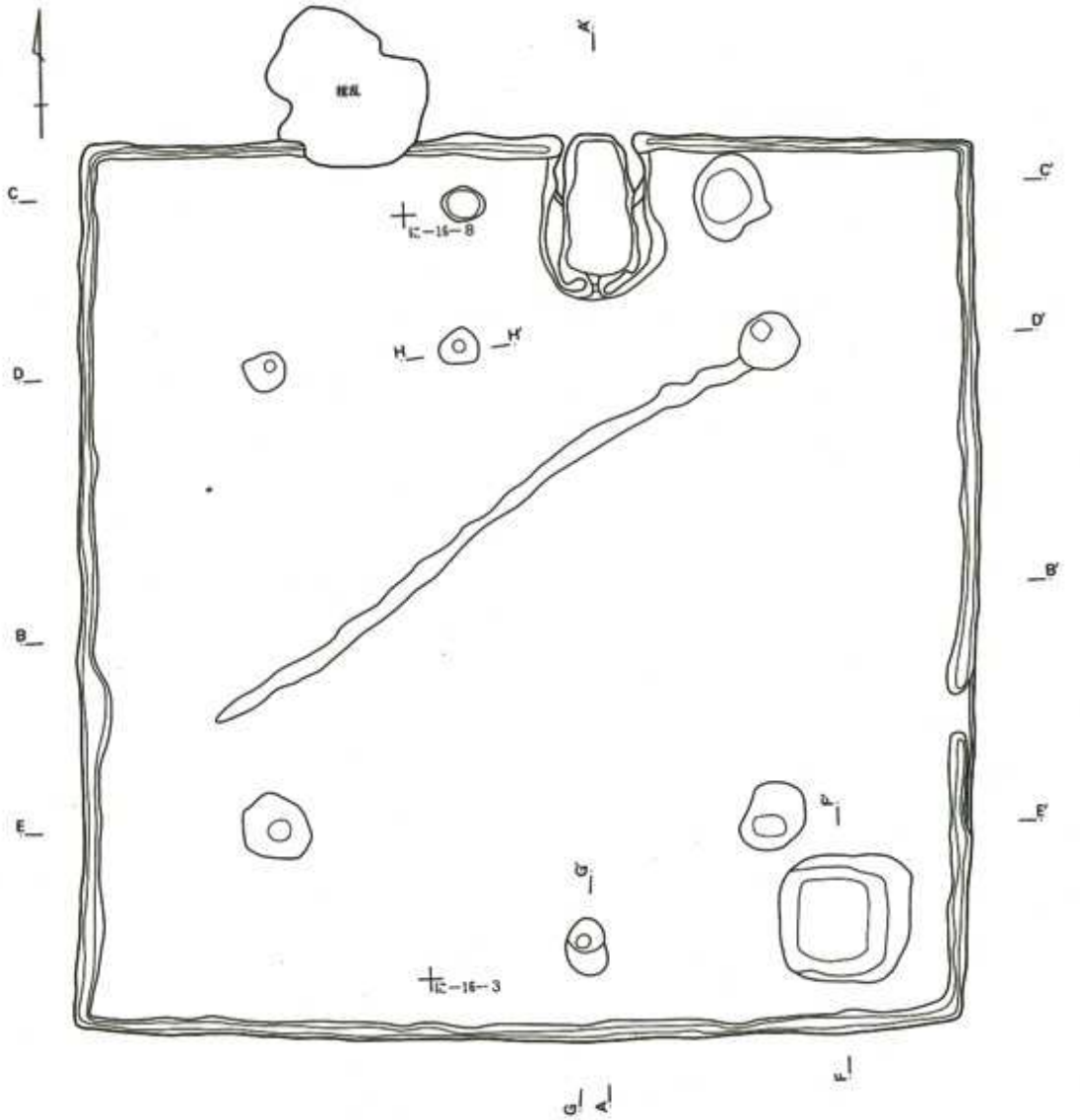
に—16—2グリッドを中心に位置する。北壁の一部を攪乱坑に切断されながらも、平面はきれいな正方形を呈する。文字どおり各辺は同じ長さの直線で、各隅部は直角となっている。両軸長はともに7.1m、面積は約50.4㎡を測る。主軸方向はおよそN－2°－Eを指す。

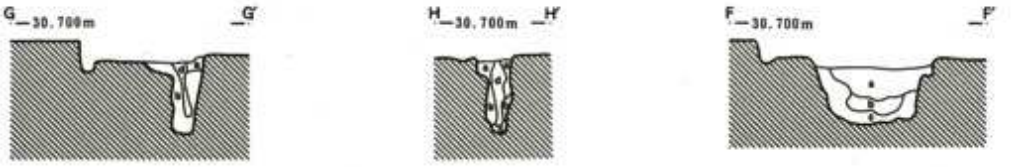
覆土にはやや乱れた層序が見られるが、自然堆積の範疇で捉えられるものであり、故意に埋め戻されたような状況は窺えない。床面の検出は第1～3号住居跡よりも容易で、覆土に比して硬度はかなり高い。遺構確認面からの深さは15cm～20cmと一定せず、凹凸がやや強い。傾向としては、中央部から四壁に向かっての微傾斜を指摘できよう。このほか、地震による亀裂が床面を斜めに走っている。

直立する壁には壁溝が伴う。カマド部分と東壁のごく一部がとぎれるものの、幅約10cm、深さ5cm前後でほぼ全周する。

カマドは北壁中央からわずかに東に寄っている。燃焼部は壁と袖によって画されているため、独立感が強いものとなっている。全体は南北1.3m、東西0.9mほどの楕円状で、壁に移行する部分は強くくびれている。壁から削り出された袖は、中程で段をもって低くなり、南半部は突堤状となって巡っている。平坦な火床面には厚く灰が堆積し、袖の内面は著しく赤焼している。

燃焼部中央には、支脚として高坏(10)が逆位に据えられ、炊き口部には甕(12)が伏せ置かれている。支脚の右側からは甕の下半部(4)が出土しているが、これも火床面に置かれたものと思われる。



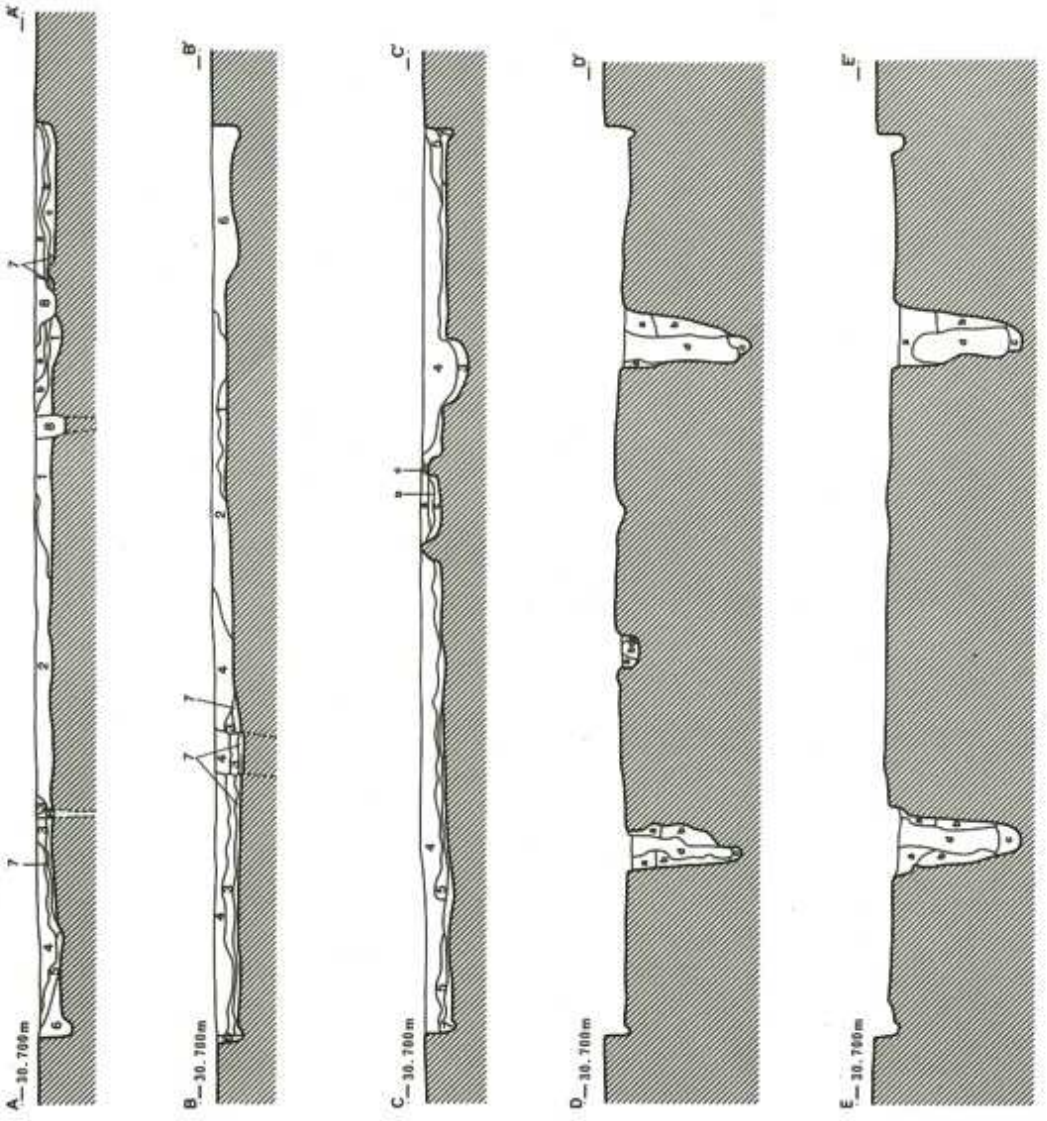


第5号住居跡柱穴土層説明
a. 10YR3/4 暗褐色土 ほとんど地山L。B・C粒微。充填土。
b. 10YR3/4 暗褐色土 ほとんど地山L。充填土。
c. 10YR3/2 黒褐色土 粘土のブロック。根固め。
d. 10YR3/3 暗褐色土 しまりなくボソボソ。柱痕。

第5号住居跡貯蔵穴土層説明
a. 10YR3/4 暗褐色土 Lブロックからなる。B・C粒多。
b. 10YR3/4 暗褐色土 ほとんど地山L。
c. 10YR3/4 暗褐色土 5が基本。B・C粒多量。

0 2m

第104図 第5号住居跡(1)



第５号住居跡土層説明

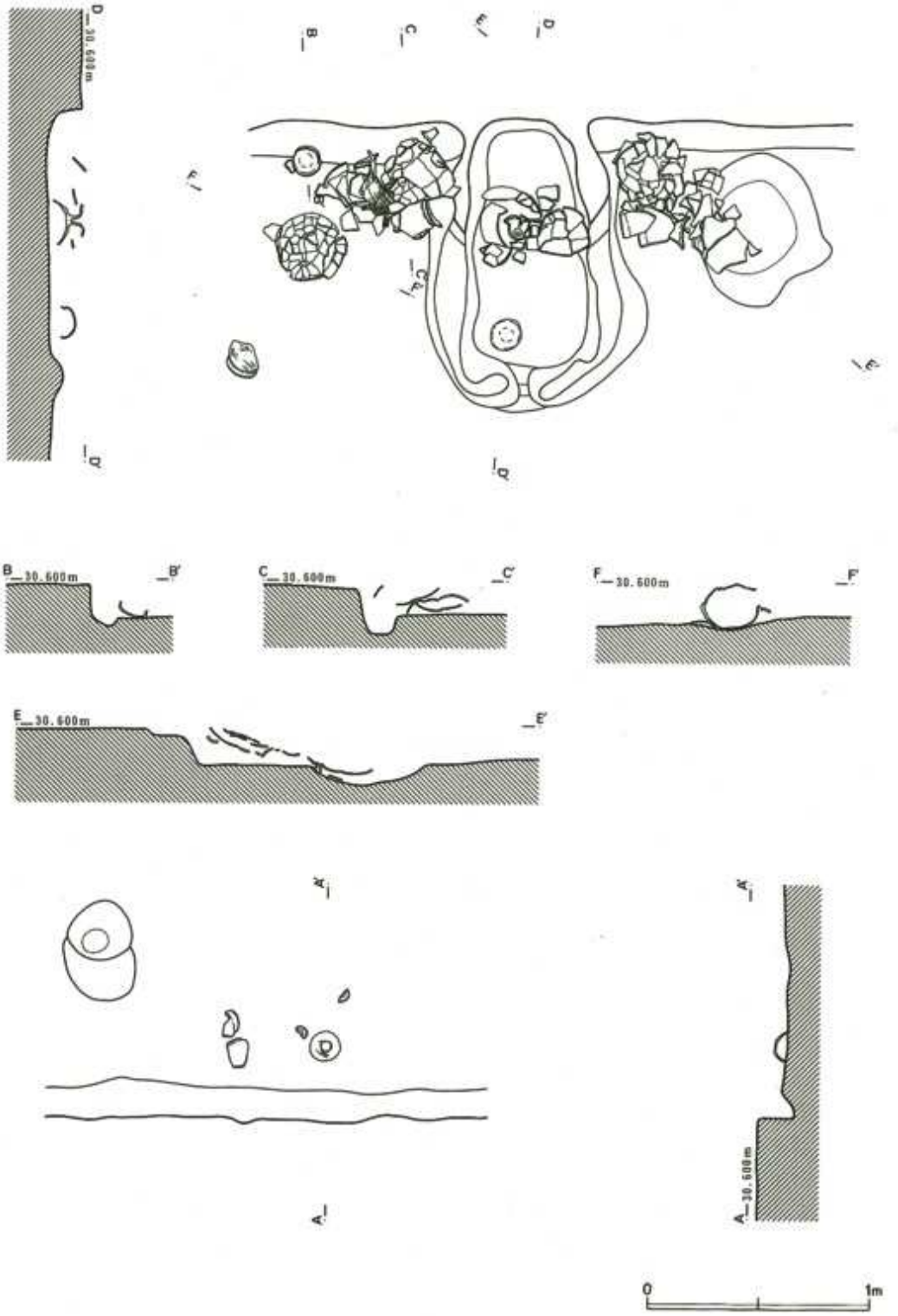
1．10YR3/4　暗褐色土　主にLからなる。しまり強い。
2．10YR3/3　暗褐色土　L・C粒多。B粒少。
3．10YR3/3　暗褐色土　２と５の中間的土層。L・C粒多。
4．10YR3/4　暗褐色土　L粒・小型ブロック多。B・C粒微。
5．10YR3/4　暗褐色土　３より色調暗い。B・C粒多量。
6．10YR3/4　暗褐色土　１に近似。しまり強く地山化。
7．10YR4/4　褐色土　ほとんどL。床の部軟化層？。
8．10YR3/3　暗褐色土　地震の地割れ（噴砂のものは別と思われる）。

第５号住居跡カマド土層説明

a．10YR3/4　暗褐色土　４に近似。B粒・ブロック多。
b．10YR3/4　暗褐色土　３ないし５に相当。多量のB粒・ブロックを含む。
c．10YR3/1　黒褐色土　Bブロック・C粒・骨片を多く含む。灰層。

0　2m

第105図　第５号住居跡(2)



第106図　第５号住居跡カマド・南壁遺物出土状態

なお、甕の上半部は削平のために欠失している。また、両袖のくびれ部からは壺・甕・甑・坏がまとまって出土している。袖の左側のものはすべて床面上で押し潰されており、住居使用時の原位置を保っていると判断される。これに対し、右側のものは先端が床面に接してはいるものの、壁際ではかなり浮いており、壁方向から流れ込んだ遺物と捉えられる。

貯蔵穴は南東隅部に設けられている。平面は85cm四方の方形で、西辺以外の肩部はやや広がっている。断面は箱形を呈し、底面は概ね平坦といえる。床からの深さは63cmほどを測り、遺物の出土はない。カマドの両側には柱穴、ないしは土坑状の掘り込みがあるが、ともに皿状の浅い窪みで、貯蔵穴や柱穴とは異なるものである。右側の掘り込みは第6・7号住居跡にも見られることから、カマドに付随する施設とすることが可能かもしれない。

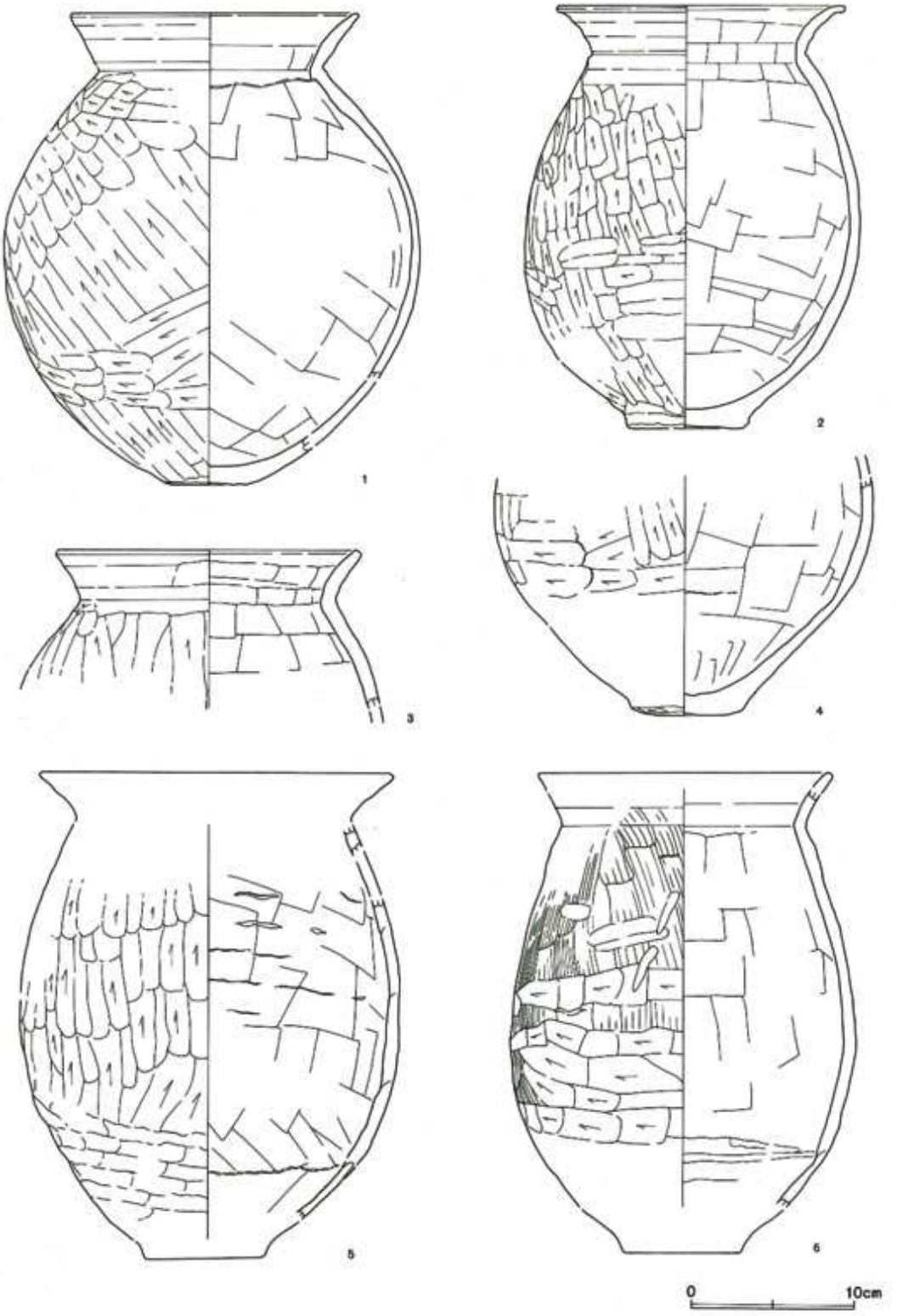
柱穴は住居の対角線上に4本、その北側2穴間に1本、カマドの対位置に1本検出されている。対角線上の4本は主柱穴で、床から1mの深さまで掘り込まれている。いずれも明瞭な柱痕を有し、底部には根固めに粘土ブロックを用いている。柱痕から想定される柱の太さは、最大で直径20cmに達する。北側2穴間の柱穴にも柱痕は見られるものの、深さは約60cmと浅い。カマド対位置(カマド中心線の延長上)の柱穴は深さは約60cmで、やや斜めに穿たれている。壁側の肩部は大きくえぐれ、柱痕の傾きと一致している。おそらくは梯子の類が差し込まれていたもので、入口に関する施設と考えられる。

遺物はカマド周辺のほか、南壁際の床上から坏(15・16)、半分に割れた石製紡錘車が一括して出土している。特徴的な遺物として、覆土中より出土した大型の土錘？(18～25)が挙げられる。

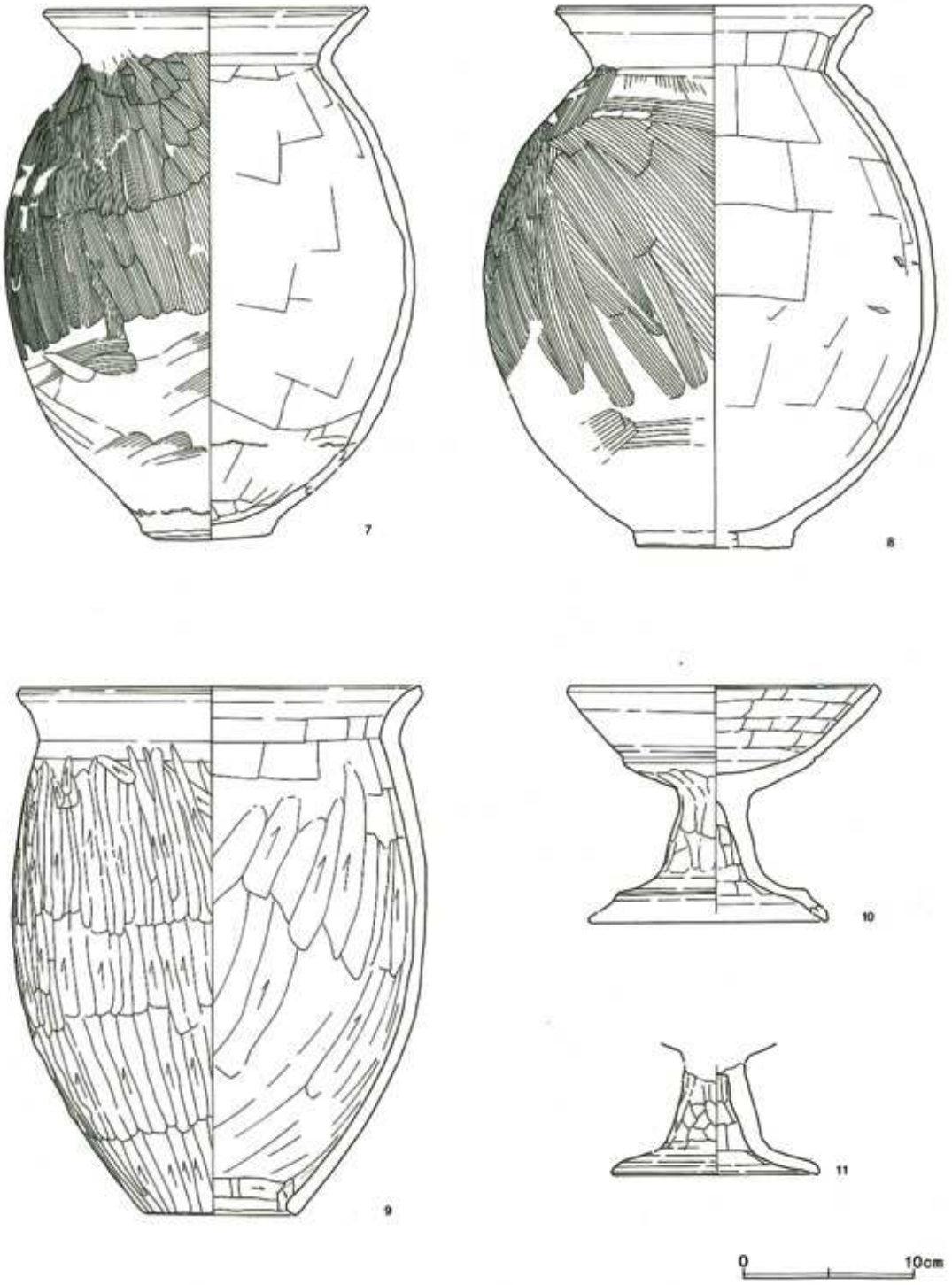
石製紡錘車(第109図26)は上面径4.5cm、下面径2.5cm、厚さ1.7cm、孔径0.7cm、重さ40.2gを測る。石灰岩製で、側面には金属器によると思われる削痕が細かく残る。

第5号住居跡出土遺物(第107・108・109図)

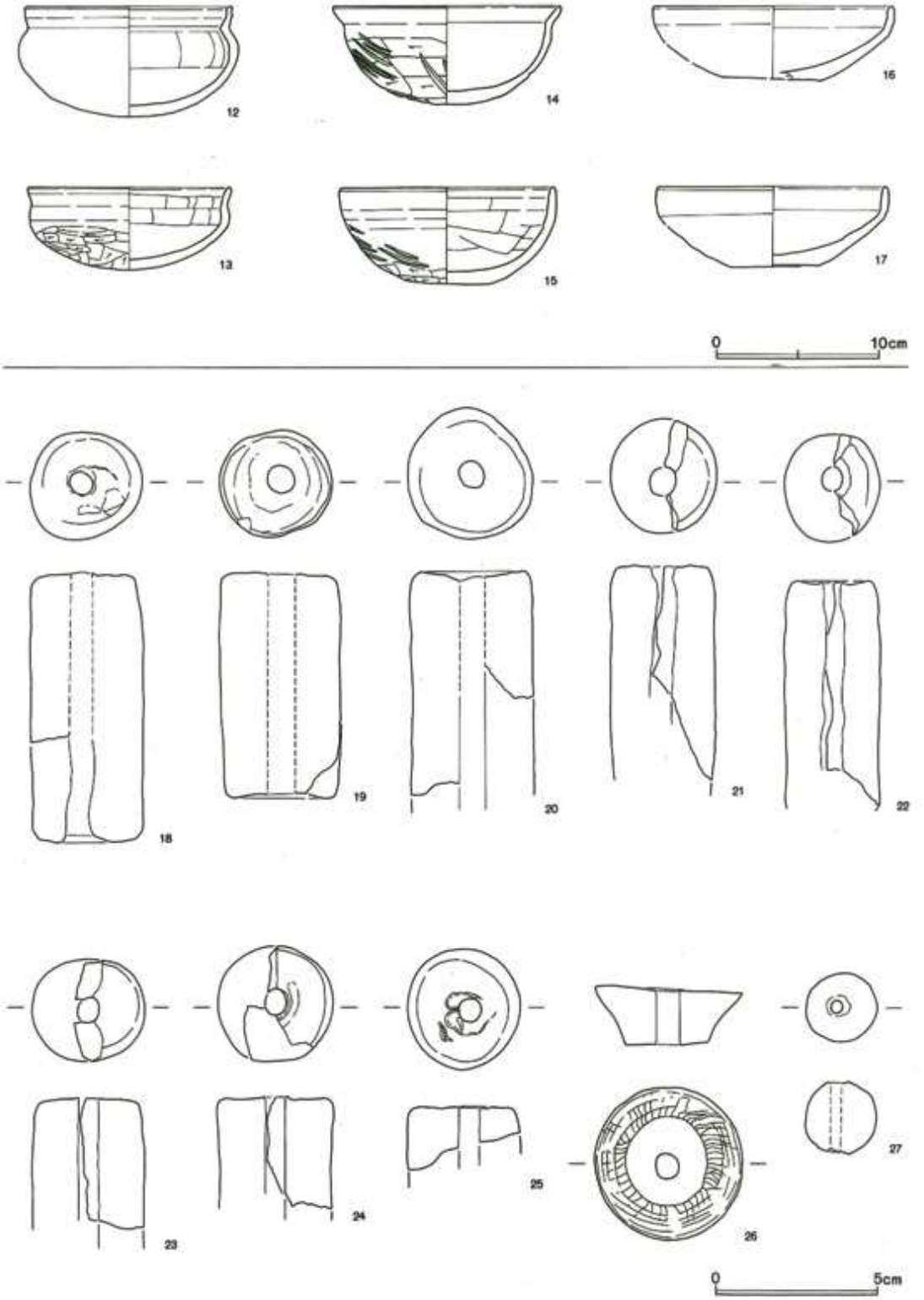
No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	壺	17.6 × 28.7 × 5.0	70%	礫W′多+片岩	橙	磨耗著しい
2	甕	17.6 × 25.8 × 6.6	70%	W+W′+R+B′	にぶい橙	
3	〃	18.4 ×(10.0)× —	口縁～肩部	W′+R+B′多	にぶい黄橙	
4	〃	— ×(14.6)× 7.0	下半部	W′多+B′	〃	
5	〃	— × 25.2 × —	口縁・底部を欠く	W′+B′	にぶい橙	
6	〃	— ×(25.3)× —	40%	W′+B′+片岩礫	〃	
7	〃	18.4 ×(30.9)×(8.4)	80%	W+W′+B′	〃	
8	〃	(19.0)× 31.4 × 7.4	80%	W′+R+B′多	にぶい黄橙	
9	甑	23.1 × 30.7 ×孔7.7	95%	W+W′+R	橙	
10	高坏	18.2 ×(13.9)× —	90%	W少+W′+B′	〃	
11	〃	— ×(6.5)×裾(11.6)	脚部50%	W′+R+B′	明赤褐	
12	瓶	12.6 × 6.7 × —	90%	W+W′+R	〃	
13	〃	12.6 × 5.2 × —	完形	W+W′+B′	橙	
14	〃	14.0 × 6.1 × —	70%	W+W′+B′	〃	ヘラ状工具による切痕
15	坏	13.2 × 5.9 × 4.6	ほぼ完形	W+W′+R+B′	〃	ヘラ状工具による切痕(深)
16	〃	14.1 × 5.0 × 5.3	75%	W+W′+粗R	明赤褐	
17	〃	15.0 × 4.5 × 6.0	60%	W+W′+R	橙	



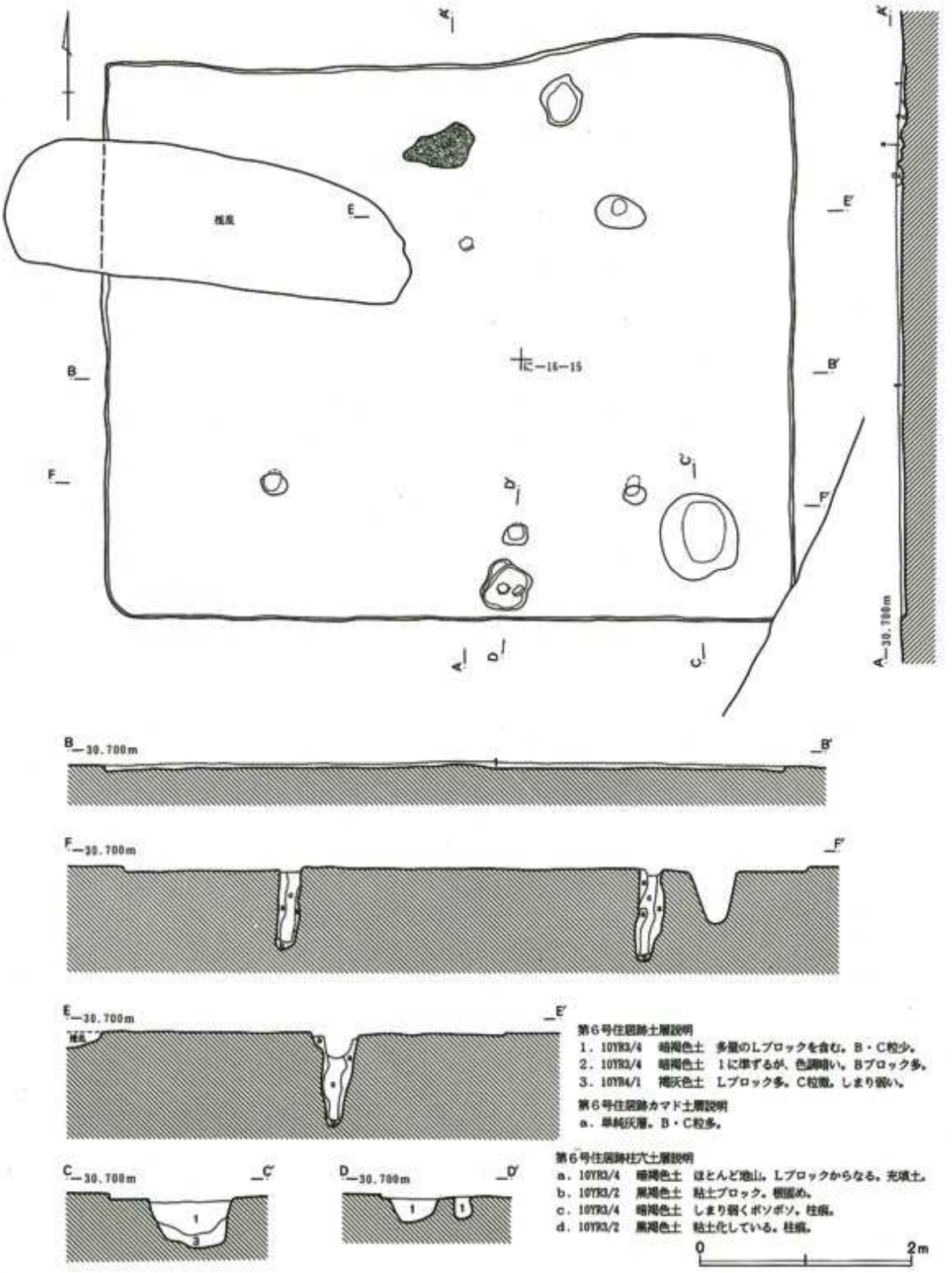
第107図　第５号住居跡出土遺物(1)



第108図　第５号住居跡出土遺物(2)



第109図　第５号住居跡出土遺物(3)



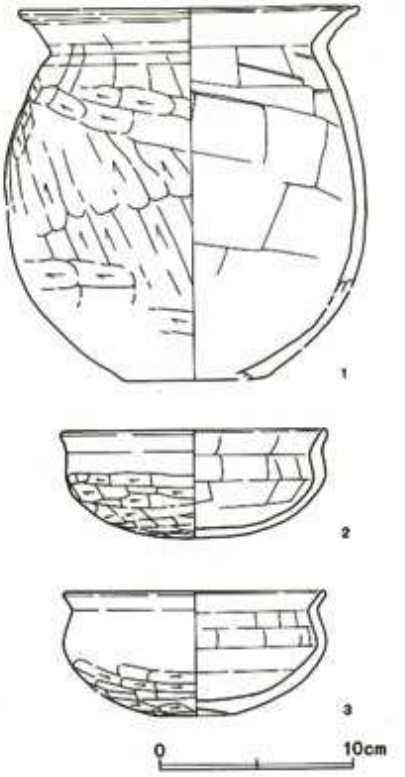
第110図　第6号住居跡

第6号住居跡(第110図)

第5号住居跡の北西約10m、に—16—15グリッドを中心に位置する。全体に削平が及ぶほか、南東隅部を第3号溝に、北西部を攪乱坑にそれぞれ切られる。北壁のラインがやや乱れているものの、平面はおおよそ長方形を呈している。規模は軸長5.2m×6.45m、面積33.5m²を測る。主軸方向はほぼN—1°—Wである。

残存する覆土はほぼ単一で、削平後の機械耕作により硬くしまっている。厚さは5cm以下で、床土との同質化が進んでいる。床面は他の住居跡に比べるとやや軟質で、中央部がわずかに高くなっている。

カマドは北壁の中央部に備わるが、袖部分は完全に削平されている。このため全体の形状などは明らかとし得ず、赤く焼けた火床面の範囲を確認したにすぎない。ただし、土層断面(A—A′)で観察された高まりを焚き口部の突堤と考えれば、第5・7号住居跡と同様のカマドであった可能性は高い。やはりカマドの右脇には径40cm、深さ7cmばかりの小穴が穿たれている。



第111図　第6号住居跡出土遺物

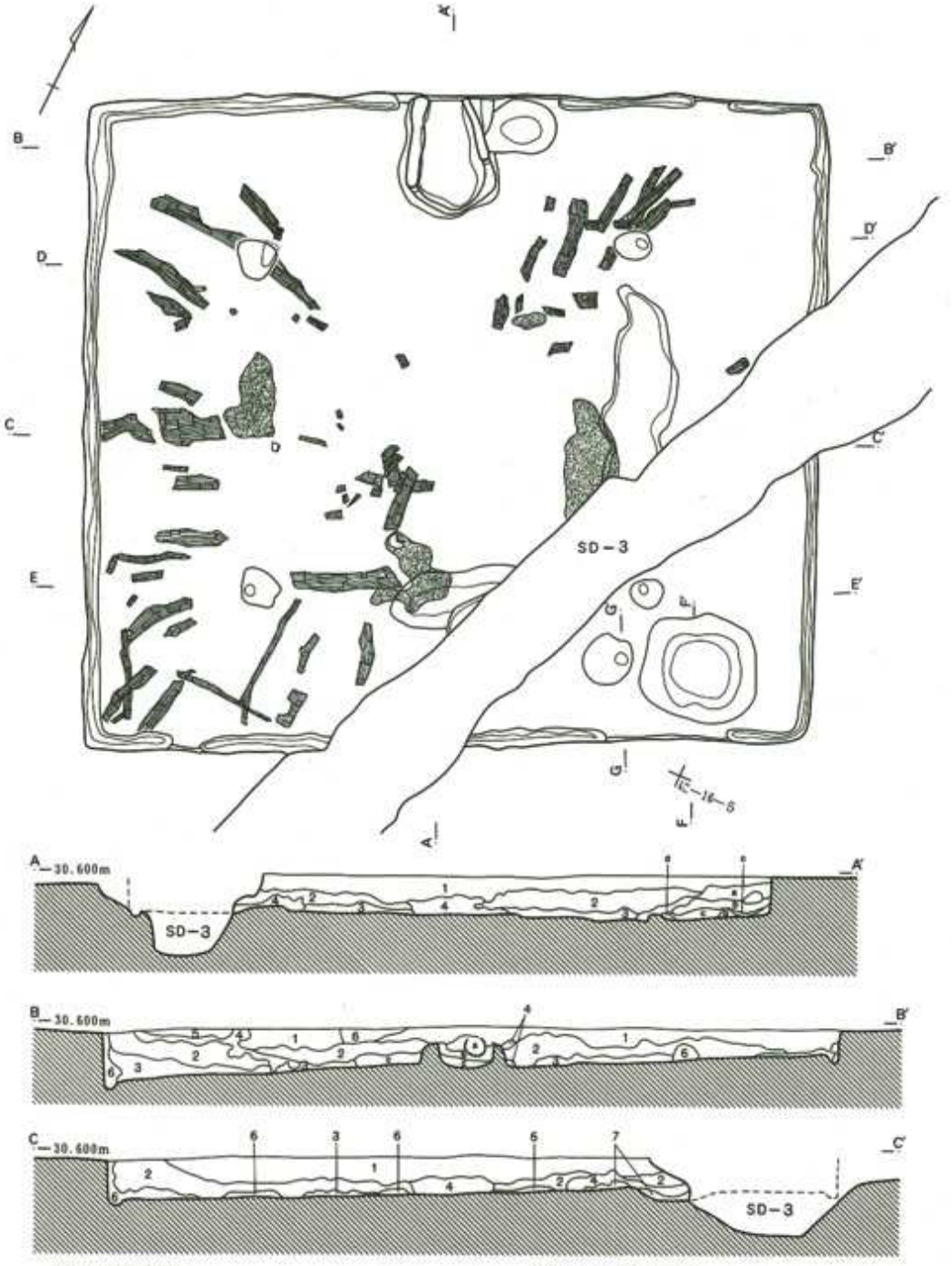
貯蔵穴は住居跡の南東隅部に設けられている。平面は径80cm×70cmほどの楕円形で、床面からの深さは43cmを測る。断面は逆台形に近く、底面は概ね平坦である。

柱穴は住居跡の対角線上に3本検出された。対角線上にはもう1本存在していたものと思われるが、予想される柱穴底面よりも攪乱坑が深いため、その形跡はまったく確認できなかった。3本の柱穴の深さは、南西のものが約75cm、他が約85cmである。いずれも底部に根固めとして粘土が詰められ、柱のまわりには地山の粘質土が充填されている。柱痕はしまりがなく、ボソボソとなっている。このほか、南壁際に並列する二つの小穴が検出されている。覆土に柱痕などの特徴はなく、ともに20cmほどの浅い掘り込みである。第5・7号住居跡とは規模も異なるが、位置的に見れば入口にかかわる施設としてもよさそうである。南側の穴からは、半分に割れた甕(2)が出土している。

上記以外には遺物の出土がほとんどなく、カマド南側の床面上より甕(3)、覆土中より甕破片がが見いだされたのみである。

第6号住居跡出土遺物(第111図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	(17.4)×(19.1)×(7.0)	40%	W′+R+B′	にぶい橙	
2	甕	13.9 × 5.6× —	80%	W′+R+B′	橙	
3	〃	(15.2)× 5.9 × 3.8	70%	W′+R+B′	明赤褐	



第７号住居跡土層説明
1．10YR2/3　黒褐色土　L粒多量。B・C粒多。
2．10YR4/4　褐色土　ほとんどLからなる。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　基本は2。色調暗く粘性強い。
4．10YR3/2　黒褐色土　多量のB粒・ブロック、C粒を含む。
5．10YR3/2　黒褐色土　4に準ずるがBを含まない。
6．10YR3/4　暗褐色土　大型Cを良く含む。屋根材の腐食部か。
7．10YR5/4　にぶい黄褐色土　ほとんど地山L。床の溶軟化層。

第７号住居跡カマド土層説明
a．10YR3/3　暗褐色土　B粒・ブロック、C粒多。
b．2.5YR4/8　赤褐色土　Bブロックからなる。天井部崩落土層。
c．10YR4/1　褐灰色土　骨片多量。純粋な灰層。
d．10YR3/4　暗褐色土　Bブロック・C粒を含む。

第112図　第７号住居跡(1)

第７号住居跡(第112～114図)

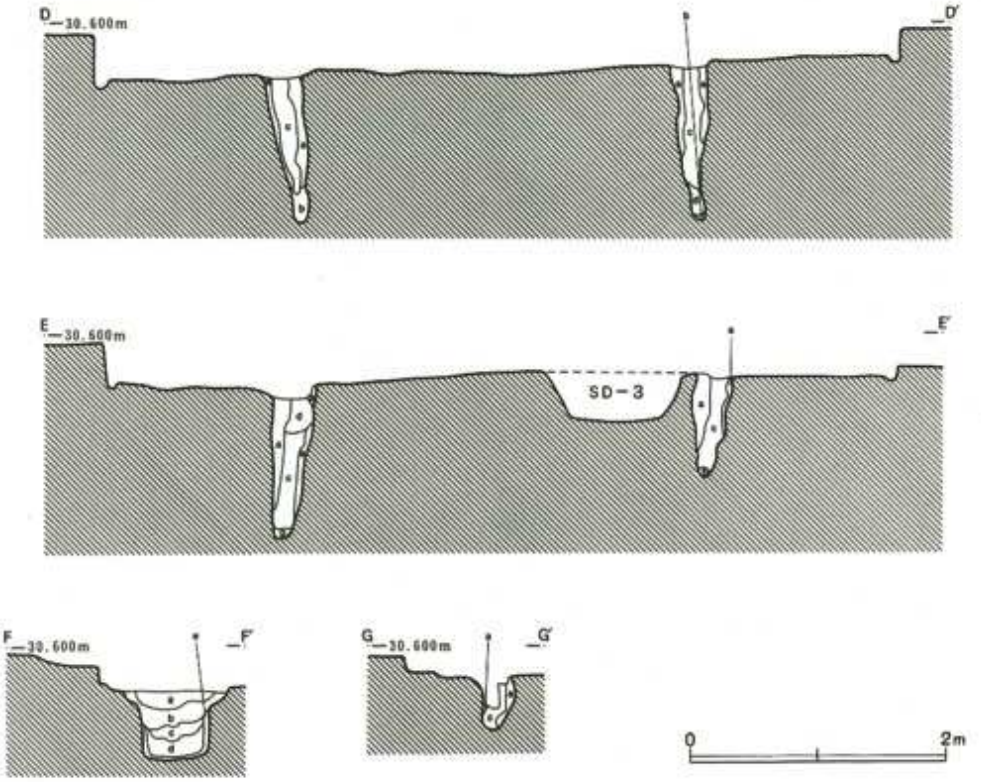
に―16―5グリッドを中心に位置する。第５号住居跡および第６号住居跡との間隔は、それぞれ約９ｍと約４ｍとなっている。南東隅部を第３号溝によって分断されるとはいえ、全体はきれいな長方形を呈する。各辺は直線的で、隅部は直角をなす。軸長5.45ｍ×6.25ｍ、面積約34.1㎡を測り、主軸方向はおよそＮ―24°―Ｗを指す。

覆土は自然堆積を示し、床面直上には炭化材や焼土を多く含む層が乗っている。炭化材は棒状の木材で、中央部から各壁へ放射状に検出されている。他にカヤ状の繊維束も認められる。このことから本住居跡は焼失家屋であり、棒状の木材は垂木が焼け落ちたものと判断される。

床面は硬くしまっており、覆土との境界は明瞭である。東から西へかなり傾斜しており、部分的に赤く焼けている。確認面からは東壁部で約20cm、西壁部で約38cmの深さとなっている。

壁はほぼ垂直で、炭化物が多く密着している。壁溝は幅10cm、床面からの深さ３cmほどで、３箇所で切れている。

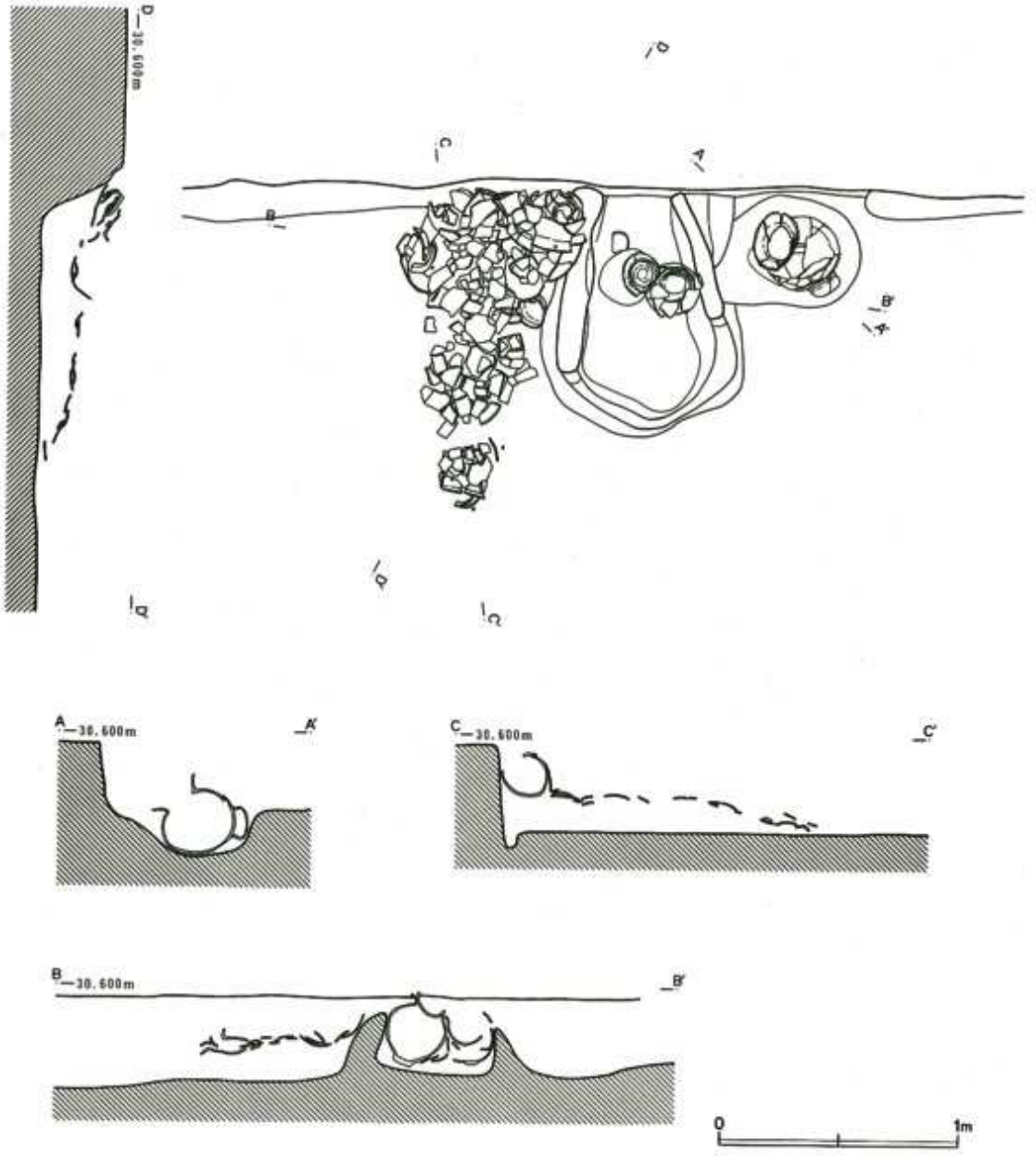
カマドは北壁中央に設けられる。平面的には鶏卵形を呈し、壁に取り付く部分は強くくびれてい



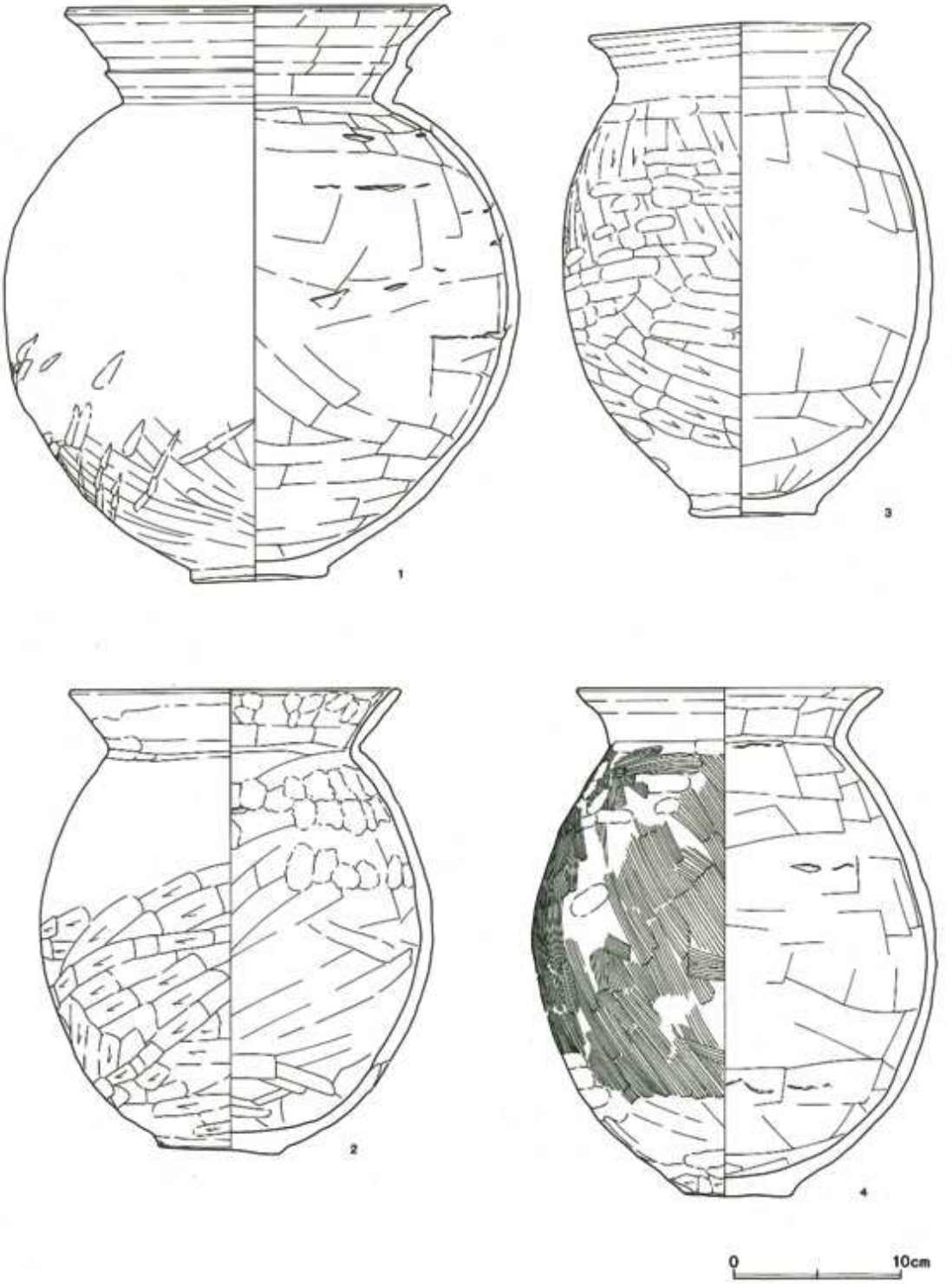
第７号住居跡貯蔵穴土層説明
a．10YR3/4　暗褐色土　ほとんど地山し。
b．10YR3/3　暗褐色土　C粒多。B粒少。
c．10YR3/3　暗褐色土　基本はa。色調暗く、粘性強い。
d．10YR4/3　にぶい黄褐色土　わずかにLブロックを含む。
e．10YR4/6　褐色土　ほとんど地山し。壁・底の溶軟化層。

第113図　第７号住居跡(2)

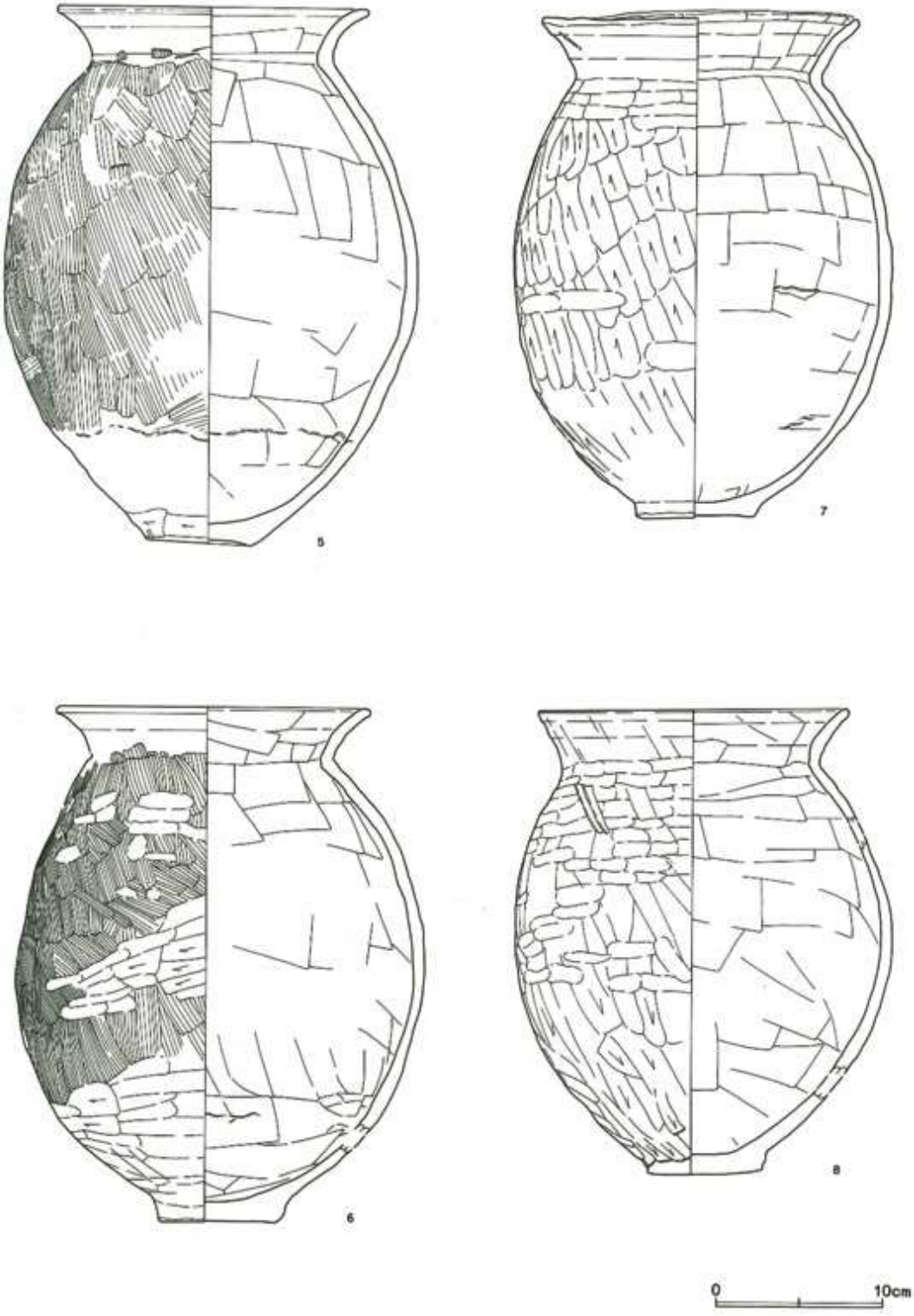
る。現状での袖は壁の途中から削り出されており、焚き口に向かうに従い低くなる。焚き口部では一段低くなり、突堤状に燃焼部と床を区分している。カマドの横断面は「ハ」字状を呈し、燃焼面は強く内傾している。火床面はほぼ平坦で、骨片を含む灰が厚く堆積している。この灰は左袖の脇にも層をなしており、上面を多量の土器が覆っている。カマド内から掻き出されたものであろうか。土器はいずれも破片となっており、壁方向から落ち込んだ様子が窺える。対象的に、燃焼部中央と右袖の脇からは、カマド使用時の位置を保つと考えられる遺物の出土がある。まず、燃焼部では火床面に倒立させた坩(12)が置かれ、これに甕(3)が乗せられる。さらに、甕と右袖の間にも甕(8)



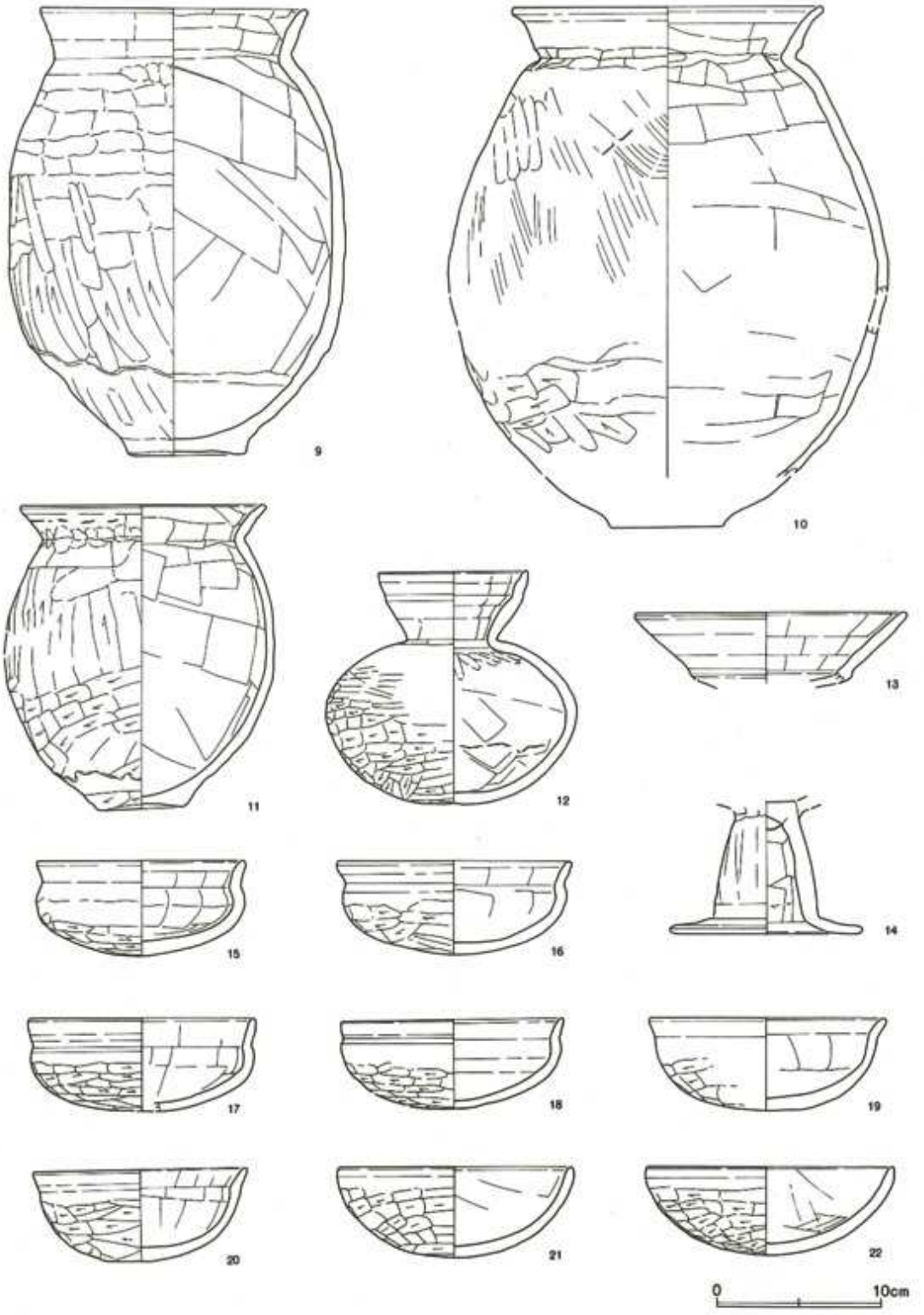
第114図　第7号住居跡カマド



第115図　第７号住居跡出土遺物(1)



第116図　第７号住居跡出土遺物(2)

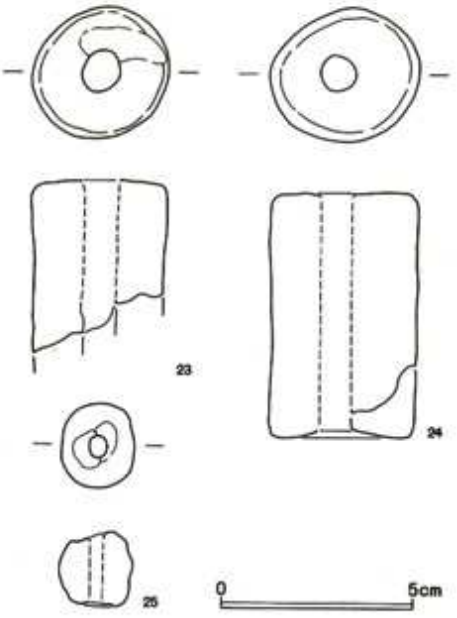


第117図　第７号住居跡出土遺物(3)

が嵌め込まれ、横一列に固定される。そして、二つの甕にはそれぞれ坏の蓋がかぶせられる(左21、右22)。右袖の脇には径55cm×45cm、深さ15cmを測る浅い皿状の穴が掘り込まれ、この底面に壺(1)が斜位に据えられる。壺の脇には椀(15)が挟まれているが、なにやら壺の向きを調節しているかのようである。煙道は検出されなかった。

貯蔵穴は南東隅部にあり、平面は不整の長方形を呈する。上面で100cm×95cm、底面で50cm×45cmの規模を有する。床面からの深さは約58cmで、断面は箱形となる。底面はほぼ平坦である。

柱穴は住居跡の対角線上に4本、貯蔵穴の西側に1本が検出されている。確認時、4本主柱穴部分はわずかに窪んでおり、柱痕部以外は表面焼けていた。南西のものが約80cmと浅いほかは、いずれの柱穴も120cmほ



第118図　第7号住居跡出土遺物(4)

第7号住居跡出土遺物(第115・116・117図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	22.8～23.4 × 34.0 × 8.0	完形	W+W′+B′	明赤褐	
2	甕	19.6 × 27.4 × 7.0	〃	W+W′+R+B′	橙	
3	〃	16.8 × 29.3 × 7.1	ほぼ完形	W′+R+B′	にぶい橙	
4	〃	18.0 × 30.1 × 6.4	〃	W+W′+B′+片岩	〃	
5	〃	18.6～19.6 × 31.8 × 6.2	90%	W+W′+B′	橙	
6	〃	18.6～19.6 × (30.5) × 7.5	95%	W′+B′	〃	
7	〃	19.0 × 29.5 × 7.1	80%	W+W′+R	〃	
8	〃	17.4～18.4 × (27.5) × —	95%	W+W′+B′少	にぶい黄橙	
9	〃	16.6 × 27.0 × 7.1	90%	W+W′+B′	にぶい橙	
10	〃	19.0 × 28.3 × —	60%	W+W′+B′+片岩	にぶい黄橙	
11	小型甕	14.8 × 18.3 × 5.1	ほぼ完形	W′+礫W′+R+B′+片岩	にぶい橙	
12	坩	9.0 × 13.9 × —	90%	W+W′+B′	明赤褐	
13	高坏	(16.6) × (4.2) × —	坏部片	W+W′	にぶい橙	No.14と同一個体か
14	〃	— × (8.1) × 裾(11.6)	脚部60%	W′+R+B′	明赤褐	
15	椀	12.6 × 5.7 × —	95%	W+W′+B′	〃	
16	〃	14.2 × 5.6 × —	ほぼ完形	W+R+B′	橙	
17	〃	14.0 × (5.6) × —	80%	W′+R+B′	明赤褐	口縁、内面～外面煤け
18	〃	13.6 × 5.3 × —	45%	W+W′+R+B′	橙	
19	〃	(14.4) × 5.6 × —	50%	W+R+B′	〃	
20	〃	13.0 × 5.6 × —	75%	W+W′+R+B′	〃	
21	坏	14.4 × 5.5 × —	95%	W+W′+粗R+B′	〃	甕の蓋
22	〃	14.8 × 5.5 × —	ほぼ完形	W′+R+B′	〃	〃

どの深さがある。底部にはすべて根固めの粘土が詰められ、柱と掘り方の空隙には地山の粘質土が充填されている。柱痕は最も深く観察されたもので、床面より110cmの長さを測る。貯蔵穴脇のものは深さ約45cmで、これも柱痕が明瞭に残る。第５号住居跡と同様、その位置や形状から見て、出入口に伴う柱穴であると考えられる。

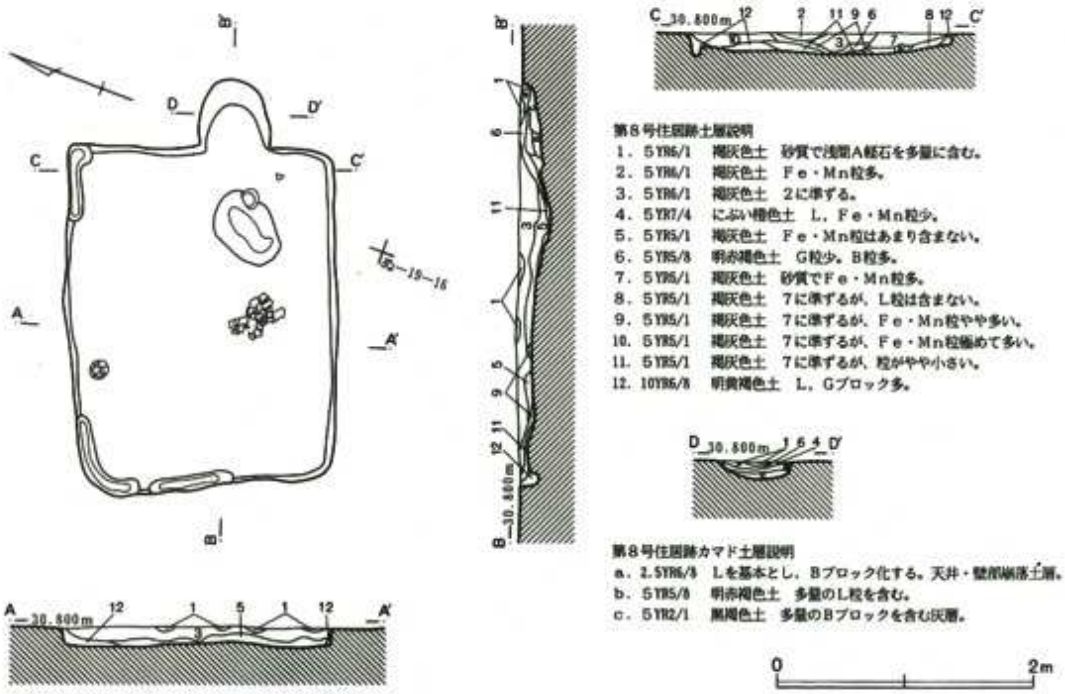
遺物はカマド周辺にまとまり、他は覆土中に破片が散在するのみであった。焼失住居という点を考慮すれば、一括出土遺物として重要である。なお、図示した遺物のうち、覆土中からの出土は19・20の甕、23・24の土錘、25の土玉の５点である。

第８号住居跡(第119図)

ぬ—19—16グリッドを中心に位置する。本跡のみが調査区中央部よりの検出である。周囲には削平された住居跡が存在するのではないかと思われたため、慎重に確認作業を実施したが、なんらの痕跡も見いだせなかった。集落としては、西側の調査区外へ展開しているのであろうか。第８号住居跡の平面は長方形で、やや南辺が短い。主軸長2.65m、直交軸長2.1m、面積約5.5m²を測る小型の住居跡である。主軸方向はおよそN—70°—Eを指す。

覆土は自然堆積であるが、耕作土の影響で鉄分やマンガンを多量に含んでいる。遺構確認面から床面までは15cmほどで、壁の立ち上がりは急である。床面は柔らかく、中央部がわずかに低くなっている。壁溝は北壁と西壁の一部に存在する。深さは５cm以下である。柱穴や貯蔵穴は検出されなかった。

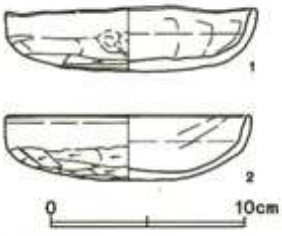
カマドは東壁の南寄りに営まれ、燃焼部が半円状に壁外へ突出している。袖の存在は土層の断面



第119図　第８号住居跡

観察(C－C′)でも確認できなかった。火床面および燃焼部壁面の焼土化は弱いものの、灰層と焼土ブロック層の形成は顕著である。焚き口にあたると思われる部分には、楕円形の浅い落ち込みが見られる。土層観察(A－A′)では、住居の重複(縮小)に伴う新しいカマドの燃焼部かとも考えられたが、焼土や火床面はまったく認められなかった。足場的な窪みなのであろうか。

遺物は北壁際より坏(1)、足場状の窪み部分から坏(2)と甕の胴部破片が出土している。いずれも床面直上にあり、坏はともにほぼ完形である。



第120図
第8号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土遺物(第120図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	坏	12.8 × 3.4 × －	完形	W′＋B′	橙	全体に歪みが強い
2	〃	12.8 × 3.5 × －	90%	W′＋B′	〃	

第10表　砂田遺跡出土土玉・土錘一覧

遺構	図版No.	タテ(cm)	ヨコ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	色　調
土玉						
SJ-5	第109図27	2.4	2.1	0.3	8.61	にぶい褐
SJ-7	第118図25	1.9	2.0	0.4	6.84	明赤褐
土錘						
SJ-3	第101図32	8.1	3.5	0.9	118.50	灰黄褐
〃	第101図33	4.0	3.6	0.7	(36.99)	にぶい黄橙
SJ-4	第103図4	1.8	4.1	0.7	(21.88)	〃
SJ-5	第109図18	8.1	3.3	0.6	(89.03)	〃
〃	第109図19	6.8	3.2	0.9	112.24	〃
SJ-5	第109図20	7.0	4.0	0.8	(69.99)	にぶい黄橙
〃	第109図21	2.2	3.2	0.7	(13.69)	〃
〃	第109図22	1.8	3.2	0.7	(22.03)	〃
〃	第109図23	3.9	3.5	0.7	(32.38)	〃
〃	第109図24	3.8	3.6	0.7	29.15	灰黄褐
〃	第109図25	6.5	3.2	0.9	(32.08)	にぶい黄橙
SJ-7	第118図23	4.6	3.5	1.0	(56.82)	黒褐
〃	第118図24	6.5	3.5	0.9	99.86	にぶい黄橙

第5号住居跡
調査風景

(2) 掘立柱建物跡

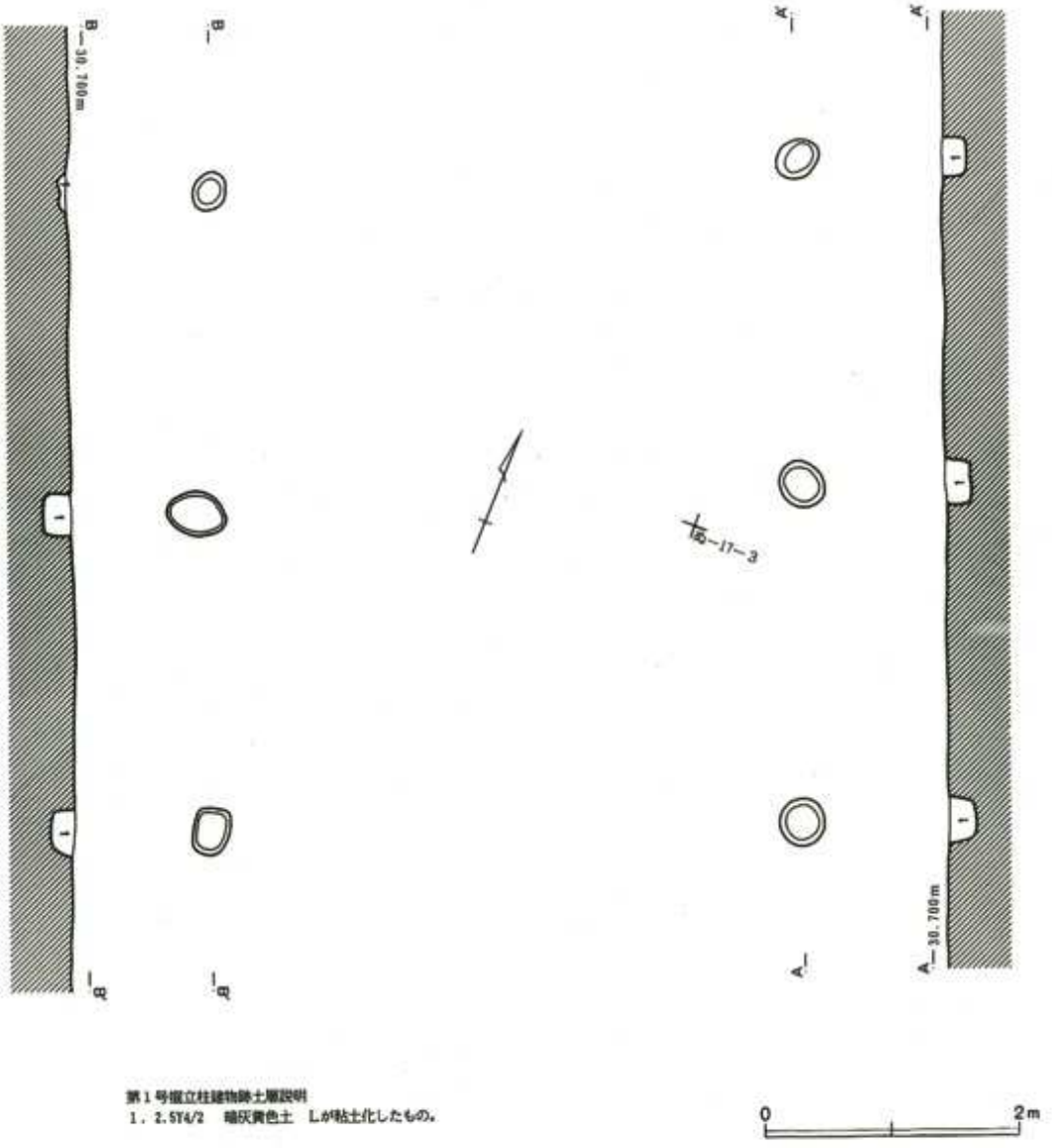
第1号掘立柱建物跡(第121図)

ぬ—17—3グリッドを中心に位置する。柱間1間×2間の南北棟で、桁行5.1m、梁行4.6mを測る。主軸(桁行)方向はほぼN—20°—Wを指す。

柱穴は直径35cm前後の円形で、深さは20cmほどである。断面は円筒形を呈し、底面は平坦となっている。

覆土は単一で、各柱穴に共通している。ほとんど地山の粘質土からなり、しまりの弱さに反して粘性は極めて強い。柱痕や混有物は認められなかった。

遺物の出土はなく、所属時期は不明である。覆土の状態は中世のものを思わせる。



第121図 第1号掘立柱建物跡

(3) 井戸跡

既述のように、砂田遺跡からは18基(2基は土坑番号、第2・15号は欠番)の井戸跡が検出されている。分布的には調査区全体に散在しているが、第1号掘立柱建物跡の北東にはまとまる部分も見られる。すべて素掘りであり、石組みや井戸枠などは確認されなかった。このうち、第3・4・5・10・12号は形状や規模が他とは異なっているなど、井戸以外の遺構であるかもしれない。

砂田遺跡で検出された井戸跡は、ウツギ内遺跡のそれに比して遺存状態が良好である。特に壁の崩落もあまり見られず、概して旧状を保っているようである。やはり、地山の相違に起因するのであろう。覆土もほとんどのものが自然堆積で、明らかに埋め戻されたと思われるものは、第1号井戸跡1基のみである。

なお、井戸跡である第8・9号以外の土坑は掲載しなかったが、いずれも浅い落ち込みで、遺物は出土していない。第1・3号は比較的掘り方のしっかりした土坑で、覆土は井戸跡上位のそれに準じる。第4・5号は長方形で、内部には砂が詰まっている。他は鉄分やマンガンを多く含む染み状の落ち込みである。

第1号井戸跡(第122図)

な—15—24グリッドを中心に位置する。第1号住居跡を切断する円形の井戸跡で、直径約は1.9mを測る。出水が激しいため、底面までは調査できなかった。断面は筒形を呈するものと思われる。壁の崩落は著しく、かなりオーバー・ハングしている。

覆土は6層以下が崩落土、その上層は人為的に埋め戻された土である。埋め戻し土は地山の大型ブロックで構成されており、しまりがなく崩れやすい。

4層中より古瀬戸の尊式花瓶(第124図1)が出土している。埋め戻し時に投棄されたものであろう。花瓶は口縁の一部を欠くものの、製品としてはかなり優れたものである。口径13.6cm、現高16.8cm、底径7.8cmを測り、底面には回転糸切り痕が残る。時期的には、14世紀最終末から15世紀初頭段階のものであろう。

第3号井戸跡(第122図)

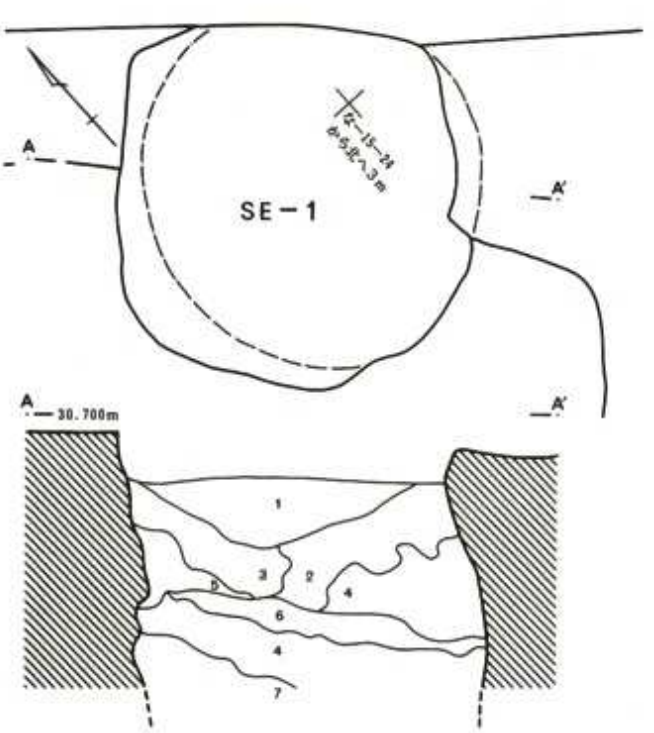
ぬ—17—9グリッドに位置する。平面は略円形で、直径は約0.85mと小型である。断面はU字形を呈し、壁の遺存状態は良好である。底面は中央へ向けて傾斜しており、皿状の窪みとなる。遺構確認面からの深さは約0.9mを測る。

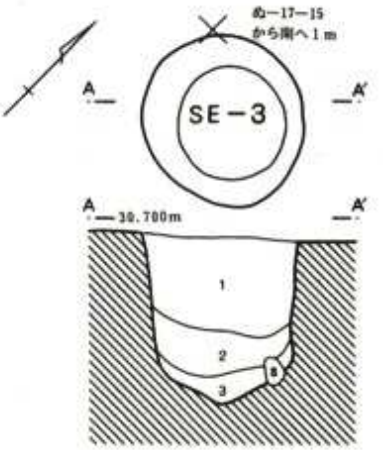
覆土は自然堆積によるもので、崩落や埋め戻された様子は窺われない。遺物の出土は認められなかった。

第4号井戸跡(第122図)

ぬ—17—13グリッドに位置し、現状での平面は径1.3m×1.4mほどの楕円形を呈する。ただし、これは西側の壁が大きく崩落しているためで、本来は円形であったものと推測される。壁の残存する部分から推して、断面形は円筒状が想定される。底面は概ね平坦であり、壁とのなす角度は極めて鋭い。確認面からの深さは約1.2mである。

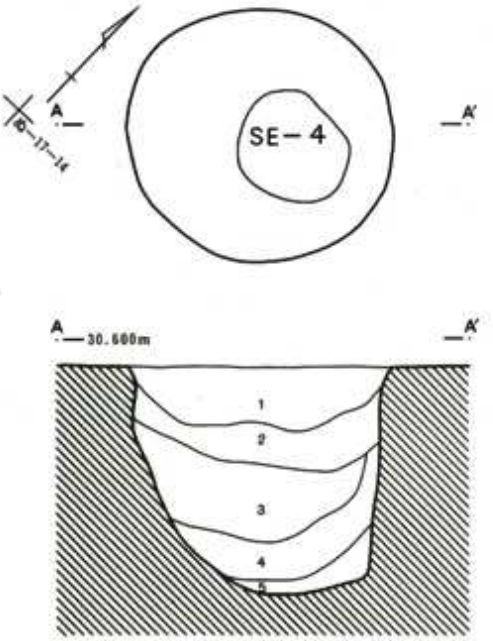
覆土は1・4・5が自然堆積土、2・3が壁の崩落土である。遺物はなんら出土していない。

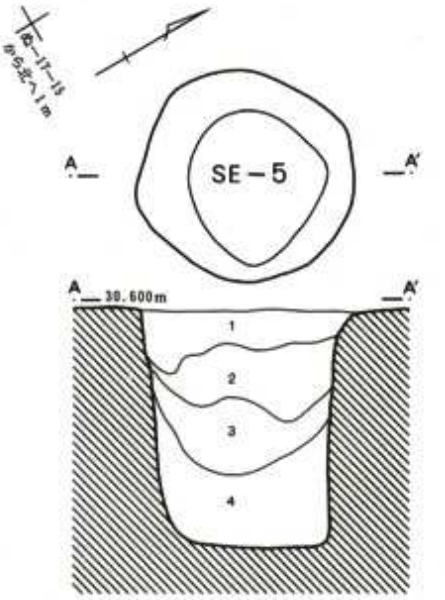




第1号井戸跡土層説明
1．10YR3/2　黒褐色土　L・Gブロックからなる。ボソつく。
2．10YR3/3　暗褐色土　1に近似するが色調暗く、粘性劣る。
3．10YR3/3　暗褐色土　1と2の中間的土層。ボソボソ。
4．10YR3/4　暗褐色土　ほとんどL。Gブロック少。
5．10YR3/4　暗褐色土　4に準ずるがしまり悪くボソボソ。
6．10YR3/3　暗褐色土　しまり・粘性強く、他層との境界は明瞭。
7．10YR3/4　暗褐色土　ほとんど地山L。粘性強い。

第3号井戸跡土層説明
1．10YR3/2　黒褐色土　旧表土？からなり、L粒少。Mn粒多。
2．5B5/1　青灰色土　G，L・C粒少。
3．5B5/1　青灰色土　G，L・C粒少。粘性あり。





第4号井戸跡土層説明
1．10YR7/6　明黄褐色土　L，C粒少。浅間B軽石多。
2．5B4/1　暗青灰色土　G，Lブロック・C粒少。
3．5B4/1　暗青灰色土　2に準ずるが灰白色粘土ブロックを含む。
4．5B6/1　青灰色土　灰白色粘土からなる。Fe粒多量。
5．5B6/1　青灰色土　4に準ずるがFe粒少。

第5号井戸跡土層説明
1．10YR5/2　灰黄褐色土　Lブロック・浅間A軽石少。
2．5B5/1　青灰色土　ややG，Fe粒多。
3．5B5/1　青灰色土　強い粘質土。Fe粒多。
4．10YR5/3　にぶい黄褐色土　強い粘質土。高師小僧を多く含む。

0　2m

第122図　第1・3～5号井戸跡

第5号井戸跡(第122図)

ぬ—17—14グリッドに位置する。第3号井戸跡からは北へ約3m、第4号井戸跡からは西へ約5mを隔てている。平面は直径1.1mほどの不整な円形を呈し、断面はきれいな筒形を呈する。壁面に崩落の様子は見られず、ほぼ旧状が保たれているものと思われる。底面は平坦となり、遺構確認面からの深さはおよそ1.2mを測る。

覆土は自然堆積で、第3・4号井戸と同様グライ土化している。遺物の出土は見られなかった。

第6号井戸跡(第123図)

ぬ—17—15グリッドに位置する。上面は直径約1.2mの円形を呈する。断面は円筒形で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土にも崩落が窺える様子はなく、井戸本来の姿がとどめられているものと考えられる。底部は深さ1.6mほどでいったん平坦となり、中央部のみがさらに20cmばかり掘り下げられている。この皿状の窪みは85cm×60cmほどの楕円形を呈し、底面は平坦に仕上げられている。

覆土は自然堆積を示しているが、拳から人頭大の円礫を多量に含む13層のみは、人為的に投げ込まれた可能性がある。

遺物は覆土中(層位不詳)より、大型の土錘が1点出土している。土錘(第124図1)はほぼ完形で、色調はにぶい黄橙色を呈する。全体は円筒状を呈し、孔の上下端は平らに整形されている。残存長7.6cm、最大径3.4cm、孔径1.5cm、重量87.5gを測る。

第7号井戸跡(第123図)

ぬ—17—20グリッドに位置する。平面は円形を呈し、直径は約1.3mを測る。漏斗状の断面は中位以下が細くすぼまり、径0.6mほどの筒状となる。遺構確認面から底までは約1.65mの深さを有する。底面は丸みが強く、壁への移行は緩やかとなっている。

覆土はすべて自然堆積を示す。下半はグライ土化が進行し、青灰色の粘土となっている。最下層のみは井戸が機能していた時点での堆積と思われ、白色と灰色の薄い粘土層が幾重にも重なり合っている。遺物の出土は見られなかった。

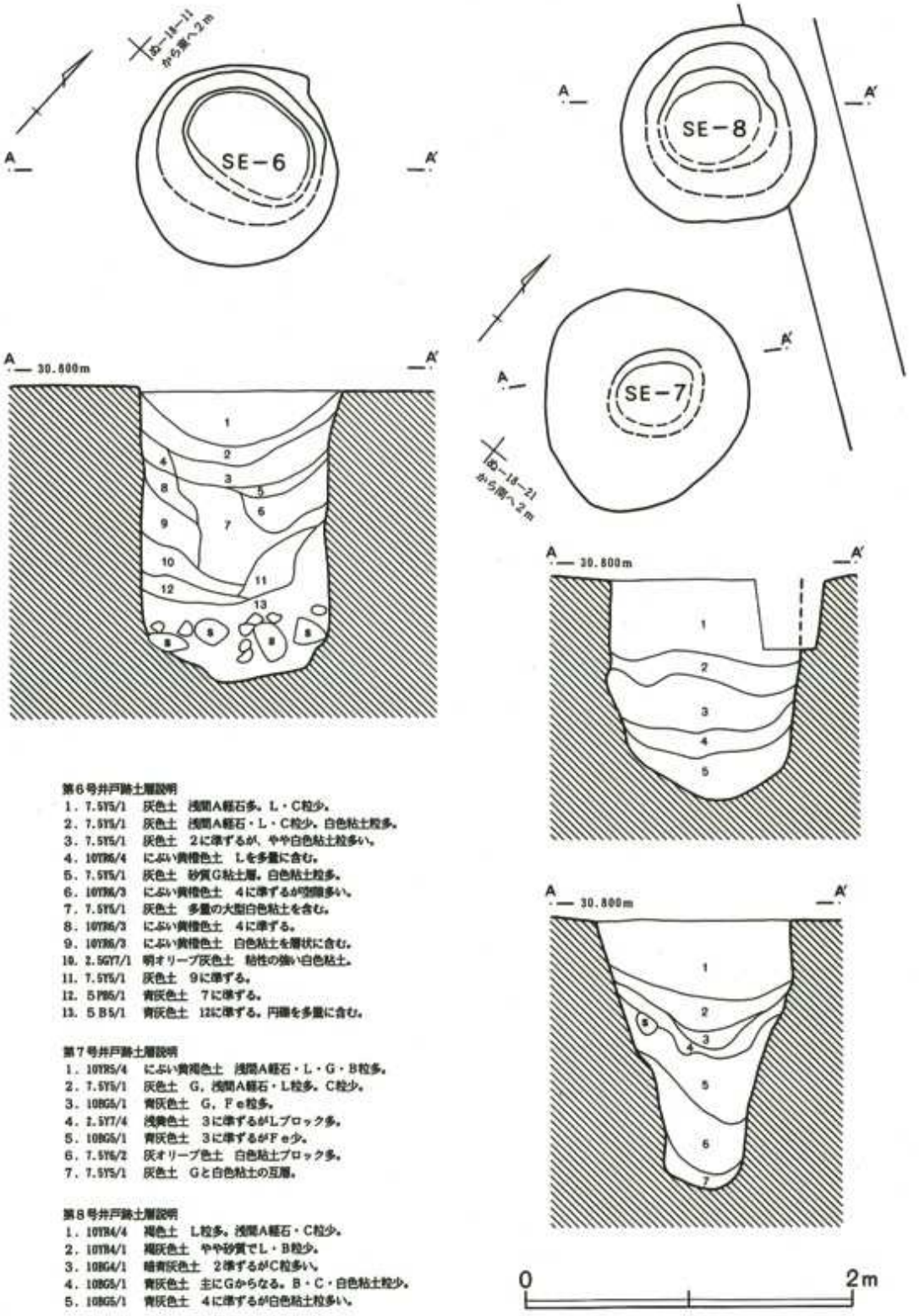
第8号井戸跡(第123図)

ぬ—18—21グリッドを中心に位置する。第7号井戸跡のすぐ北側にあり、その間はわずか50cmにすぎない。現状での重複は観察されなかったため、両者の新旧関係は不明である。平面は直径約1.2mの円形で、断面はU字形をなしている。壁の掘り込みは垂直に近く、遺構確認面から最深部までは1.35mを測る。底部全体は丸底といえるが、中央部は土坑状に一段深くなっている。この部分の径は0.7mほどで、深さは約10cmである。

覆土はいずれも自然堆積によるもので、崩落や埋め戻しなどの様子は認められない。他の井戸跡と同じく、本跡の下層もグライ土化が進行している。遺物の出土はまったくなかった。

第9号井戸跡(全体図参照)

ぬ—18—21グリッド、第8号井戸跡の西3mほどに位置する。確認面での直径は約1.3mを測る。本跡は激しい出水により崩落し、調査不能となってしまった。



第6号井戸跡土層説明
1．7.5Y5/1　灰色土　浅間A軽石多。L・C粒少。
2．7.5Y5/1　灰色土　浅間A軽石・L・C粒少。白色粘土粒多。
3．7.5Y5/1　灰色土　2に準ずるが、やや白色粘土粒多い。
4．10YR6/4　にぶい黄橙色土　Lを多量に含む。
5．7.5Y5/1　灰色土　砂質G粘土層。白色粘土粒多。
6．10YR6/3　にぶい黄橙色土　4に準ずるが礫多い。
7．7.5Y5/1　灰色土　多量の大型白色粘土を含む。
8．10YR6/3　にぶい黄橙色土　4に準ずる。
9．10YR6/3　にぶい黄橙色土　白色粘土を層状に含む。
10．2.5GY7/1　明オリーブ灰色土　粘性の強い白色粘土。
11．7.5Y5/1　灰色土　9に準ずる。
12．5PB5/1　青灰色土　7に準ずる。
13．5B5/1　青灰色土　12に準ずる。円礫を多量に含む。

第7号井戸跡土層説明
1．10YR5/4　にぶい黄褐色土　浅間A軽石・L・G・B粒多。
2．7.5Y5/1　灰色土　G，浅間A軽石・L粒多。C粒少。
3．10BG5/1　青灰色土　G，Fe粒多。
4．2.5Y7/4　浅黄色土　3に準ずるがLブロック多。
5．10BG5/1　青灰色土　3に準ずるがFe少。
6．7.5Y6/2　灰オリーブ色土　白色粘土ブロック多。
7．7.5Y5/1　灰色土　Gと白色粘土の互層。

第8号井戸跡土層説明
1．10YR4/4　褐色土　L粒多。浅間A軽石・C粒少。
2．10YR4/1　褐灰色土　やや砂質でL・B粒少。
3．10BG4/1　暗青灰色土　2に準ずるがC粒多い。
4．10BG5/1　青灰色土　主にGからなる。B・C・白色粘土粒少。
5．10BG5/1　青灰色土　4に準ずるが白色粘土粒多い。

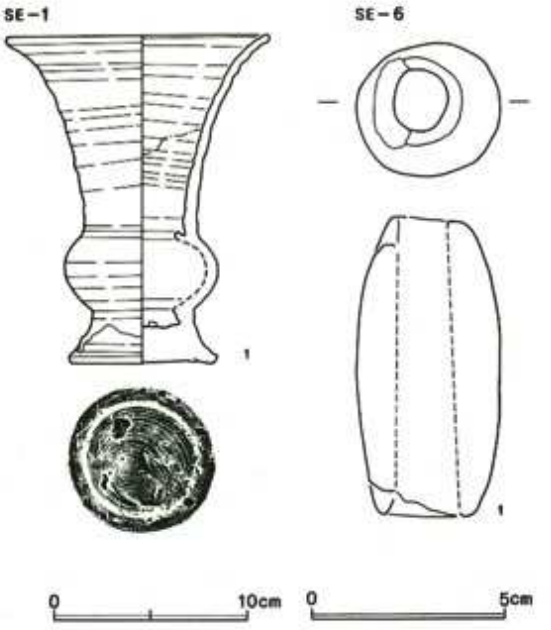
第123図　第6～8号井戸跡

第10号井戸跡(第125図)

ね—18—3グリッドに位置する。上面は直径1.2mの正円形で、断面は逆台形を呈している。底面はやや丸みを持つものの、おおよそは平坦といえる。壁の立ち上がりは急で、壁面は滑らかとなっている。確認面からの深さは約1.1mと浅い。

覆土は自然堆積で、地山の粘質土を主体にしている。

形状や覆土の様子は第2・3・4・12号井戸跡によく似ており、いずれも井戸とするにはやや疑問が残る。遺物の出土が見られないために明確とはしえないが、あるいは、墓坑のような遺構かもしれない。



第124図　第1・6号井戸跡出土遺物

第11号井戸跡(第125図)

ね—18—4グリッドを中心に位置する。平面は直径およそ2.2mの円形を呈し、砂田遺跡の中では最大である。断面形は漏斗状となる。壁はほぼ垂直をなし、深さ約1.1m付近で一度くびれる。これより下位はやや斜めに掘り込まれている。底部は出水のために検出できなかった。調査の及んだ深さは、遺構確認面より約1.8mである。

覆土は主に粘質土からなり、下半部は青灰色のグライ土化している。特に不自然な堆積は観察されず、崩落や故意の埋め戻しの様子も認められない。遺物の出土は見られなかった。

第12号井戸跡(第125図)

第11号井戸跡の北西約13m、ね—19—11グリッドに位置する。平面は不整な円形を呈し、直径約1.4mを測る。断面はしっかりした円筒状であり、壁と底面のなす角度も鋭い。壁はわずかに乱れるものの、概ね垂直となっている。底面はかなり平滑である。

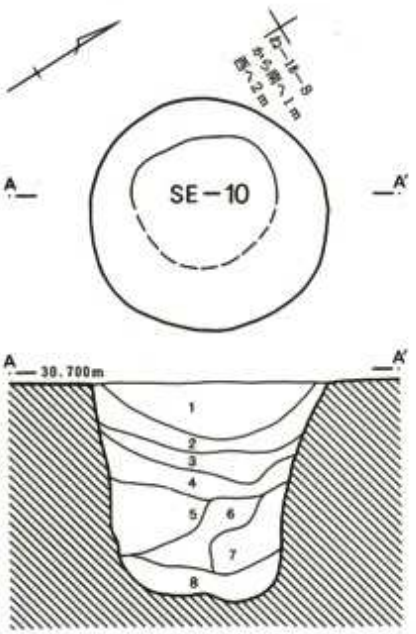
覆土は自然堆積を示し、崩落や埋め戻されたような形跡はない。土層観察では細かく分層したが、大別すれば上半の地山を主体にした層と、下半のグライ土化した粘土層とになる。

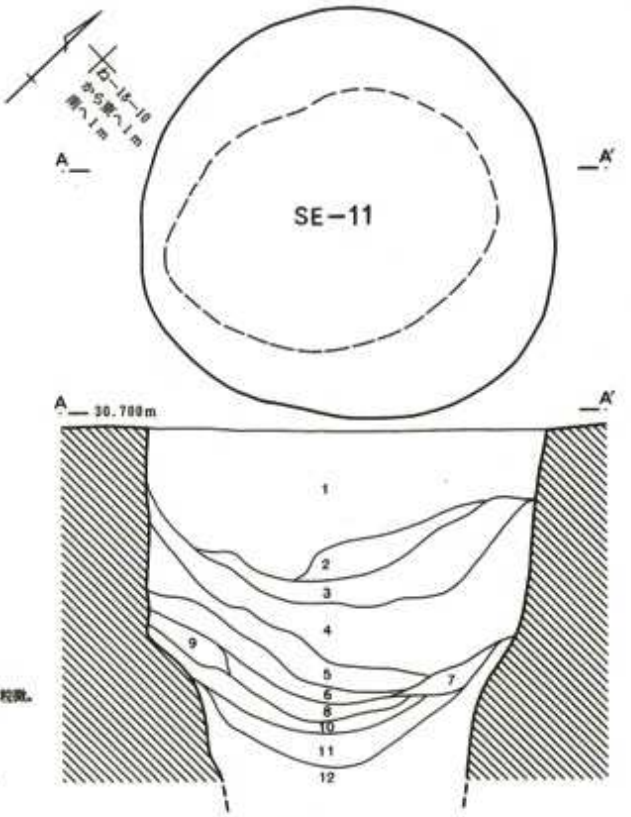
遺物の出土は見られなかった。本跡もその形状や覆土から見て、井戸跡と認定するには躊躇せざるをえない。

第13号井戸跡(第126図)

の—20—6グリッドを中心に位置する。平面は略円形で、規模的には直径およそ1mと小型である。断面形は漏斗状を呈し、現状の壁は緩やかな起伏を有している。底部は丸みが強く、しかも最深部は西側に偏している。ここまでの深さは、遺構確認面より約1.45mを測る。

覆土はすべて自然堆積で、人為的な埋め戻しなどは観察されなかった。他の井戸跡に比べ、下層のグライ土化はあまり進んでいない。本跡からも遺物の出土は見られなかった。



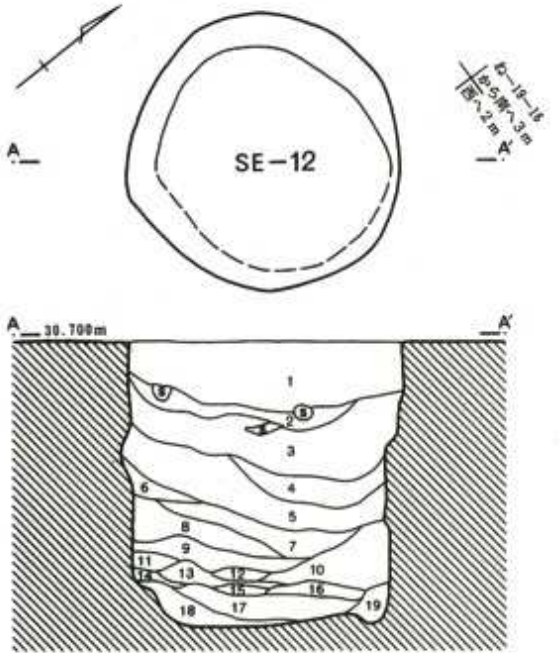


第10号井戸跡土層説明

1．10YR5/1　褐灰色土　旧表土？からなる。浅間A軽石多。B・C粒微。
2．10YR5/1　褐灰色土　L粒を層状に含む。一部は白色粘土化。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　L・Gからなる。C粒微。
4．10YR5/1　褐灰色土　G，白色粘土を層状に含む。
5．10BG4/1　暗青灰色土　4に準ずるが，白色粘土はブロック状。
6．10BG4/1　暗青灰色土　4に準ずるが，白色粘土が多い。
7．5Y7/4　浅黄色土　6よりもさらに白色粘土が多い。
8．5Y7/4　浅黄色土　白色粘土が最も多い。Mn粒多。

第11号井戸跡土層説明

1．5Y5/1　灰色土　浅間A軽石・L多。B・C粒少。
2．5Y5/1　灰色土　1に準ずるが，浅間A軽石やや少ない。
3．5Y5/2　灰オリーブ色土　2に準ずるが，Lが多い。
4．5Y4/1　灰色土　2に準ずるが，Lが極めて少ない。
5．10YR6/6　明黄褐色土　Lからなる。Gブロック多。
6．5B4/1　暗青灰色土　4に準ずるが，Lは少ない。
7．5B4/1　暗青灰色土　6に準ずるが，白色粘土を若干含む。
8．5B4/1　暗青灰色土　6に準ずるが，多量のL粒を含む。
9．10YR6/6　明黄褐色土　5に準ずる。
10．5B4/1　暗青灰色土　6に準ずる。
11．5BG4/1　暗青灰色土　7に準ずるが，白色粘土多い。
12．7.5GY7/1　明緑灰色土　白色粘土からなる。



第12号井戸跡土層説明

1．10YR5/6　黄褐色土　G，L・浅間A軽石多。
2．10YR5/6　黄褐色土　1に準ずるが，L・浅間A軽石が少ない。
3．10YR5/6　黄褐色土　暗色のGからなる。L粒多量。
4．10YR4/1　褐灰色土　3に近似するが，L粒さらに多量。
5．10YR5/1　褐灰色土　暗色のGとLが互層となる。Fe粒多。
6．10YR7/1　灰白色土　Lが滞水で白色粘土化したもの。
7．7.5Y5/1　灰色土　5に近似。互層の発達劣る。
8．5Y8/2　灰白色土　6に暗色のG粒が多少混じる。
9．N4/0　灰色土　5に近似。互層の発達劣る。
10．5Y8/2　灰白色土　6に準ずるが，Fe粒多い。
11．5Y8/2　灰白色土　6に準ずるが，Fe粒ほとんどない。
12．5Y8/2　灰白色土　6に準ずるが，Feが層状に発達。
13．5Y4/1　灰色土　9に準ずるが，白色粘土やや少ない。
14．5Y8/2　灰白色土　6に準ずるが，Fe粒が少ない。
15．5Y8/2　灰白色土　6に準ずるが，Mn粒を含む。
16．5Y5/1　灰白色土　灰茶色の粘土層。Fe・Mn粒少。
17．N5/0　灰色土　9に準ずるが，白色粘土・Fe粒多量。
18．7.5GY5/1　緑灰色土　9に準ずるが，Feを層状に含む。
19．7.5GY5/1　緑灰色土　18に近似。

0　2m

第125図　第10～12号井戸跡

第14号井戸跡(第126図)

ね—20—7グリッドに位置する。現状での上面は1.1m×0.75mほどの楕円形である。これは西側の壁が大きく崩落したためで、本来は直径0.7m前後の円形であったものと推定される。崩落を差し引けば、断面は筒形の範疇で捉えられようが、かなり斜傾したものとなっている。壁面は平滑で、底面へはほぼ直角に移行している。底面は平坦に成形されており、確認面からの深さは約1.9mを測る。

壁の崩落土である6層以外、覆土はすべて自然堆積を示す。ただ全体的には砂質で、グライ土化の進行も上層に及んでいる。遺物はなんら検出されなかった。

第16号井戸跡(全体図参照)

本跡も出水による崩落が起こり、調査途中で埋没してしまった。の—20—12グリッドを中心に位置する。平面は直径1.4mほどの円形である。

第17号井戸跡(第128図)

第12号井戸跡の西およそ4m、ね—19—12グリッドに位置する。直径約2.4mを測る大型の井戸跡である。平面形は壁の崩落のため、不整な円となっている。断面は漏斗状を呈し、壁は乱れて凹凸が強い。本跡も掘り下げるに従って出水が激しくなり、底面を検出することはできなかった。調査の及んだ深さは、遺構確認面より約2mである。

覆土は10層以下がグライ土化した崩落土、他は自然堆積土である。上層には浅間A軽石粒が多く含まれている。遺物の出土は見られなかった。

第18号井戸跡(第126図)

に—17—14グリッドに位置する。平面は径0.7m×0.8mの不整な円形で、砂田遺跡の中では最も規模が小さい。断面形は筒状を呈し、壁面はほぼ垂直を保っている。底部は確認面から約1.7mでいったん平らとなり、中央部のみがさらに径30cm、深さ20cmほど掘る窪められる。

覆土はこれまでの井戸跡とは異なり、浅間A軽石をまったく含んでいない。また、上位から下位へは漸移的な変化を示しており、図示したものも明確な分層ではない。ただし、下層でのグライ土化は顕著である。

遺物は鍔付き甑、高台付椀2、坏2、土師器甕、須恵器甕の胴部片を利用した研磨器が出土している。これらはすべて覆土1層にまとまっていたことから、一括して投棄されたものと考えられる。

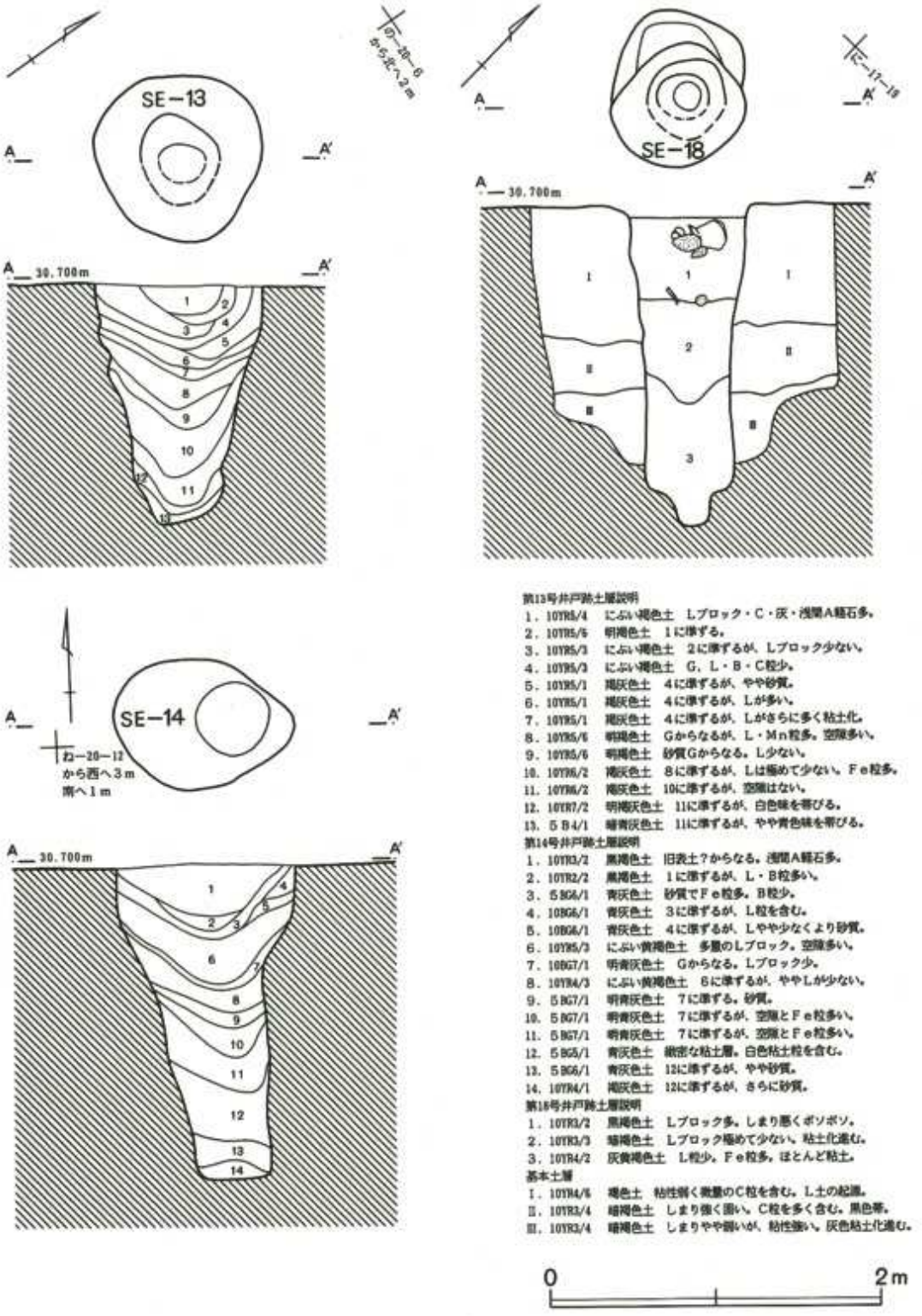
第8号土坑(第128図)

第18号井戸跡の西方およそ9m、に—17—15グリッドに位置する。平面は直径約0.85mの円形を呈し、断面形は筒状となる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁面は平滑となっている。底面は出水のために確認できなかった。

覆土は自然堆積で、旧表土と思われる黒色土を主体にしている。遺物の出土は見られなかった。

第9号土坑(第128図)

に—16—19グリッドに位置し、平面は直径0.75mほどの円形である。出水が激しいために0.6mを掘り下げたにすぎないが、断面は筒状になるものと思われる。



第13号井戸跡土層説明

1．10YR5/4　にぶい褐色土　Lブロック・C・灰・浅間A軽石多。
2．10YR5/6　明褐色土　1に準ずる。
3．10YR5/3　にぶい褐色土　2に準ずるが、Lブロック少ない。
4．10YR5/3　にぶい褐色土　G，L・B・C粒少。
5．10YR5/1　褐灰色土　4に準ずるが、やや砂質。
6．10YR5/1　褐灰色土　4に準ずるが、Lが多い。
7．10YR5/1　褐灰色土　4に準ずるが、Lがさらに多く粘土化。
8．10YR5/6　明褐色土　Gからなるが、L・Mn粒多。空隙多い。
9．10YR5/6　明褐色土　砂質Gからなる。L少ない。
10．10YR6/2　褐灰色土　8に準ずるが、Lは極めて少ない。Fe粒多。
11．10YR6/2　褐灰色土　10に準ずるが、空隙はない。
12．10YR7/2　明褐灰色土　11に準ずるが、白色味を帯びる。
13．5B4/1　暗青灰色土　11に準ずるが、やや青色味を帯びる。

第14号井戸跡土層説明

1．10YR3/2　黒褐色土　旧表土？からなる。浅間A軽石多。
2．10YR2/2　黒褐色土　1に準ずるが、L・B粒多い。
3．5BG6/1　青灰色土　砂質でFe粒多。B粒少。
4．10BG6/1　青灰色土　3に準ずるが、L粒を含む。
5．10BG6/1　青灰色土　4に準ずるが、Lやや少なくより砂質。
6．10YR5/3　にぶい黄褐色土　多量のLブロック。空隙多い。
7．10BG7/1　明青灰色土　Gからなる。Lブロック少。
8．10YR4/3　にぶい黄褐色土　6に準ずるが、ややLが少ない。
9．5BG7/1　明青灰色土　7に準ずる。砂質。
10．5BG7/1　明青灰色土　7に準ずるが、空隙とFe粒多い。
11．5BG7/1　明青灰色土　7に準ずるが、空隙とFe粒多い。
12．5BG5/1　青灰色土　緻密な粘土層。白色粘土粒を含む。
13．5BG6/1　青灰色土　12に準ずるが、やや砂質。
14．10YR4/1　褐灰色土　12に準ずるが、さらに砂質。

第18号井戸跡土層説明

1．10YR3/2　黒褐色土　Lブロック多。しまり悪くボソボソ。
2．10YR3/3　暗褐色土　Lブロック極めて少ない。粘土化進む。
3．10YR4/2　灰黄褐色土　L粒少。Fe粒多。ほとんど粘土。

基本土層

Ⅰ．10YR4/6　褐色土　粘性弱く微量のC粒を含む。L土の起源。
Ⅱ．10YR3/4　暗褐色土　しまり強く固い。C粒を多く含む。黒色帯。
Ⅲ．10YR3/4　暗褐色土　しまりやや弱いが、粘性強い。灰色粘土化進む。

第126図　第13・14・18号井戸跡